

特225
877



0050075-000

特225-877

中世文学選

島津久基・編

中興館

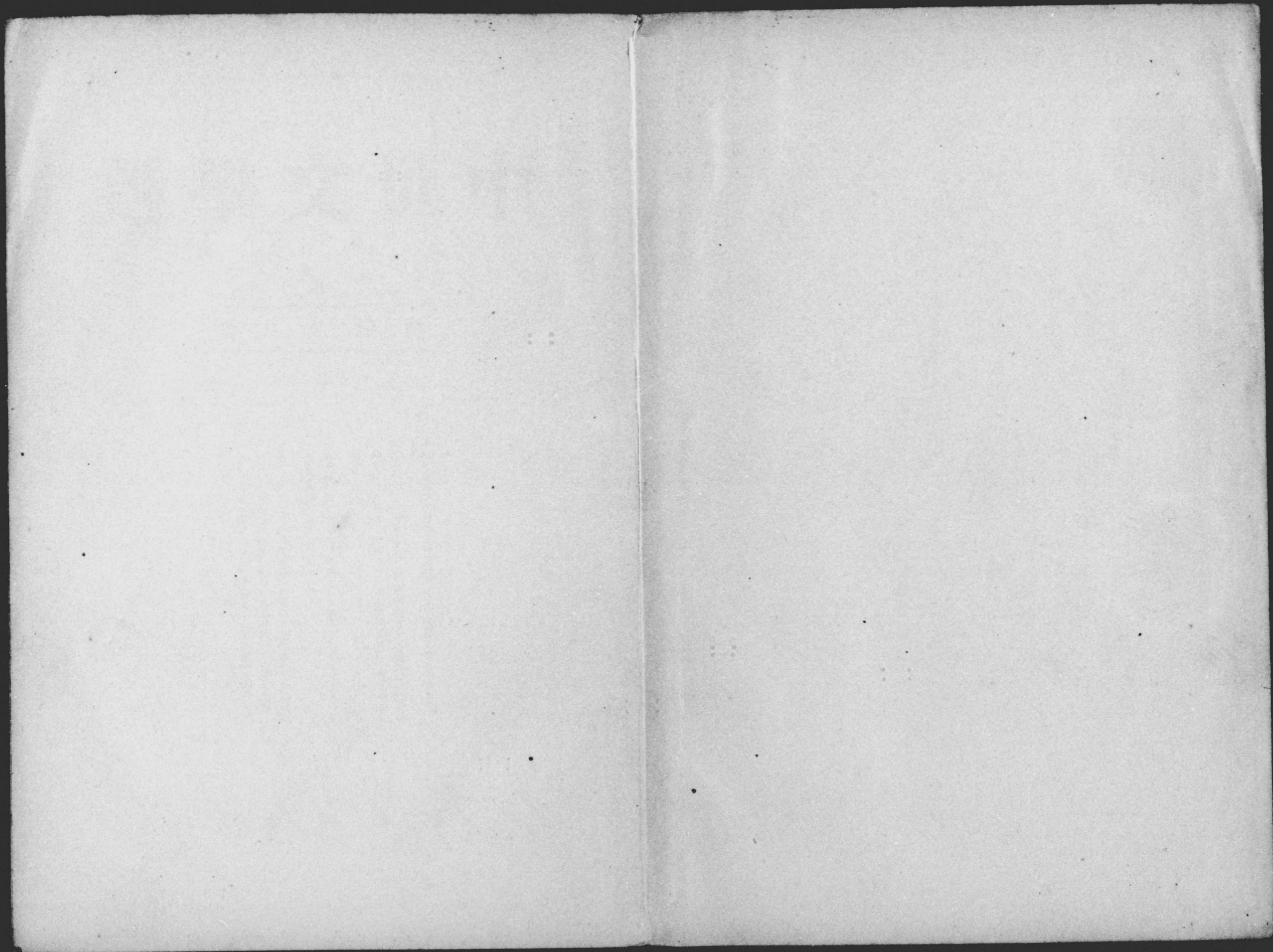
昭和3

AHJ

中華文學選

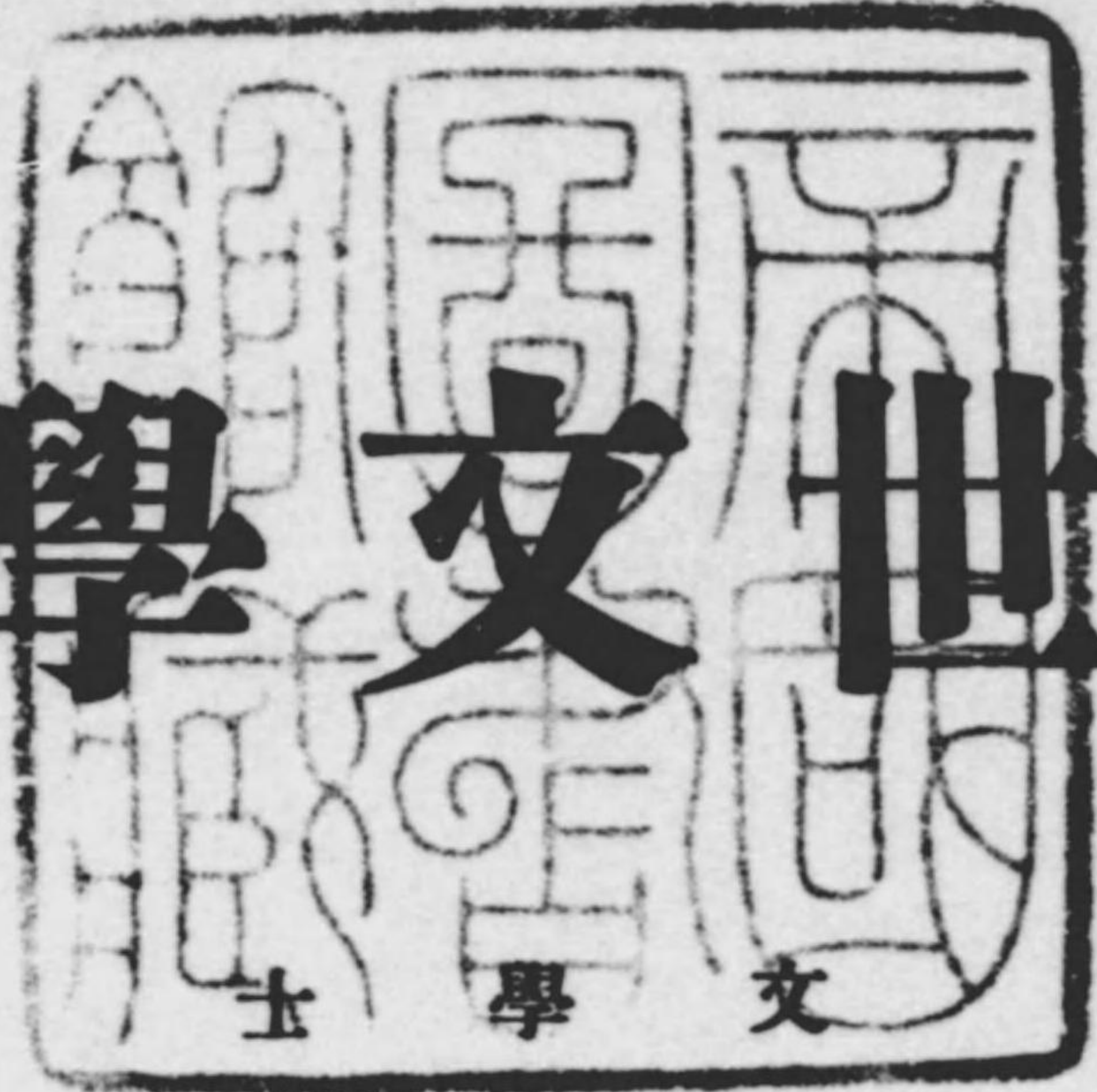
特225

877



特225
877

選學文世中



編基久津島

本書は高等程度學校の教科用として編纂したものである。前編には主として創作を、後編には主として歴史的乃至評論的なものを収録してあるが、中には便宜に随つたものもある。

作品及び作家の排列は、各篇とも大體年代に順つてあるけれども、必ずしも泥んではない。

編纂の方針としては、教授各位の自由な取扱に委したい所備から、なるべく簡潔なかたちをと心がけた。形式の齊整よりも、内容の充實、資料の清新といふ點に考慮を拂つたつもりである。



版 藏 館 興 文 中 京 東

中世文學選目次

前篇

一 夕月夜(新古今集).....	二
二 ころろ(山家集).....	西行法師 六
三 天の原(金槐集).....	源實朝 九
四 飛びくら・鼻くら(宇治拾遺物語).....	三
まうれんこゑん.....	三
猿澤池の龍.....	七
五 日本一の不覺人(平治物語).....	九
六 けぶりの波(平家物語).....	二四
一門都落.....	二四
福原落.....	二九

一二 羅	三
七 武藏野(太平記)	三七
八 かたき(曾我物語)	四一
父御前(大石寺本)	四一
三つある鹿(流布本)	四二
九 清和天皇の御號(義經記)	四七
一〇 歸る雁(新葉集)	五三
二 花の下(連歌)	五九
三 砧(謠曲)	六二
三 安宅(謠曲)	六六
四 武悪(狂言)	七四
五 文山賊(狂言)	七九
六 高館(舞の本)	八三
七 しぐれ(三人法師)	八九

後 篇

一 星月夜(吾妻鏡)	一〇六
岩瀬與一太郎	一〇六
白旗赤旗	一〇九
顔はふはくとして	一一〇
二 物語と人々の上(無名草子)	一一四
源氏のめでたきふし	一二四
清少納言	一二七
紫式部	一二八
大齋院	一三〇
三 墨染(撰集抄)	一三三
みどり子	一三三
明雲大僧正	一三四

四 志深きは(方丈記).....	鴨	長	明	二七	
五 鶯(十訓抄).....	二九	
六 遠島御歌合.....	三三	
七 第十八の願(元久法語).....	法	然	一四	二四	
教法流布の世.....	二四	
如意寶珠.....	二四	
八 往 生.....	親	鸞	一四	二七	
惡人(歎異鈔).....	二七	
愚者(未燈鈔).....	二九	
九 法華經の御故に.....	日	蓮	一五	二五	
佐渡御勸氣鈔.....	二五	
新尼御前御返事.....	二五	
一〇 神皇正統の理(神皇正統記).....	北	島	親	房	一五
二 筆にまかせつゝ(徒然草).....	兼	好	法	師	一五

三 吉野の奥(吉野拾遺).....	松	翁	一六	二
雲居の櫻.....	一六
今いくかありて.....	一六
木曾の麻ぎぬ.....	一六
山伏.....	一六
三 幽 玄(十六部集).....	世	阿	彌	一七
日きかすの眼にも(花傳書).....	一七
柔かなる心を(同、別紙口傳).....	一六
淺深之事(覺習條々).....	一六
幽玄之入(堺事(同)).....	一六
妙所之事(同).....	一七
一四 無上の所に(徹書記物語).....	正	徹	一七	二

一々只身

前篇

前篇の序文は、著者の自叙傳的なものである。著者は、幼少の頃から文学に傾倒し、その情熱を筆に注ぎ、この書に至るに至るまで、常にその理想を追求して来たことを述べている。

本書の目的は、読者に文学の楽しさを知らしめ、その創作の喜びを伝えることにある。著者は、文学が単なる消遣ではなく、人生の意義を追求する手段であると信じている。

本書は、著者の創作経験から得た教訓を、平易な言葉で語り掛ける形式で記述している。読者は、著者の歩みを通じて、文学の奥深い世界へと誘われる。

著者は、読者に「文学は心をつなぐ力である」という信念を込めて、この前篇を綴った。読者の心に響き、創作の火を灯すことを祈る。

本書の序文は、著者の自叙傳的なものである。著者は、幼少の頃から文学に傾倒し、その情熱を筆に注ぎ、この書に至るに至るまで、常にその理想を追求して来たことを述べている。

本書の目的は、読者に文学の楽しさを知らしめ、その創作の喜びを伝えることにある。著者は、文学が単なる消遣ではなく、人生の意義を追求する手段であると信じている。

本書は、著者の創作経験から得た教訓を、平易な言葉で語り掛ける形式で記述している。読者は、著者の歩みを通じて、文学の奥深い世界へと誘われる。

著者は、読者に「文学は心をつなぐ力である」という信念を込めて、この前篇を綴った。読者の心に響き、創作の火を灯すことを祈る。

一夕月夜

元久詩歌合

詩を作らせて歌に合せ侍りしに、水郷春望といふことを

藤原秀能

後白河院第

夕月夜しほみちくらし難波江の葦の若葉を越ゆる白浪 (卷一、春上)

三皇子、北

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに 藤原定家朝臣

院御室

春の夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるゝ横雲の空 (同)

藤原實定

晩霞といふことをよめる 後徳大寺左大臣

などの海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つ白浪 (同)

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて遣しける

皇太后宮大夫俊成

聞く人ぞ涙は落つる歸る雁なきて行くなるあけぼのの空 (同)

五十首の歌奉りし時

藤原雅經

尋ね来て花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月 (同)

釋阿和歌所にて九十の賀し侍りしを、屏風に山に櫻咲きたる所を

太上天皇

後鳥羽院

櫻咲くとほやま鳥のしだり尾のながくし日もあかね色かな (卷二、春下)

俊成の法名

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

風通ふ寝さめの袖の花の香にかをるまくらの春の夜の夢 (同)

山里にまかりてよみ侍りける

能因法師

山里の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける (同)

百首の歌奉りし時

式子内親王

窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたたねの夢 (卷三、夏)

家の百首の歌合

攝政太政大臣

かさねても涼しかりけり夏衣薄き袂にやどる月影 (同)

夏月をよめる

從三位頼政

庭のおもはまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな (同)

百首の歌の中に

式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの聲 (同)

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時

藤原家隆朝臣

明けぬるか衣手寒し菅原や伏見の里の秋の初風 (卷四、秋上)

崇徳院に百首の歌奉りけるに

左京大夫顯輔

藤原良經

(新古今今)

春宮權大

夫公繼

吹けば秋に

おどろく夏

の夜の夢

窓近きいさ

さむら竹風

参考

三皇女

後白河院第

秋風に棚引く雲の絶え間より漏れ出づる月の影のさやけさ (同)

五十首の歌奉りし時

攝政太政大臣

雲はみな拂ひはてたる秋風を松に残して月を見るかな (同)

千五百番歌合に

藤原定家朝臣

秋とだに忘れむと思ふ月影をさもあやにくに打つ衣かな (卷五、秋下)

和歌所にてをのこども歌よみ侍りしに、夕鹿といふことな

藤原家隆朝臣

下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてやひとり鹿の鳴くらむ (同)

百首の歌奉りし秋の歌

式子内親王

桐の葉もふみ分け難くなりけり必ず人を待つとなけれど (同)

春日社の歌合に落葉といふことをよみて奉りし

藤原雅經

移りゆく雲にあらしの聲すなり散るかまさきのかつらぎの山 (同)

冬の歌の中に

太上天皇

冬の夜の長きを送る袖濡れぬ曉がたの四方のあらしに (同)

題しらす

皇太后宮大夫俊成

かつ氷かつは碎くる山川の岩間にむせぶあかつきの聲 (同)

(二) たかどのに

のぼりて見れば天の下四方に煙りて今ぞ宮みぬる

藤原時平

(延喜六年)

日本紀竟

宴和歌)

(三) 何とまた忘

れて過ぐる袖の上にぬれて時雨の驚かすらむ (家長日記)

(三) 清原清光女

待宵の小侍

従の名あり

みつぎ物ゆるされて國宮みぬるを御覽して

仁徳天皇御歌

高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどは賑はひにけり (卷七、賀)

母身まかりにける秋、野分しける日、もと住み侍りける所にまかりて

藤原定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人戀ふる宿の秋風 (卷八、哀傷)

十月ばかり水無瀬に侍りし頃、前大僧正慈圓の許へ、ぬれて時雨のなど申し遣はし

て次の年の神無月、無常の歌數多よみて遣はし侍りし中に

太上天皇

思ひ出づる折り焚く柴の夕煙むせぶも嬉し忘れがたみに (同)

五十首の歌奉りし時

家隆朝臣

明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月の末の白雲 (卷一〇、羈旅)

百首の歌奉りしに山家の心を

小侍 従

樞つむ山路の露に濡れにけりあかつき起きの墨染の袖 (卷一七、雜中)

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに

寂蓮法師

背きてもなほ憂きものは世なりけり身を離れたる心ならねば (卷一八、雜下)

述懐百首の歌よみ侍りけるとき、紅葉を

皇太后宮大夫俊成

あらし吹く峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我が涙かな (同)

*源師光女

題しらす

*宮内卿

(6)

竹の葉に風吹きよわる夕ぐれのものあはれは秋としもなし(同)

題しらす

前大僧正慈圓

何ゆゑにこの世を深くいとふぞと人の問へかしやすく答へむ(同)

—新古今集—

二 ころ

西行法師

花の歌あまた詠みけるに

吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはずなりにき(卷上、春)

花にそむ心はいかで残りけむすて果ててきと思ふわが身に(同)

蛙

眞蒼生ふる山田に水をまかすればうれし顔にも啼く蛙かな(卷上、夏)

みさびゐて月も宿らぬ濁り江に我すまむとて蛙啼くなり(同)

水邊納涼といふ事を北白川にて詠みける

水の音に暑さ忘るゝまとゐかな梢の蟬の聲もまぎれて(同)

撫子

かき分けて折れば露こそこぼれけれ浅茅にまじる撫子の花(同)

山里のはじめの秋といふ事を

さまざまのあはれをこめて梢吹く風に秋知るみ山邊の里(卷上、秋)

人々秋の歌十首よみけるに

萩の葉を吹き過ぎて行く風のおとに心みだるゝ秋の夕暮

わづかなる庭の小草の白露をもとめて宿る秋の夜の月(同)

月の歌あまた詠みけるに

行方なく月に心のすみくゝて果てはいかにならむとすらむ

ながむればいなや心の苦しきにいたくな澄みそ秋の夜の月

浮雲の月のおもてにかゝれども早く過ぐるは嬉しかりけり(同)

題しらす

つくくゝと物を思ふにうち添へてをり哀れなる鐘の音かな

思ひ出づる過ぎにし方を恥かしみあるに物憂きこの世なりけり(卷下、雑)

7)

題しらす

いつのよに長きねぶりの夢覺めて驚く事のあらむとすらむ (同)

題しらす

曉のあらしにたぐふ鐘の音を心の底にこたへてぞ聞く
待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かむとすらむ
何となく泣む度に澄む心かな岩井の水に影寫しつゝ
列なりて風に亂れて鳴く雁のしどろに聲の聞ゆなるかな
ふる畑のそばの立つ木に居る鳩の友呼ぶ聲のすどき夕暮 (同)

木陰の納涼といふ事を人々とみけるに

今日もまた松の風吹く岡へ行かむ昨日すゞみし友にあふやと (同)

讃岐の國へまかりて、みのつと申す津につきて、月のあかくてひゞのても通はぬ

ほどに遠く見えわたりたりけるに云々

世の中を捨てて捨てえぬ心地して都離れぬわが身なりけり
あしよしを思ひわくこそ苦しけれどとあらるればあられける身を (同)

無常 (十首の内)

みぎは近く引寄せらるゝ大綱にいくせのもの命こもれり (同)

雜 (十首の内)

ともになりて同じ湊を出づる舟の行方も知らず漕ぎ別れぬる
山里の心の夢に惑ひをれば吹きしらまかす風の音かな
波高き芦屋の沖を歸る船の事なくて世を過ぎむとぞ思ふ (同)

—山家集—

三天の原

源實朝

正月一日よめる

今朝みれば山も霞みて久方のあまの原より春は來にけり (春)

郭公

郭公きけどもあかす橋の花ちる里のさみだれのころ (夏)

六月賦

あだ人のあだにある身のあだ事を今日水無月の被ひすてつといふ (同)

郭公語らふ
聲はそれな
がらあな覺
東な五月雨
の空 女
橋の香をな
つかしみほ
とぎす花
散る里を尋
れてぞとふ
光源氏
(源氏物
語、花散
里卷)

蟬の鳴くを聞きて

吹く風は涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり (秋)

月前雁

天の原ふりさけみればます鏡きよき月夜に雁なきわたる (同)

名所紅葉

初雁の羽風の寒くなるまゝに佐保の山邊は色づきにけり (同)

箬

笹の葉に霰さやぎてみ山べの嶺の木がらししきりて吹きぬ (冬)

雪

奥山の岩ねにおふるすがの根のねもころ／＼に降れるしら雪 (同)

見わたせば雲居はるかに雪白し富士の高嶺のあけぼのの空 (同)

霧中夕露

旅衣うらがなしかる夕ぐれのすそ野の露に秋風ぞ吹く (雜)

霧中雪

旅衣夜半の片しきさえ／＼て野中の庵に雪降りにけり (同)

* さゝの葉は
み山もさや
にさやげど
も我は妹思
ふ別れ來の
れば
柿本人麿
(萬葉二)

箱根の山をうち出でて見れば、浪のよる小島あり。供の者に此の浦の名は知るや

と尋れしがば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ (同)

三輪社を

今つくる三輪のはふりが杉社すぎにしことはとはすともよし (同)

太上天皇御書下預時歌

山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心我あらめやも (同)

相州の土屋といふ所に、年九十に餘れるくち法師あり。おのづから來り、昔語り

などせしついでに、身のたちぬに堪へずなん成りぬる事を泣く／＼申して出でぬ。

時に、老といふ事を、人々に仰せてつかうまつらせしついでによみ侍りし

なか／＼に老はほれても忘れなでなどか昔をいとしのぶらん (同)

三崎といふ所へまかれりし道に、磯邊の松年ふりにけるを見てよめる

磯の松いくひささにか成りぬらんいたく木だかき風の音哉 (同)

あら磯に浪のよるを見てよめる

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも (同)

濱へ出でたりしに、海士の焚く漢しほ火を見てよめる

いつもかくさびしき物かあしのやに焚きすさびたる海士のもしほ火 (同)

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを、其のあたりの人に尋ねしかば、

父母なん身まかりにしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる (同)

—金槐集—

四 飛びくら・鼻くら

* まうれんこゐん

今は昔、信濃國に法師ありけり。さる田舎にて法師になりければ、まだ受戒もせで、いかで京に上りて、東大寺といふ所にて受戒せむと思ひて、とかくして上りて受戒してけり。さて本の國に歸らむと思ひけれどもよしなし。さる無佛世界のやうなる所に歸らじ、こゝに居なむと思ふ心つきて、東大寺の佛の御前に候ひて、いづくにか行ひして、のどやかに住みぬべき所やあると、萬づの所を見廻しけるに、坤の方に當りて山かすかに見ゆ。そこに行ひて住まむと思ひて行きて、山の中にえもいはず行ひてすぐす程に、すゝろに小さやかなる厨子佛を行ひ出

* 原題
信濃國聖の
事
今昔物語
一一、修行
僧明練始
建信貴山
語第三六、
及び志貴山
縁起繪卷參
照

したり。毘沙門にてぞおはしましける。そこに小さき堂を建ててすゑ奉りて、えもいはず行ひて年月経るほどに、この山の麓に、いみじき下種徳人ありけり。そこに聖の鉢は常に飛び行きつゝ、物は入りて來けり。大きなるあぜ倉のあるをあけて、物取り出だすほどに、この鉢飛びて、例の物乞ひに來たりけるを、「例の鉢來にたり。ゆゝしくふくつけき鉢よ。」とて、取りて倉のすみに投げおきて、とみに物も入れさりければ、鉢は待ち居たりけるほどに、物どもしたためはてて、この鉢を忘れて、物も入れず取りもいださで、倉の戸をさして主歸りぬる程に、とばかりありて、この倉すゝろにゆさ／＼とゆるぐ。いかに／＼と見騒ぐほどに、ゆるぎゆるぎて、土より一尺ばかりゆるぎあがる時に、「こはいかなる事ぞ」と怪しがりて騒ぐ。「まことまこと、ありつる鉢を忘れて、取り出でずなりぬる、それがしわざにや。」などいふ程に、この鉢倉より漏り出でて、この鉢に倉乗りて、たゞのぼりに空さまに一二丈ばかりのぼる。さて飛び行くほどに、人々見のゝしりあさみ騒ぎ合ひたり。倉の主も更にすべきやうもなければ、この倉のいかむ所を見むとて、後に立ちて行く。その邊の人々も皆走りけり。さて見れば、やう／＼飛びて、河内國に、この聖の行ふ山の中に飛び行きて、聖の坊の傍にどうと落ちぬ。いとどあさましと思ひて、さりとてあるべきならねば、この倉主、聖の許に寄りて申すやう、「かゝるあさましき事なむ候ふ。この鉢の常にまうで來れば、物入れつゝまゐらするを、今日

まぎらはしく候ひつる程に、倉にうちおきて忘れて、取りもいさで、錠をさして候ひければ、この倉たゞゆるぎにゆるぎて、こゝになむ飛びてまうで落ちて候ふ。この倉返し給ひ候はむ。」と申す時に、「まことにあやしき事なれど、飛びて来にければ、倉はえ返し取らせじ。こゝにかやうの物もなきに、おのづから物をも置かむによし。中ならむものは、さながら取れ。」とのたまへば、主のいふやう、「いかにしてか、忽ちには運びとり返さむ。千石積みて候ふなり。」といへば、「それはいと易き事なり。たしかにわれ運びて取らせむ。」とて、この鉢に一俵を入れて飛ばすれば、雁などのつゞきたるやうに、残りの俵どもつゞきたる、群雀などのやうに飛びつゞきたるを見るに、いとどあましく尊ければ、主のいふやう、「しばし、皆、な遣はしそ。米二三石はとどめて使はせ給へ。」といへば、聖「あるまじき事なり。それこゝに置きては、何にかはせむ。」といへば、「さらば、たゞ使はせ給ふばかり、十二十をも奉らむ。」といへば、「さまでも入るべき事のあらばこそ。」とて、主の家に確に皆おちむにけり。

かやうに尊く行ひてすぐす程に、その比、延喜の御門重くわづらはせ給ひて、さまぐの御いのりども、御修法・御讀經など萬づにせられると、更にえおこたらせ給はず。或人の申すやう、「河内國信貴と申す所に、この年來行ひて、里へ出づる事もせぬ聖候ふなり。それこそ、いみじく尊く驗ありて、鉢を飛ばし、さて居ながら、萬づありがたき事をし候ふなれ。それを召

*
正しくは大
和國生駒郡

*
法力ある人
に使役せら
るゝ佛法守
護の鬼神

していのりさせ給はば、おこたらせ給ひなむかし。」と申せば、さらばとて、藏人を御使にて召しに遣はす。いきて見るに、聖のさま殊に貴くめでたし。かうく宣言にて召すなり。疾く疾く参るべきよしへば、聖「何しに召すぞ。」とて、更に動きげもなければ、「かうく御惱大事におはします。祈り参らせ給へ。」といへば、「それは参らずとも、こゝながら祈り参らせ候はむ。」といふ。「さては、若しおこたらせおはしましたりとも、いかでか聖の驗とは知るべき。」といへば、「それは、誰が驗といふ事知らせ給はずとも、御心地だにおこたらせ給ひなば、よく候ひなむ。」といへば、藏人「さるにても、いかでか數多の御いのりの中にも、その驗と見えむこそよからめ。」といふに、「さらば祈り参らせむに、劔つるぎの護法*を参らせむ。おのづから御夢にも幻にも御覽せば、さとは知らせ給へ。劔をあみつゝ衣にきたる護法なり。我は更に京へはえ出でじ。」といへば、勅使歸り参りて、かうくと申す程に、三日といふ晝つ方、ちとまどろませ給ふともなきに、きらくとある物の見えければ、如何なる物にかとて御覽すれば、あの聖のいひけむ劔の護法なりと思し召すより、御心地さわくとなりて、聊か心苦しき御事もなく、例ざまにならせ給ひぬ。人々悦びて、聖を尊がりめで合ひたり。帝も限りなく尊く思し召して、人を遣はして、「僧都・僧正にやなるべき。又その寺に庄などや寄すべき。」と仰せ遣はす。聖承りて、「僧都・僧正、更に候ふまじき事なり。又かゝる所に庄など寄りぬれば、別當なにくれな

ど出で来て、なか／＼むづかしく罪得がましく候ふ。たゞかくて候はむ。」とて止みにけり。

興福寺
明練(又は命蓮)小院
小院は小法師の意

かゝるほどに、この聖の姉ぞ一人ありける。この聖、戒せむとてのぼりしまゝ見えぬ、かうまで年比見えぬは、いかになりぬるやらむ、おぼつかなきに尋ねて見むとてのぼりて、東大寺山階寺の邊を、「まうれんこゝん」といふ人がある。」とたづぬれど、知らずとのみいひて、知りたるといふ人なし。尋ねたて、如何にせむ、これが行方聞きてこそ歸らめと思ひて、その夜東大寺の大佛の御前にて、「このまうれんがあり所を教へ給へ。」と、夜一夜申して、うちまどろみたる夢に、この佛仰せらるゝやう、「尋ぬる僧のありかは、これより未申の方に山あり。その山に、雲たなびきたる所を行きて尋ねよ。」と仰せらるゝと見て覺めたれば、曉がたになりけり。いつしか疾く夜の明けよかしと思ひて見居たれば、ほの／＼と明方になりぬ。未申の方を見やりければ、山かすかに見ゆるに、紫の雲たなびきたり。嬉しくて、そなたをさして行きたれば、まことに堂などありと見ゆる所へ寄りて、「まうれんこゝんやいまする。」といへば、「誰ぞ」と出でて見れば、信濃なりし我が姉なり。「こはいかにして尋ねいましたるぞ、思ひがけず」といへば、ありつる有様を語る。「さていかに寒くておはしつらむ、これを著せ奉らむ。」とて、持たりつる物なりとて、引き出でたるを見れば、ふくたいといふものを、なべてにも似ず太き糸して、厚々と細かに強げにしたるを持て來たり。喜びて取りて著たり。もとは紙ぎぬ一

僧服の一種なるべし

重をぞ著たりける。さていと寒かりけるに、これを下に著たりければ、暖かにてよかりけり。

さて多くの年ごろ行ひけり。さてこの姉の尼君も、もとの國へ歸らずとまり居て、そこに行ひてぞありける。さて多くの年ごろ、このふくたいをのみ著て行ひければ、果てにはやれ／＼と著なしてありけり。鉢に乗りて來たりし倉を飛びくらすとぞいひける。その倉にぞ、ふくたいのやれなどは藏めてまだあなる。そのやれの端をつゆばかりなど、おのづから縁にふれて得たる人は、まもりにしけり。その倉も朽ちやぶれていまだあなり。その木の端を、つゆばかり得たる人はまもりにし、毘沙門を作り奉りて持たる人は、必ず徳づかぬはなかりけり。されば聞く人縁を尋ねて、その倉の木の端をば買ひ取りける。さて信貴とて、えもいはず驗ある所にて、今に人々明暮參る。この毘沙門は、まうれん聖の行ひ出し奉りけるとか。(卷八)

* 猿 澤 池 の 龍

* 原題
藏人得業猿
澤池の龍の
事

これも今は昔、奈良に藏人得業惠印といふ僧あり。鼻大きにて赤かりければ、大鼻の藏人得業と言ひけるを、後さまには、言長しとて、鼻藏人とぞ言ひける。猶、後々には、鼻藏々々とのみ言ひけり。

それが若かりける時に、猿澤の池の端に、その月のその日、この池より龍昇らんするなり、

と言ふ簡を建てけるを往來の者、若き老いたる、さるべき人々、ゆかしき事かなと、さゞめき合ひたり。この鼻藏人、をかしき事かな。我がしたる事を、人々騒ぎ合ひたり。をこの事かなと、心中にをかしく思へども、すかしふせんとて、そら知らずして過ぎ行く程に、その月になりぬ。大かた、大和・河内・和泉・攝津國の者まで、聞き傳へて集ひ合ひたり。

惠印、如何にかくは集まる。何かあらんやうのあるにこそ。怪しき事かなと思へども、さりげなくて過ぎ行く程に、既にその日になりぬれば、道もさりあへず奔めき集まる。その時になりて、この惠印思ふやう、たゞ事にもあらじ。我がしたる事なれども、やうのあるにこそと思ひければ、この事、さもあらんすらん。行きて見んと思ひて、頭包みて行く。

大かた近う寄りつくべきにもあらず。興福寺の南大門の壇の上に登り立ちて、今や龍の昇るか昇るか待ちたれども、何の昇らんぞ。日も入りぬ。くらぐになりて、さりとは、かくてあるべきならねば、歸りける道に、一つ橋に、めくらが渡り合ひたりけるを、この惠印、「あな、あぶなの目くらや。」と言ひたりけるを、めくら取りも敢へず、「あらじ、鼻くらななり。」と言ひたりける。この惠印を、鼻藏といふとも知らざりけれども、目くらといふにつけて、あらじ、鼻暗なりと言ひたるが、鼻藏に言ひ合せたるが、をかしき事の一つなりとか。(卷二)

——宇治拾遺物語——

五 日本一の不覺人

(一) 右衛門督藤

原朝臣

(二) 左馬頭源朝

臣

(三) 山城國愛宕郡、大原の南にあり

さる程に平家の軍兵馳せ散つて、^(一)信賴・^(二)義朝の宿所を始めて、謀叛の輩の家々に押し寄せ押し寄せ、火を懸けて焼き拂ひしかば、其の妻子眷屬東西に逃げ迷ひ、山野に身をぞ隠しける。方々に落ち行く人々は、我が行く先は知らねども、跡の烟を顧みて、敵は今や近づくらん、急げ急げと身を揉みけり。(中略)

義朝、八瀬の松原を過ぎられけるに、あとより「や、や」と呼ぶ聲しければ、何者やらんと見給へば、遙に先へ延びぬらんと覺えつる信賴卿追ひつきて、「若し軍に負けて東國へ落ちん時は、信賴をも連れて下らんとこそ聞えしが、心替りかや。」と宣へば、義朝餘りの悪さに腹を居ゑかねて、「日本一の不覺人、斯かる大事を思ひ立ちて、一軍だにせずして、我が身も滅び人をも失ふにこそ。面つれなう物をば宣ふものかな。」とて持ちたる鞭を以て、信賴の弓手の頬先をしたたかに打たれけり。信賴此の返事をもし給はず、誠に臆したる體にて、頻りに鞭目を押撫で押撫でぞせられける。傳子式部大輔助吉是を見て、「何者なれば督殿をば斯くは申すぞ。我人共が心剛ならば、など軍には勝たずして、負けて東國へは下るぞ。」と云ひければ、義朝「あの男に

(一) 正家、初名
次郎正清

(二) 大原より近
江國へ越ゆ
る山

(三) 義家の子爲
義の弟即ち
義朝の叔父
(四) 義朝の二男
義平の弟

物な云はせそ。撃つて捨てよ。」と宣ひければ、鎌田兵衛「何でふ只今さる事の候ふべき。敵や
續き候ふらん。延びさせ給へ。」とて行く處に、又、横河法師上下四五百人、「信頼・義朝が落つ
るなる、撃ち留めん。」とて、龍華越に逆木引き、掻い楯掻いて待ち懸けたり。三十餘騎の兵、
各々馬より飛び下り飛び下り、手々に逆木をば物ともせず、引き伏せ引き伏せ通る處に、大衆
の中より差し詰め引詰め散々に射たりければ、陸奥六郎義隆、首の骨を射られて、馬より倒さ
まに落ちられてけり。中宮大夫進朝長も、弓手の股をしたゝかに射附けられて、鎧を踏みかね
給ひければ、義朝「大夫は矢に中りつるな。常に鎧づきをせよ。裏かゝすな。」と宣へば、其の
矢引きかなぐつて捨て、「さも候はず。陸奥六郎殿こそ痛手負はせ給ひ候ひつれ。」とて、さあ
ぬ體にて馬をば早められける。(中略)

さる程に信頼卿は、義朝に捨てられて、八瀬の松原より取つて返されけり。それ迄は侍共五
十騎ばかりありけるが、「此の殿は人に頬を打たれて返事をだにし給はねば、侍の主には叶ひ
難し。行く末もさこそおはせめ。」と、散りくゞに落ち行きしかば、傳子式部大輔ばかりにぞな
りにける。餘りに疲れて見え給へば、或谷川にて馬より抱き下し、干し飯洗ひて進らせけれど
も、今朝の靦波に驚きて後は、胸塞がりて唾をだにもはかゞしく吞み入れ給はねば、まして
一口も召さざりけり。

又、馬に掻き乗せて、「何處へか入らせ給はん。」と問ひ奉れば、仁和寺へと宣ふ間、蓮臺野へ
ぞ出でにける。山法師の死したるを、葬して歸る者どもにぞ行き逢ひける。法師ばら是を見
て、「此の夜中に忍びて通るは、落人の歸り來るにてぞあらん。撃ち留めて物の具剥げ。」と罵り
ければ、式部大輔取り敢へず、「是は六波羅より落人を追うて、長坂へ向ひて候が、敵は早落ち
延びて候間、歸り参るに、暗さは暗し、御方の勢に追ひ後れて侍るなり。」と答へければ、さも
あらんとや思ひけん、既に通すべかりけるに、法師一人笠標を見んとや思ひけん、「誠にから
ず。野伏もなくて」とて、松明振り舉げて近づけば、信頼先に打たれけるが、あはやと驚きて、
落つるともなく馬より下り、物の具脱ぎ捨てて、鎧直垂より小具足・太刀・刀・馬鞍まで取りま
かなひて、「命ばかりをば助け給へ。」とて、手を合はされければ、式部大輔も剥がれけり。

それより大白衣にて、這ふく仁和寺へ参り、昔の御惠の餘波なれば、御助けぞあらんすら
んとて、頭を延べて参りたる由、申し入れられたり。然のみならず、伏見源中納言師仲卿も参
り、越後中將成親も参られけり。上皇もとより不便に思し召さるゝ人々なれば、傍に隠し置か
れて、先づ主上へ、信頼をば助けさせ給へと、御書を進らせ給ひしかども、敢て御返事もな
かりければ、重ねて「愚老を頼みて参りたる者共なれば、枉げて助け置かせ給へ。」と申させ給
ふ。御使も未だ歸らざるに、三河守頼盛・淡路守教盛、兩人大將にて、三百餘騎、仁和寺に押し

(一) 後白河上皇
(二) 二條天皇

寄せ、信頼を始めて、上皇を頼み進らせて参り集りたる謀叛の輩五十餘人、召し捕つて歸られけり。

越後中將成親朝臣は、鳥摺りの直垂の上に繩附けて、六波羅の馬屋の前に引き据ゑられておはしけり。既に死罪に定まりたりしを、重盛今度の勳功の賞に申し替へて、預り給ひけるなり。此の中將、院の御氣色よき人にて、院中の事申し沙汰せられけるが、重盛出仕の度毎に、芳心せられける故なりとなん。されば、人は情あるべき事にや。

信頼卿をば、左衛門佐して謀叛の仔細を尋ねらる。一事の陳答にも及ばず、只「天魔の勸めなり。」とぞ歎かれける。我が身の重科をも知らず、「今度ばかり如何にも申し助けさせ給へ。」と、絶え伏し申されければ、重盛「あれ程の不覺人、助け置かせ給ひたりとも、何程の事候べき。」と申されしかども、清盛「今度の謀叛の本人なり。上皇の申させ給へども、君も聞し召し入れず。いかでか私には免すべき。早死罪に定まりぬ。疾く斬れ。」と宣へば、左衛門佐、此の上は力に及ばずとて立たれけり。

頓て六條河原にして、既に敷皮の上に引き据ゑたれども、思ひも切れず「あはれ重盛は、さばかりの慈悲者と聞きつるに、などや信頼をば申し助け給はぬやらん。」とて、起きぬ伏しぬ歎きて、悶え焦れ給へば、松浦太郎重俊、斬り手にてありしが、太刀の當て所も覺えねば 押さ

重盛

君不見左
納言右大
史、朝承恩
暮賜死、行
路難不在
水不在
山、祇在人
情反覆間
白樂天
(行路難の
詩の句)
天尊說阿育
王譬喻經に
出づ
寒林に骨を
打つ靈鬼、
泣く前
生の業を恨
む。深野に
花を供する
天人、返す
返すも幾生
の善を喜ぶ
(謠曲山姥)

へて搔き首にぞしける。見苦しかりし有様なり。年來院のきり人にて、諸人の追従を蒙り、去んぬる十日より内裏に候ひて、様々の僻事をなし給ひしかば、百官龍蛇の毒を恐れ、萬民虎狼の害を歎きしに、今日の有様は、乞食非人にも猶劣りたりとぞ、見物の諸人申し合へる。彼の「左納言・右大史、朝に恩を受けて夕べに死を賜はる。」と、白居易の書きしも理かなとぞ覺えし。

爰に、齡七十ばかりなる入道の、柿の直垂に文書袋頸に掛けたるが、平履履き鹿杖突き、市の如く立ち圍みたる人を、搔き分け搔き分け行きければ、右衛門督の年來の下人、主の死骸を收めんとするにやと見る處に、さはなくして、骸をはたと睨み「おのれは」とて、持ちたる杖にて二打三打ちければ、見物の諸人「こは如何に」と言ふに、此の入道が曰く、「相傳の所領を、無理におのれに押領せられ、多くの所従を失ひ、我が身を始めて饑寒の苦痛を見せつるは、おのれが所行にあらずや。斯かる僻事の積りによつて、今既に首を斬られ、入道が目の前に耻を晒すぞ。我れ生きて汝が死骸を打つ。我が杖は死してよも痛まじ。獄卒の笞は今こそ當るらめ。魂魄若しあらば、慥に此の詞を聞け。大貳殿の御嫡子、左衛門佐殿は有道の聞えましますぞ。」とて歸りける。温野に骨を禮せし天人は、平生の善を悦び、寒林に骸を打ちし靈鬼は、前

維盛・資盛、
清經・有盛、
忠房・師盛、
維盛、重盛
の嫡子

さる程に、小松殿の君達兄弟六人、都合その勢一千餘騎、淀の六田河原にて、行幸に追つ附き奉らる。大臣殿斜ならず嬉しげにて、「いかにや今迄の遍參候。」と宣へば、三位中將「少き者共が餘りに慕ひ候を、とかうこしらへ置かんと仕る程に、存じの外の遍參。」と申されければ、大臣殿「など六代殿をば召し具せられ候はぬぞ。心強くも留め給ふものかな。」と宣へば、三位中將「行末とても頼もしうも候はず。」とて、問ふにつらさの涙を流されけるこそ悲しけれ。

落ち行く平家は誰々ぞ。前内大臣宗盛公、平大納言時忠、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫經盛、右衛門督清宗、本三位中將重衡、小松三位中將維盛、同新三位中將資盛、越前三位通盛、殿上人には、内藏頭信基、讃岐中將時實、左中將清經、同少將有盛、丹後侍從忠房、皇后宮亮經正、左馬頭行盛、薩摩守忠度、武藏守知章、能登守教經、備中守師盛、尾張守清定、淡路守清房、若狭守經俊、藏人大夫業盛、經盛の乙子大夫教盛、兵部少輔正明、僧には二位僧都專親、法勝寺執行能圓、中納言律師忠快、經誦坊阿闍梨祐圓、武士には受領檢非違使衛府諸司尉百六十人、都合その勢七千餘騎、これはこの三箇年が間、東國北國度々の軍に討ちもらされて、纒に残る所なり。

山城國乙訓郡

平大納言時忠卿、山崎關戸院に玉の御輿を昇き据ゑさせ、男山の方伏し拜み、「南無歸命頂禮八幡大菩薩、願はくは君を始め参らせて、我等を今一度故郷へ歸し入れさせ給へ。」と、祈られ

けるこそ悲しけれ。各、後を顧み給へば、霞める空の心地して、烟のみ心細うぞ立ち上る。平中納言教盛、

はかなしな主は雲居に隔つれば宿は煙と立ち上るかな
修理大夫經盛、

故郷を焼野が原とかへりみてすゑも煙の波路をぞ行く

誠に故郷をば、一片の烟塵に隔てつゝ、前途萬里の雲路に赴かれけん心の中、推し量られてあはれなり。

淀の川尻

肥後守貞能は、川尻に源氏待つと聞いて、蹴散らさんとて、その勢五百餘騎で發向したりけるが、僻事なればとて取つて返して上る程に、宇度野の邊にて行幸に参り會ひ、急ぎ馬より飛んで下り、大臣殿の御前に参り、畏まつて、「あな心憂や、こは何地へとて渡らせ候やらん。西國へ下られ給ひたらば、落人として、あそこゝにて討ち漏らされて、憂名を流させまします事、口惜しう候べし。唯都の内にて、如何にも成らせ給ふべうもや候らん。」と申しければ、大臣殿「貞能は未だ知らぬか。木曾すでに北國より五萬餘騎で攻め上り、比叡山東坂本に滿ち滿ちたり。法皇も過ぎし夜半に失せさせ給ひぬ。人々は都の中にて如何にも成らんと申し合はれけれども、まのあたり女院二位殿に憂目を見せ参らせんも、我が身ながら口惜しければ、せめ

建禮門院
二位尼、清盛の妻時子

ては行幸ばかりをも成し奉り、各々をも引き具して、西國方へ落ち下り、一先づもと思ふぞかし。』と宣へば、「さ候はば貞能は身の暇を賜はつて、都の中にて如何にも成り候はん。」とて、召し具したりける五百餘騎の勢をば、小松殿の君達たちに附け参らせ、手勢三十騎ばかり都へ取つて返す。平家の餘黨の都に残り留つたるを討たんとて、貞能が歸り入る由聞えしかば、池大納言は、頼盛が身の上でぞ有らんずらんと、大に恐れ騒がれけり。

されども貞能は西八條の焼跡に、大幕引かせ一夜宿したりけれども、歸り入らせ給ふ平家の君達一人もおはせざりければ、さすが世のありさま心細くや思ひけん、源氏の駒の蹄に懸けさせじとて、小松殿の御墓掘らせ、御骨に向ひ奉つて、泣く／＼申しけるは「あなあさまし、御一門の御果て御覽候へ。生ある者は必ず滅す。樂しみ盡きて悲しみ來るといふ事をば、昔より書き置きたる事にて候へども、まのあたりかゝる憂き事候はず。君はかゝるべかりける事かねて悟らせ給ひて、佛神三寶に御祈誓有つて、御世を早うせさせましくける事こそ有難う候へ。如何にもして、その時貞能も後世の御供仕るべう候ひしものを、甲斐なき命存へて、今日はおかゝる憂目に逢ひ候事こそ口惜しう候へ。死期の時は、必ず一佛土へ迎へさせ給へ。」と泣く泣く遙に掻き口説き、骨をば高野へ送り、傍の土をば賀茂川へ流させ、行末頼もしからずや思ひけん、主と後合はせに、東國の方へぞ落ち行きける。貞能は先年宇都宮を申し預つて、そ

生者必滅、
釋尊未免、
梅檀之煙、
樂盡哀來、
天人猶逢、
五衰之日、
後江相公、
詠集、下、
雜、無常

の時情有りしかば、今度も又、宇都宮を頼うで下つたりければ、その好にや芳心しけるとぞ聞えし。

前途程遠、
驢思於雁、
山之暮雲、
後會期遙、
體之曉淚、
後江相公、
詠集、下、
雜、錢別、
源平盛衰記、
三二忠度都、
落の條参照

平家は小松三位中將維盛卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられけれども、次様の人々はさのみ引きしろふにも及ばねば、後會その期を知らず、皆打ち捨ててぞ落ち行きける。人は何れの日何れの時、必ず立ちかへるべしとその期を定め置くだにも別れば悲しき習ぞかし。況やこれは今日を最後、唯今限りの事なれば、行くも留るも、互に袖をぞ絞りける。相傳譜代の好、年來日來の重恩、いかでか忘るべきなれば、老いたるも若きも、皆あとをのみ願みて、前へは進みもやらざりけり。或は磯邊の波枕、八重の潮路に日を暮し、或は遠きを分け、嶮しきを凌いで、駒に鞭うつ人もあり、舟に棹さす者もあり、思ひ／＼心々にぞ落ち行きける。(卷七)

福 原 落

積善之家、
必有餘慶、
積不善之家、
必有餘殃、
(易經文言)

平家は福原の舊里に著いて、大臣殿然るべき侍老少數百人召して宣ひけるは、「積善の餘慶家に盡き、積惡の餘殃身に及ぶが故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ参らせて、帝都を出でて旅泊に漂ふ上は、何の頼みか有るべきなれども、一樹の陰に宿るも先世の契り淺からず、同じ流れを掬ぶも他生の縁猶深し。況や汝等は一且隨ひ附く門客に非ず、累祖相傳の家人

なり。或は近親の好、他に異なるも有り、或は重代芳恩これ深きも有り。家門繁昌の古は、その恩波に依つて私を顧みき。何ぞ今その芳恩を報いざらんや。然れば十善帝王、三種の神器を帯して渡らせ給へば、如何ならん野の末山も奥迄も、行幸の御供申して、如何にも成らんとは思はずや。」と宣へば、老少皆涙を抑へて、「怪しの鳥獸も、恩を報じ徳を酬ゆる心は候なり。況や、人倫の身として、いかでかその理を存知仕らでは候べき。就中弓箭馬上に携はる習、二心あるを以て恥とす。その上この廿餘年が間、妻子を育み所従を顧み候事も、併しながら君の御恩ならずといふ事なし。然れば日本の外、新羅・百濟・高麗・契丹、雲のはて海のはて迄も、行幸の御供仕り、如何にも成り候はん。」と異口同音に申したりければ、人々皆頼もしげにぞ見給ひける。

* 鶯鴒瓦冷霜
華重、翡翠
雲寒誰與共
白樂天
(長恨歌の句)

さる程に、平家は福原の舊里にして、一夜をぞ明されける。折節秋の月は下の弦なり。深更空夜閑にして、旅寝の床の草枕、露も涙に争ひて、唯物のみぞ悲しき。いつ歸るべしとも覚えねば、故入道相國の造り置き給へる福原の所々を見給ふに、春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、泉殿、松蔭殿、馬場殿、二階の棧敷殿、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども、五條大納言國綱卿の承つて造進せられし里内裏、鶯の瓦玉の甃、何れも何れも三年が程に荒れはて、舊苔道を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり、松風のみや通

ふらん。簾絶え聞あらはなり、月影のみぞさし入りける。

明けぬれば福原の内裏に火を懸けて、主上を始め參らせて、人々皆御船に召す。都を出でし程こそ無けれども、これも名残は惜しかりけり。海士の焼く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりくす、すべて目に見耳に觸るる事の、一つとして哀れを催し、心を傷ましめずといふ事なし。昨日は東關の麓に鎧を並べて十萬餘騎、今日は西海の浪の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に浮べり。極浦の浪を分け、鹽に引かれて行く船は、半天の雲に遡る。日數経れば、都は山川程を隔てて、雲居の餘所にぞなりにける。遙々來ぬと思へども、唯盡きせぬ者は涙なり。波の上に白き鳥の簇れ居るを見給ひては、彼ならん、在原のながしの隅田川にて言問ひけん、名もむつまじき都鳥かなと哀れなり。壽永二年七月二十五日に、平家都を落ち果てぬ。(卷七)

(一) 名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
(伊勢物語九段)
(三) 吾妻鏡壽永三年二月七日の記事
(本書一〇九頁参照)

一一 懸

六日の夜半ばかり迄は、熊谷・平山搦手にぞ候ひける。熊谷子息の小次郎を呼うで言ひけるは、「この手は惡所であんなれば、誰先と云ふ事も有るまじきぞ。いさうれ土肥が承つて向うた

る西の手へ寄せて、一の谷の眞先懸けう。」と言ひければ、小次郎「この儀尤も然るべう候。誰もかくこそ申したう候ひつれ。さらばとう寄せさせ給へ。」と申す。熊谷「誠や平山もこの手に有るぞかし。打込みの軍好まぬ者なれば、平山が様見て參れ。」とて、下人を見せに遣はす。案の如く平山は、熊谷より先に出で立つて「人をば知るべからず。季重に於ては一引も引くまじい者を、引くまじい者を。」と、獨言をぞし居たる。下人が馬を飼ふとて「憎い馬の長食ひかな。」とて、打ちければ、平山「さうなせそ。その馬の名残も、今夜ばかりぞ。」とて打立ちけり。下人走り歸つて、主にこの由告げければ、さればこそとて、これも臆て打立ちける。

熊谷がその夜の装束には、かちの直垂に、赤革絨の鎧著て、紅の母衣を懸け、權太栗毛と云ふ、聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。子息の小次郎直家は、澤潟を一入摺つたる直垂に、拵繩目の鎧著て、西樓と云ふ白月毛なる馬にぞ乗つたりける。旗指は黄塵の直垂に、小櫻を黄にかへいたる鎧著て、黄河原毛なる馬にぞ乗つたりける。主従三騎打ちつれ、落さんする谷をば弓手になし、馬手へ歩ませゆく程に、年來人も通はぬ田井畑と云ふ古道を経て、一の谷の波打際へぞ打出でける。

一の谷近う鹽屋と云ふ所有り。未だ夜深かりければ、土肥次郎實平七千餘騎で控へたり。熊谷夜に紛れて、波打際より、そこをばつと馳せ通り、一の谷の西の木戸口にぞ押し寄せたる。そ

の時も未だ夜深かりければ、城の内には静まり返つて音もせず。熊谷子息の小次郎に言ひけるは「この手は悪所であんなれば、我れも我れもと先に心を懸けたる者共多かるらん。既に寄せたれども、夜の明くるを相待つて、この邊にも控へたるらんぞ。心狭う直實一人と思ふべからず。いざ名乗らん。」とて、垣楯の際に歩ませ寄り、鎧踏張り立ち上り、大音聲をあげて、「武藏國の住人熊谷次郎直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣ぞや。」とぞ名乗つたる。

城の内にはこれを聞いて、「よし／＼音なせそ。敵の馬の足疲らかさせよ。矢種を射盡くさせよ。」とて、あひしらふ者こそ無かりけれ。良有つて後より武者こそ二騎續いたれ。「誰そ。」と問へば「季重。」と答ふ。「問ふは誰ぞ。」「直實ぞかし。」「如何に熊谷殿はいつよりぞ。」「宵より。」とこそ答へけれ。「季重も臆て續いて寄すべかりつるを、成田五郎にたばかられて、今迄は遅々したりつるなり。成田が死なば一所で死なんと契りし間、打連れて寄せつれば「痛う平山殿、先懸早りなし給ひそ。軍の先をかくると云ふは、御方の勢を後に置いて、先をかけたればこそ、高名不覺をも人に知らるれ。あの大勢の中へ唯一騎かけ入つて討たれたらんには、何の詮にか合ふべき。」と云ふ間、げにもと思ひ、小坂の有りつるを打ち登せ、下り様に馬の首を引き立て、御方の勢を待つ處に、成田も續いて出で來り、打ち並べて軍の様をも言ひ合はせんするかと思ひたれば、さはなくして、季重が方をばすげなげに見なしつゝ、傍をつと馳せ通る間、

衰れこの者季重たばかつて、先かくるよと思ひ、五六段ばかり進んだるを、あれが馬は我が馬より弱げなるものと目をかけ、一鞭打つて追つ附き、「如何に成田殿は、正なうも季重程の者をたばかり給ふものかな。」と言ひかけ、打ち捨てて寄せつれば、今は遙に下りぬらん。よも後影をば見たらじ。」とこそ語りけれ。

さる程にしのもめやうく明け行けば、熊谷・平山かれこれ五騎でぞ控へたる。熊谷は先に名乗りたりけれども、平山が聞く前にて、又名乗らんとや思ひけん、垣楯の際へ歩ませ寄り、鑑ふんばり立ち上り、大音聲を揚げて、「抑々以前名乗つたる武藏國の住人熊谷次郎直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣ぞや。」とぞ名乗つたる。城の内にはこれを聞いて、いざ終夜名乗る熊谷父子を提げて來んとて、進む平家の侍誰々ぞ。越中次郎兵衛盛績、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、後藤内定經を先として、宗徒の兵廿餘騎、木戸を開いてかけ出でたり。

こゝに平山は滋目結の直垂に、緋緘の鎧著て、二引兩の母衣をかけ、目槽毛と云ふ聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。旗指は黒革緘の鎧に、甲猪頸に著なしつゝ、宿月毛なる馬にぞ乗つたりける。「保元平治二箇度の軍に、先がけて高名したる武藏國の住人平山武者所季重」と名乗つて、喚いてかく。熊谷かくれば平山續き、平山かくれば熊谷續き、互にわれ劣らじと、入れ替へ入れ替へ、名乗り替へ名乗り替へ、揉みに揉んで、火出づる程にぞ攻めたりける。平家の侍

共、熊谷・平山に、餘りに手痛う攻められて、叶はじとや思ひけん、城の内へ颯と引いて、敵を外様になしてぞ防ぎける。

熊谷は馬の太腹射させ、はぬれば、弓杖突いて下り立つたり。子息の小次郎直家も、生年十六歳と名乗つて、眞先かけて戦ひけるが、弓手の肘を射させ、これも馬より下り、父と並んでぞ立つたりける。熊谷「如何に小次郎は手負うたるか。」「さん候。」「鎧づきを常にせよ、裏かかすな、鏝を傾けよ、内甲射さすな。」とこそ教へけれ。熊谷は鎧に立つたる矢どもかなぐり捨て、城の内を睨まへ、大音聲をあげて「去年の冬鎌倉を立ちしより以來、命をば兵衛佐殿に奉り、骸を一の谷の汀に曝さんと思ひ切つたる直實ぞかし。さんぬる室山水島二箇度の軍に打ち勝つて、高名したりと名乗るなる、越中次郎兵衛、上總五郎兵衛、悪七兵衛はないか。能登殿はおはせぬか。高名不覺も敵に依つてこそすれ。人毎にはえせじものを。唯熊谷父子に落ち合へや。組めや組め。」とぞのゝしつたる。

城の内にはこれを聞いて、越中次郎兵衛盛績、好む裝束なれば、紺村濃の直垂に、赤緘の鎧著て、鉞形打つたる甲の緒をしめ、金作の太刀をはき、二十四差いたる切斑の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて、乗つたりけるが、熊谷父子を目に懸けて歩ませ寄る。熊谷父子も中を破られじと、間も透さず立ち並び、太刀を抜いて額に當て、後へ

は一引も引かず、いよく前へぞ進んだる。越中次郎兵衛これを見て、叶はじとや思ひけん、取つて返す。熊谷「あれは如何に、越中次郎兵衛とこそ見れ。敵にはどこを嫌ふぞ。押し並べて組めや組め。」と言ひけれども、次郎兵衛さもさうすとて引き返す。上總悪七兵衛これを見て、「きたない殿原の振舞かな。しや組まんするものを、落ち合はぬ事はよも有らじ。」とて、既にかけて組まんとしければ、次郎兵衛、悪七兵衛が鎧の袖を控へて、「君の御大事これに限るべからず。有るべうもなし。」と制せられて、力及ばで組まざりけり。

その後熊谷は乗替に乗つて、喚いてかく。平山も熊谷父子が戦ふ間に、馬の息休め、これも同じう續いたり。平家の方にはこれを見て、唯射取れや射取れとて、さし詰め引き詰め散々に射けれども、敵は小勢なり、御方は大勢なりければ、勢に紛れて矢にも當らず。唯押し並べて組めや組めと下知しけれども、平家の方の馬は、飼ひは稀なり、乗りしげし。舟に久しう立てたりければ、皆彫りきつたる様なりけり。熊谷・平山が乗つたる馬は、飼ひに飼うたる大の馬どもなり。一當て當てば皆蹴倒されぬべき間、流石押し並べて組む武者一騎も無かりけり。こゝに平山は、身に替へて思ひける旗指を討たせて、安からずや思ひけん、城の中へかけ入り、やがてその敵の首取つてぞ出でたりける。熊谷父子も分捕數多してげり。熊谷は先に寄せたれども、木戸を開かねばかけ入らず。平山は後に寄せたれども、木戸を開けたればかけ入りぬ。さてこそ

熊谷・平山が、一二の懸をば争ひけれ。(卷九)

— 平家物語 —

七 武藏野

元弘三年

かゝりける處に、新田太郎義貞、去んぬる三月十一日、先朝より給旨を給ひたりしかば、千

北條高時

劍破より虚病して本國へ歸り、便宜の一族達を潜に集めて、謀叛の計略をぞめぐらされける。かゝる企ありとは思ひ寄らず、相模入道、舍弟の四郎左近大夫入道に、十萬餘騎を差し副へ

泰家

て京都へ上せ、畿内西國の亂を鎮むべしとて、武藏・上野・安房・上總・常陸・下野、六箇國の勢をぞ催されける。其の兵糧の爲にとて、近國の庄園に、臨時の天役をかけられける。中にも、

上野國

新田庄世良田には、有徳の者多しとて、出雲介親連、黒沼彦四郎入道を使にて、六萬貫を五日が中に沙汰すべしと、堅く下知せられければ、使、先づ彼の所に在んで、大勢を庄家に放ち入れて、譴責する事法に過ぎたり。新田義貞是を聞き給ひて、「我が館の邊を、雜人の馬の蹄にかけさせつる事こそ、返すくも無念なれ。いかでか見ながら怵ふべき。」とて、數多の人勢を差向けられて、兩使を忽ちに生捕つて、出雲介をば縛め置き、黒沼入道をば頸を斬つて、同日の暮程に、世良田の里中にぞ梟けられける。

相模入道此の事を聞きて、大いに忿つて宣ひけるは、「當家世を執つて既に九代、海内悉く其の命に隨はずといふ事更に無し。然るに近年邊境動もすれば武命に隨はず、近國常に下知を輕んずる事奇怪なり。剩へ藩屏の中にして、使節を誅戮する條、罪科輕きにあらず。此の時若し緩々の沙汰を致さば、大逆の基と成りぬべし。」とて、則ち武藏・上野兩國の勢に仰せて、新田太郎義貞・舍弟脇屋次郎義助を討つて進らすべしとぞ下知せられける。

義貞是を聞きて、宗徒の一族達を集めて、此の事如何有るべきと評定有りけるに、異議區々にして一定ならず。或は、沼田庄を要害にして、利根川を前に當て、敵を待たんと云ふ議もあり。又、越後國には、大略當家の一族尤も満ちたれば、津張郡へ打ち越えて、上田山を伐り塞ぎ、勢を附けてや防ぐべきと、意見定まらざりけるを、舍弟脇屋次郎義助、暫らく思案して、進み出でて申されけるは、「弓矢の道、死を輕んじて、名を重んずるを以て義とせり。就中、相模守天下を執つて百六十餘年、今に至る迄武威盛んに振うて、其の命を重んぜずと言ふ處なし。されば、縦ひ利根川をさかうて防ぐとも、運盡きなば叶ふまじ。又、越後國の一族を憑みたりとも、人の意不和ならば、久しき謀にあらず。さしたる事もし出さぬものゆゑに、此處彼處へ落ち行きて、新田の某こそ、相模守の使を斬りたりし咎に依つて、他國へ逃げて討たれたりしなど、天下の人口に入らん事こそ口惜しけれ。」とても討死をせんずる命を、謀叛人と

上野國

謂はれて、朝家の爲に捨てたらんは、無からん跡までも、男は子孫の面を悦ばしめ、名は路徑の尸を清むべし。先立つて給旨を下されぬるは、何の用にか當つべき。各々宣旨を額に當て、運命を天にまかせて、唯一騎なりとも國中へ打ち出でて、義兵を擧げたらんに、勢付かば、惣て鎌倉を責め落すべし。勢つかずば、只鎌倉を枕にして、討死するより外の事やあるべき。」と、義を先とし男を宗として宣ひしかば、當座の一族三十餘人、皆、此の議にぞ同じける。

さらば惣て事の漏れ聞えぬ前に打ち立てとて、同五月八日の卯の刻に、生品明神の御前にて旗を擧げ、給旨を披いて三度是を拜し、笠懸野へ打ち出でらる。相隨ふ人々、氏族には、大館次郎宗氏・子息孫次郎幸氏・二男彌次郎氏明・三男彦二郎氏兼・堀口三郎貞満・舍弟四郎行義・岩松三郎經家・里見五郎義胤・脇屋次郎義助・江田三郎光義・桃井次郎尙義、是等を宗徒の兵として、百五十騎には過ぎざりけり。此の勢にては如何と思ふ處に、其の日の晩景に、利根川の方より、馬物具爽かに見えたりける兵二千騎ばかり、馬煙を立てて馳せ來る。すはや敵よと目に懸けて見れば、敵にはあらずして、越後國の一族に、里見・鳥山・田中・大井田・羽川の人々にてぞおはしける。

義貞大いに悦びて、馬を控へて宣ひけるは、「此の事かねてより其の企はありながら、昨日今日とは存ぜざりつるに、俄に思ひ立つ事の候ひつる間、告げ申すまでなかりしに、何として存

新田の附近
にあり。前
橋へ行く通
路

高氏の幼名、
 義詮の幼名、
 行末は空の
 武蔵野に草
 づの原より出
 藤原良經
 (新古今) 四、秋上
 武蔵野は月
 の入るべき
 山もなし草
 より出でて
 草にこそ入
 れ
 義人不知
 (古歌)
 武蔵野や行
 けども秋の
 はてそなき
 いかなる風
 の末に吹く
 らむ
 源通光
 (新古今) 四、秋上
 武蔵野は月
 の入るべき
 の嶺もなし
 花が末にか
 かる白雲
 源通方
 (新古今) 四、秋上

ぜられける。」と問ひ給ひければ、大井田遠江守、鞍壺に長つて申されけるは、「勅詔によつて大義を思し召し立たる、由承り候はずば、何としてかやうに馳せ参じ候べき。去る五日御使とて、天狗山伏一人、越後の國中を一日の間に、觸れ廻りて通り候ひし間、夜を日に繼いで馳せ参つて候。境を隔てたる者は、皆明日の程にぞ参著候はんすらん。他國へ御出で候はば、且く彼の勢を御待ち候へかし。」と申されて、馬より下りて各々對面色代して、人馬の息を繼がせ給ひける處に、後陣の越後勢並びに甲斐・信濃の源氏共、家々の旗を指し連れて、其の勢五千餘騎、夥しく見えて馳せ來る。

義貞・義助斜ならず悦びて、「是偏に八幡大菩薩の擁護による者なり。且くも逗留すべからず。」とて、同九日武藏國へ打ち越え給ふに、紀五左衛門、足利殿の御子息千壽王殿を具足し奉り、二百餘騎にて馳せ著きたり。是より上野・下野・上總・常陸・武藏の兵ども、期せざるに集り、催さざるに馳せ來つて、其の日の暮程に、二十萬七千餘騎、冑を並べ控へたり。されば四方八百里に餘れる武藏野に、人馬ともに充ち満ちて、身を持つるに處なく、打ち圍うたる勢なれば、天に飛ぶ鳥も翔る事を得ず、地を走る獸も隠れんとするに處なし。草の原より出づる月は、馬鞍の上にほのめきて、甲の袖に傾けり。尾花が末を分くる風は、旗の影をひらめかし、親の手鎖まる事ぞなき。

怒臂以當
 不勝任矣
 地(莊)子
 欲以螻蟻
 之斧鑿
 車之隆
 (文選) 四
 發鳩之山有
 鳥名曰炎
 帝之女往
 遊于東海
 溺而不反
 是故精衛常
 取西山之
 石以填之
 東海
 (山海經)
 齊の誤
 伍子胥諫
 曰夫越腹
 心之病云々
 (史記) 六
 六、伍子
 胥列傳第
 六
 (五) 河津三郎助
 道正しく
 は祐泰

かゝりしかば、國々の早馬鎌倉へ打ち重なつて、急を告ぐる事櫛の齒を引くが如し。是を聞いて時の變化をも計らぬ者は、「あなごとくし、何程の事かあるべき。唐土天竺より寄せ來るといはば、げにも眞しかるべし。我が朝秋津島の内より出でて、鎌倉殿を亡さんとせん事、螻蟻車を遮り、精衛海を填めんとするに異ならず。」と、あざみ合へり。物の心をも辨へたる人は、「すはや大事出で來ぬるは。西國・畿内の合戦未だ鎮まらざるに、大敵又藩籬の中より起れり。これ伍子胥が吳王夫差を諫めしに、「昔は瘡痍にして、越は腹心の病なり。」と言ひしに異ならず。」と恐れ合へり。(卷二〇)

八かたき

父御前

新玉の年立歸り、一萬は九つ、箱王は七つにぞ成りにける。或夕暮、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。まことやらむ、父の御事は佛になりてましますとや。其の佛は何國にましますぞや。行きておがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ。」と言ひければ、遙に忘れたる去方も、今さら思ひ

— 太平記 —

相模國住人
曾我太郎助
(祐)信

出されて、消え入るばかりに思はれける。母泣くくゝのたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と、心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王、重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一郎とやらんに射られ死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。又我等がこの里に在りと知らずや過ぐらん。」などと、おとなしく語りければ、母より始めて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ秋も開け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ列りたる雁金の、南を指して飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿。空に飛ぶ翼も、皆別の翼ぞまじへさりける。五つ連れたる雁の中に、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物いはぬ鳥類さへ、かくの如し。我等は人倫に生れながら、和殿は弟我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば、河津殿と申して有りしとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふ様に物をも射ありきなん。我々より幼き者にも、馬鞍弓矢を持つて、物を射ありく事の羨ましさを。これ等の事共思ひ續ければ、いつより今宵は、父御前の戀しく

おはしますぞや。」とて、袖に顔をさし入れて、さめくゝと泣きければ、弟も小さかしく顔を合せて泣き居たり。

一萬が乳母の女房これ聞きつゝ、「あな淺まし、人もこそ聞け。いかに和上藤達。夜も更けぬるに、さやうにては御坐すぞ。とくくゝ入らせ給へ。」と、怖ろしげに言ひければ、二人の者は、門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて、後に内に入りけり。

其の後は、二人の者ども、我が身の程を知りぬれば、おくれし父を慕ひつゝ、語り合ふまではなけれども、たゞ、目ばかりを見合せて、互に袖をぞ濡しける。(巻第四)

—大石寺本曾我物語—

三つある鹿

梶原源太左衛門景季は、未だ鹿に逢はずして、落ち来る鹿を待ち掛けつゝ、駆け並べ、よつびいて放つ。然れども、上を遙に射越して通しけり。景季取り敢へず斯くこそ申しけれ。

夏草の繁みが下を行く鹿の袖の横矢は射にくかりけり

君聞し食して、神妙なりとて、これも富士の裾野にて百餘町をぞ賜はりける。人々これを聞いて、「鹿射外し、歌詠みてだに恩賞に預る。ましてよく留めたらん輩は如何に。」とぞ申しける。

御寮、左衛門尉祐經を召して、「不審なる事あり、用心せよ。」と仰せ下されければ、畏り存じ候由を申しける。こゝに梶原源太景季、侍の所司にて、總奉行第一の者なれば、上の御説を承り、曾我の人々を近づけて申しけるは、「神妙に御供申されて候。奉公は何れも同じ事、御宿に大事の御物具あり。留守の御宿直申されよ。如何様今度鎌倉へ入らせましまして、御免蒙ぶり給ふべし。奉公心に入れられよ。」と申しければ、祐成是非に及ばずして、「畏り入り候。よき様に御申し候へ。頼み奉る。」とぞ返事しける。源太重ねて申すやう、「御給仕に出つて、本領仔細あらじと存じ候。」と言ひてこそ歸りにけれ。

時致これを開きて、「あはれ源太、我々を賺さんと思ひたる氣色のさし現はれたる奴かな。蛇は一寸を出して其の大小を知り、人は一言を以て其の賢愚を知る。狐の子は子狐より父が孫を繼ぎて、此の冠者が頼の白さよ。いつの奉公に由りてか、御氣色もよかるべき。定めて御寮の仰には、その冠者原は、誰が許して狩場へは出でけるぞ。よく／＼賺し置きて首を斬れとの御説か、流罪せよとの仰にてぞ有るらん。げにや古き詞を案ずるに、「國は實を以て興し、諛を以て衰ふ。君は忠を以て安じ、偽を以て危し。」人は巧にして偽らんよりも、拙うして誠あるには如かず。此の者の振舞は、世の煩ひとも成りぬべし。その上奉公申すべき爲ならず。あはれ身に思ひだに無かりせば、此の冠者が頼一太刀斬つて慰まんするものを。」とぞ申しける。

さて兄弟は、見え隠れに連れつ離れつ、心を盡し狙ひけるこそ無慙なれ。十郎が其の日の装束には、萌葱匂の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、夏毛の行勝深く引つこうで、鷹うすべうの鹿矢、管高に取つて付け、重簾の弓の真中取り、葦毛なる馬に貝鞍置きてぞ乗つたりける。五郎が其の日の装束には、薄紅にて裏打つたる平紋の竹笠眼深に著て、からさいみに蝶を二つ三つ所々に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行勝たぶやかに穿き下し、鶴の本白の征矢、管高に負ひ成し、二所簾の弓の真中取り、鹿毛なる馬に時繪の鞍置きて乗つたり。遙に遠き敵を見付けて十郎に告げ、下にて祐經を見付けて五郎に告げ、互に心を通はしけり。

人は皆鹿に心を入れ、如何にもして上の見參に入らんと、嶺に登り谷に下り、野を分け里を尋ねけれども、よそ目如何がと思ひしに、勢子を破りて鹿こそ三頭出で來りけれ。是は如何にと見る所に、かの祐經こそ追つすがひて落しけれ。其の日の装束花やかなり。浮線綾の直垂に、大班の行勝に、切斑の矢負ひ、吹寄簾の弓の真中取り、金砂にて裏打ちたる浮紋の竹笠嵐に吹き靡かせ、黒き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の乗手なり、三つ有る鹿に目を懸けてこそ追つすがうたれ。

三つ有る鹿には隔たりぬ。馬の駆場もよかりけり。十郎これを見て、「此の鹿は、埒の外に勢子を破りて落ち來るにや。追つ返し奉らん」とて、十三束の大の中差取つて番ひ、矢所多しと

いへども、奥野の狩場の歸り様に、父の射られけん鞍の山形の端、行勝の引き合せ、報いの知らずる恨みの矢、餘の所をば射べからず。如何なる金山鐵壁なりとも、志のなかは透らざらんと、左手に成してぞ下りける。五郎も同じく中差取つて差し番ひ、左衛門尉が首の骨に目を掛けて、大盤石を重ねたりと言ふとも、なか斬つて捨てざらんと、鞭に鎧を揉み添へて、右手に相付け馳せ並べ、三つ有る鹿と左衛門を真中に取り込め、矢先を左衛門に指し當てて引かんとする所に、祐經が暫しの運や残りけん、祐成が乗つたる馬を、思はぬ伏木に乗り懸けて、眞倒さまに轉びけり。過たず弓のもとを越して、馬の頭に下り立つたり。

五郎は是を知らずして、矢筈を取り立ち上りけるが、兄の有様を一目見て、目も昏れ心も消えにけり。此の隙に、敵は遙に馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎空しく引き返し、急ぎ馬より下り立つて、兄を介錯しける心の中こそ悲しけれ。「哀れ、げに我等ほど、敵に縁無き者あらじ。只今はさりとるところを思ひしに、馬強かりせば、斯様には成り行かじ。これも貧より起る事なり。人を恨むべきにもあらず。叶はぬ命ながらへて物を思はんよりも、自害して悪靈にも成りて、本意を遂げん」とぞ、悲しみける。(巻第八)

——流布本曾我物語——

九 清和天皇の御號

十六人思ひくりに落ちかゝる所に、昔に聞えたる剛の者あり。先祖を詳しく尋ぬるに、鎌足の大臣の御末淡海公の後胤、佐藤のりたかが孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信といふ侍あり。人も多くさぶらふに御前に進み出で、雪の上にひさまづきて申しけるは、「君の御有様と我等が身を、物によく／＼譬ふれば、屠所に赴く羊、歩々の思ひも争でか是には勝るべき。君は御心安く落ちさせ給ひ候へ。忠信は是に留まりさぶらうて、麓の大衆を待ち得て、一方の防ぎ矢仕り、ひと先づ落し參らせ候はばや」と申しければ、「尤も志は嬉しけれども、御邊の兄次信が、八島の軍の時、義經が爲に命を捨て、能登殿の矢先にあたりて亡せしかども、是まで御邊の付き給ひたれば、次信も兄弟ながら未だ有る心地してこそ思ひつれ。年の内は思へば程もなし。人も命あり、我もながらへたらば、明年の睦月の末、二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて秀衡をも見よかし。又信夫の里に留め置きし妻子をも、今一度見給へかし」と仰せられければ、「さ承り候ひぬ。治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、「今日よりして君に命をたてまつりて、名を後代に揚げよ。矢にもあたり死しけると聞かば、孝養は

秀衛が忠を致すべし。高名度々に及ばば、勳功は君の御計らひ」とこそ申し含められしか。命を生きて故郷へ歸れと申したることも候はず。信夫に留め候ひし母一人さぶらふも、其の時を最後とばかりこそ申しきりて候ひしか。弓箭取る身の習、今日は人の上、明日は御身の上、皆かくこそさぶらはん。君こそ御心弱く渡らせ給ひ候とも、人々それよき様に申させ給ひ候へや。」とぞ申しける。武藏坊是を聞いて申しけるは、「弓矢取る者の言葉は論言に同じ。言葉に出しつる事を、ひるがへす事は候はじ。只心安く御暇を賜はりたし。」とぞ申しける。判官暫く物をも仰せられざりけるが、やゝありて、「惜しむとも叶ふまじ。さらば心にまかせよ」とぞ仰せられる。忠信承りて、嬉しげに思ひて、唯一人吉野の奥にぞ留まりける。されば、夕には月星の光を頂き、晨にはけうくんの霧を拂ひ、玄冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏の朝にも、日夜朝暮、片時も離れ奉らず仕へ奉りし御主の御名残も今ばかりなりければ、日比は坂の上の田村丸・藤原の利仁にも劣らじと思ひしが、追に今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々に暇乞して、前後不覺になりけり。

又、判官忠信を近く召して仰せられけるは、「御邊が佩きたる太刀は、寸の長き太刀なれば、流に臨んでは叶ふまじ。身の疲れたる時、太刀の延びたるは悪しかりなん。是を以て最後の軍せよ。」とて、金作りの太刀の二尺七寸ありけるに、劍の樋かきて、地肌心も及ばざるを取出

秀衛の父
源平盛衰記
四二には、
秀衛とあり

して賜はりけり。「此の太刀、寸こそ短けれども、身に於ては逸物にてあるぞ。義経も身にかへて思ふ太刀なり。それをいかにと言ふに、平家の兵共兵船を揃へし時に、熊野の別當の權現の御劍を申しおろして賜ひしを、信心を致したりしによりてや、三年に朝敵を平げて義朝の會稽の恥を雪ぎたりき。命に替へて思へども、御邊も身に替へれば取らすぞ。義経に添うたりと思へ」とぞ仰せられける。四郎兵衛是を賜りて載き、「あはれ御佩刀や、是御覽さぶらへ。兄にて候ひし次信は、八島の合戦に、君の御命に代り參らせて候ひしかば、奥州の基衛が參らせて候ひし、大夫黒といふ馬を賜はりて、冥途までも乗り候ひぬ。是を人の上と思召すべからず。誰々も皆かくこそ候はんずれ。」と申しければ、各、涙をぞ流しける。

判官仰せられけるは、「何事か思ひ置く事のある。」御暇賜はり候ひぬ。何事を思ひ置くべしとも覺え候はず、但し末代までも弓矢の瑕瑾なるべし、少し申上げたき事の候へども、恐れをなして申さず候」と申しければ、「最期にてあるに、何事にも申せ」と仰せを蒙り、跪きて申しけるは、「君は大勢にて落ちさせ給はば、それがしは是に一人留まり候べし。吉野の執行押寄せ候うて、是に九郎判官殿の渡らせ給ひ候かと申し候はんに、忠信と名乗り候はば、大衆は極めたる華飾の者にて候へば、大將軍もおはしまさざらん所にて、私の軍益なしとて歸り候はんこそ、末代まで恥辱になりぬべく候へ。今日ばかり清和天皇の御號を預るべく候はん」とぞ申し

ける。「尤もさるべき事なれども、純友・將門も天命を背き参らせしかば終に亡びぬ。ましてやいはん、義経は院宣にも叶はず、日比よしみありつる者共心變りしつる上、力及ばず、今日を暮し、夕を明すべき身にてもなければ、遂に遁れなからんもの故に、清和の名を許しけりと言はれん事は、他の誹をば如何すべき。」と仰せられければ、忠信申しけるは、「やうにこそより候はんずれ。大衆押寄せ候はば、箆の矢をさんくんに射盡くし、矢種盡きは、太刀を抜き、大勢の中へ亂れ入り、斬りて後、刀を抜き腹を切りさぶらはん時、まことにこれは九郎判官と思ひ参らせ候はんずれ。げには御内に佐藤四郎兵衛といふ者なり。君の御號を借り参らせて、合戦に忠を致しつるなり。首を取つて鎌倉殿の見参に入れよとて、腹掻切り死なん後は、君の御號も何か苦しく候はん。」とぞ申しける。「尤も最期の時、かやうにだに申しわけて死に候ひなば、何か苦しかるべき、殿原。」と仰せられて、清和天皇の御號を預る。是を現世の名聞、後世のうつたへとも思ひける。「御邊が著たる鎧は如何なる鎧ぞ。」と仰せ有りければ、「是は次信が最期の時著て候ひし。」と申せば、「それは能登守の矢にたまらず通りたりし鎧の頼む所なし。衆徒の中には聞ゆる精兵の有りけるぞ。是を著よ。」とて緋緘の鎧に、白星の兜を副へて賜はりけり。著たりける鎧をぬぎて雪の上にさし置き、「雑色どもに賜ひ候へ」と申しければ、「義経も著替ふべき鎧もなし。」とて召しぞ替へられける。誠にためしなき御事にぞ有りける。

「さて故郷に思ひおく事はなきか」と仰せられければ、「我も人も衆生界のならひにて、なか故郷の事を思はざらん。國を出でし時、三歳になり候子を一人留め置きてさぶらひしぞ。かの者に心付きて、父はいづくにやらんと尋ね候べきなれば、聞かまほしく候へ。平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きて通るやうに、信夫を打通り候ひしに、母の所に立寄り、暇乞ひ候ひしかば、齡衰へて、二人の子供の袖にすがりて悲しみ候ひし事、今のやうに覚え候。』老の末になりて、我ばかり物を思ふ、子供に縁のなき身なりけり。信夫の庄司に過ぎ別れ、たま／＼近付きて不便にあたられし伊達の娘にも過ぎ別れ、一方ならぬ歎なれども、和殿原を成人させて、一所にこそ無けれども、國の内にと思へば、頼もしくこそ思ひつるに、秀衡何と思召し候やらん、二人の子供を皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさる事なれども、子供を成人せさせて、人數に思はれ奉ること嬉しけれ。隙なく合戦にあふとも、臆病の振舞して、父の屍に血をあえし給ふなよ。高名して、四國・西國のはてにおはすとも、一年二年に一度も命の有らん程は、下りて見もし見えられよ。一人留まりて、一人絶えたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れては如何せん」とて、聲も惜しまず泣き候ひしを振捨てて、「さ承り候」とばかり申して、打出で候よりこのかた、三四年、終に音信も仕らず。去年の春の比、わざと人を下して、「次信討たれ候ひぬ」と告げて候ひしかば、身も絶えなんと悲しみ候ひける

が「次信が事はさて力及ばず。明年の春の頃にもなりなば、忠信が下らんといふ嬉しさよ。はや今年の月日も過ぎよかし」などと待ち候なるに、君の御下り候はば、母にてさぶらふ者、急ぎ平泉へ参り、「忠信は何處に候ぞ」と申さば、「次信は八島、忠信は吉野にて討たれける」と承りて、如何ばかり歎き候はんすらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて御心安く渡らせおはしまし候はば、次信・忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰せをこそ預りたく候へ。」と申しも果てず、袖を顔におし當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も皆鎧の袖をぞ濡らしける。

さて、「一人留まるか」と仰せられければ、「奥州より連れ候ひし若黨五十餘人候ひしが、或は死し、或は故郷にかへし候ひぬ。今五六人候こそ死なんと申すげにさぶらへ。」さて義經が者は留まらぬか」と仰せられければ、「備前・鷲尾こそ留まらんと申し候へども、君を見つぎ参らせ給へとて、留め申さず。御内の雑色二人も、「何事もあらば一所にて候」と申し候間、留まりげに候」と申しければ、判官聞召して、「彼等が心こそ神妙なれ」とぞ仰せける。(卷五)

—義經記—

(二) 備前平四郎
(三) 鷲尾三郎

10 歸る雁

歸雁を

(二) 中務卿宗良親王

歸る雁なに急ぐらむおもひ出もなきふるさとの山と知らずや (卷一、春上) 宮

吉野の行宮にて百首の歌よませ給うける中に、聞郭公といふことを

聞きなるゝ山郭公此の頃の都の人は初音待つらむ (卷三、夏)

後醍醐天皇御製

夏草を

茂るとも庭の夏草よしさらばかくてや秋の花を待たまし (同)

(三) 右近大將長親

五百番歌合に

茂りあふ櫻が下の夕涼み春はうかりし風ぞ待たるゝ (同)

(三) 御製

五百番歌合に

風はやみしぐるゝ雲もたえぐに亂れて渡る雁のひとつら (卷四、秋上)

建武二年、人々題をさぐりて千首の歌つかうまつりける時、月といふことをよませ

給うける

後醍醐天皇御製

(三) 藤原氏(花山院)號耕雲、入道して明魏といふ
(三) 長慶天皇

(二) 後醍醐天皇第八皇子、尊澄法親王、妙法院宮、信濃宮、新葉集撰者

みる人の心もなどか澄まさらむ空に曇らぬ秋の夜の月 (同)

月前蟲といふことをよませ給うける

ねに立てて蟲も鳴くなり身一つの憂世を月にかこつと思へば (巻五、秋下)

元弘三年九月十三夜、三首の歌講せられし時、月前掃衣といふことを

聞きわびぬはつき長月ながき夜の月の夜寒に衣うつ聲 (同)

題しらす

度會盛行

梢をばさそひ盡くして山風の落葉に残る音のさびしさ (巻六、冬)

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に

後醍醐天皇御製

臥し佗びぬ霜寒き夜の床はあれて袖にはげしき山おろしの風 (同)

題しらす

藤原行房朝臣

かへり見る都のかたも雲閉ちてなほ遠さかる五月雨の空 (巻八、禰旅)

正平二十年、内裏七百首の歌の中に、社頭暮といふことを

妙光寺内大臣

春日山しぐれも果てぬ夕づく日ふたゝび照らす影かとぞ見る (巻九、神祇)

諏訪の大明神に法樂し侍りし千首の歌の中に

中務卿宗良親王

諏訪の海や氷を踏みて渡る世も神し守らばあやふからめや (同)

後醍醐天皇の隠岐遷幸に供奉せし人。新田義貞は行房の妹夫
花山院家賢 師賢の子、長親の父

百首の歌よませ給うける中に、寄社祝を

後村上院御製

行末を思ふも久し天つ社國つ社のあらむ限りは (同)

年中行事を題にて人々百首の歌つかうまつりけるついでに、朝拜の心を

高御座とばかりかゝけて樞原の宮の昔もしるき春かな (巻一六、雜上)

春の歌の中に

文貞公

うれへあれば聞く事厭ふわが身とも知らでや此處に鶯の鳴く (同)

正平八年内裏千首の歌の中に、門柳を

冷泉入道前右大臣

いかにして春をも知らぬ我が門に植ゑし柳はかけ靡くらむ (同)

歸雁知春といへる心を

前大納言實清

歸るべき時來ぬとてや故郷に雲居の雁も春は行くらむ (同)

花百首の歌よみ侍りける中に

民部卿光資

もゝしきや大内山の櫻花咲きてや君のみゆき待つらむ (同)

花の歌の中に

中院入道一品

咲きそむる花に知らせし世の中の人の心の移りやすさを (同)

千首の歌召されしついでに、花挿頭といふ事をよませ給うける

御製

北畠准后親房、法名宗玄

花山院師賢 尹大納言 洞院公泰、法名覺元

をさまらぬ世の人言のしげければ櫻かざして暮す日もなし (同)

衆む事侍りける頃、雲雀をよめる

源頼武朝臣

道知らば我に教へよ夕雲雀やすくもあがる雲の上かな (同)

春の歌の中に

中院入道一品

小山田の苗代水のひきくゝに人の心の濁る世ぞ憂き (同)

五百番歌合に

御製

集めては國の光となりやせむ我が窓照らす夜半の螢は (同)

題しらす

吉田前内大臣

暮れて行く今日の名残も惜まれずさもうかりつる秋ぞと思へば (同)

元弘元年百首の歌よみ侍りける中に

中務卿宗良親王

世の憂さを空にもしるや神無月ことわり過ぎて降る時雨かな (同)

題しらす

山人のとるや柚木のかくばかり苦しき世にもひく心かな (卷一七、雜中)

元弘元年北長尾の山庄に籠り居侍りけるを、世のみだれによりて、かしこなも又立ち出でて後、よみ侍りける歌の中に

文貞公

(一) 藤原定房、後醍醐天皇の傳
(二) 延元三年薨
(三) 後醍醐天皇第一皇子

思ひかね入りにし山を立ち出でてまよふ憂世もたゞ君の爲 (同)

あづまの方に久しく侍りて、ひたすらものふの道にのみたづまはりつゝ、征東將

軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうに覺えてよみ侍りし 中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓起き臥し我が身なれむものとは (卷一八、雜下)

同じ頃武藏國へ打越えて、こてさし原といふ所におりゐて、手分などし侍りし時、

いさみあるべきよし、つはものどもにめし仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし

君の爲世の爲なにか惜しからむ捨ててかひある命なりせば (同)

正平二十年内裏の三百六十首の中に、寄弓速懐 前内大臣隆

君が爲我が取り來つる梓弓もとの都にかへさざらめや (同)

題しらす 中院入道一品

歎けとて老の身をこそ残しけめあるは數々あらずなる世に (卷一九、哀傷)

吉田前内大臣、右大辨清忠など打ちつゞき身まかりにける頃、おぼしめしつゞけさ

せ給うける 後醍醐天皇御製

こととはむ人さへ稀になりにけり我が世の末の程ぞ知らるゝ (同)

題しらす 後村上院御製

(三) 藤原氏、坊門宰相、延元三年卒

(一) 藤原隆俊、四條隆資の子、文中二年戦死

上世文學選
前篇一五頁
參照

四つの海浪も治まるしるしとて三つの寶を身にぞ傳ふる (卷二〇、賀)
九重に今もますみの鏡こそなほ世を照らす光なりけれ (同)

—新葉集—

二花の下

泉涼しき松風ぞ吹く

住吉の浦の南に月見えて

救濟法師

二條良基
平家物語四
名をも雲
にあり、宇
治左大臣
とあり、關
源平盛衰記
一六には、
名をば雲
とあり、關
白太政大臣
基實の詠と
藤原實定

一さけびなる山のむさゝび

曉の林の木末月落ちて

(卷五、秋連歌下)
關白前左大臣

高倉院の御時、南殿の上に鶴といふ鳥鳴き侍りけるに、頼政を召して、射侍るべき由
仰せられければ、五月間の暗きに聲をしるべにて仕うまつりけるに、祿をかゝるとて
時鳥雲(三)ゐに名をもあぐる哉

時鳥雲(三)ゐに名をもあぐる哉

後徳大寺左大臣

弓張月のいるにまかせて

從三位頼政

(卷二二、雜連歌一)

—菟玖波集—

何人

雪ながら山本霞む夕かな

行く水遠く梅匂ふ里

河風に一村柳春見えて

宗 祇
肖 柏
宗 長

—水無瀬三吟百韻—

何路第一 (四) 石山寺於世尊院

初表八句、
初裏十四句、
抄出
永祿七甲子
五月十二日
興行
里村氏

梅 景 惠
紹 巴
清 譽

うら枯に野やなり初めて残るらん
 行水見えぬ澤の棚はし
 する遠き小川の流ほのかにて
 日はさしながら時雨すらしも
 吹き送る雲のかたわく山風に
 寝坐定めぬ鳥の聲々
 人かへる竹の下道くれやらで
 田面につゞく野邊の一村
 はるかにも塘の水やけぶるらん
 霞に残る日は長閑成
 ちりちらす山のは白き花の雪
 松にとだえし春風の音
 かきならす琴の調も宵更けて
 縁居の月に誰すゞむらん
 夕立は見るく過ぐる空なれや

你 元 守 仍 玄 心 能 源 珠 頼 滋 道 文 晋 澄
 阿 理 仙 景 哉 前 誓 應 長 喜 成 九 阿 阿 賢

みどりそひ行く草のすゑく
 せきとめし川邊の水やあまるらん
 瀬々にわかるゝ瀧波のこゑ

紹 巴
 景 惠
 你 阿

—石山千句—

二三 砧 (謠曲)

前シテ 蘆屋の妻
 ツレ 侍女夕霧
 後シテ 其の靈
 ヲキ 蘆屋某

「」
 は詞
 は謠

「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども、當年三歳になりて候。あまりに故郷の事心もとなく候ふ程に、召使ひ候ふ夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候ふ程に、おことを下し候ふべし。此の年の暮には必ず下るべき由、心得て申し候へ。ツレ「さらばやがて下り候ふべし。必ず此の年の暮には、御下りあらうするにて候。進行「此の程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、いく夕暮の宿ならん。夢も敷そふ假枕、明かし暮らして程もなく、蘆屋の里に着きにけり。蘆屋の里に着きにけり。ツレ「急ぎ候ふ程に、蘆屋の里に着きて候。やがて案内を申さうす

* 筑前國遠賀郡

るにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由御申し候へ。
シテ「夫れ鴛鴦の衾の下には立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁ひあり。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍ぶ草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の、晴間まれなる心かな。

(二) 山里は冬ぞ
寂しきま
りける人日
も草もかれ
ぬと思へば
源宗子

(古今六、
冬)

(三) 偽の無き世
なりせば
かばかり人
の言の葉嬉
しからまし

(古今一
四、戀四)

(三) 漢書蘇武傳
・蒙求、中
(蘇武持節)
等参照

ツレ「夕霧が参りたる由それく御申し候へ。シテ「何夕霧と申すか。人までもあるまじ、此方へ
來り候へ。いかに夕霧、珍しながら恨めしや。人こそ變り果て給ふとも、風の行方のたよりに
も、などや音づれ無かりけるぞ。ツレ「さん候。とくにも参りたく候ひつれども、御宮づかひの
隙も無くて、心より外に三年まで、都にこそ候ひしか。シテ「なに都すまひを心の外とや、
ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多き折々にだに、憂きは心の習ひぞかし。下歌地「鄙の住
居に秋の暮れ、人目も草もかれく、の、契も絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ、上歌地「三年
の秋の夢ならば、夢ならば、憂きは其のまゝ、覺めもせで、思ひ出は身に残り、昔は變り跡もな
し、實にや偽りの、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉嬉しからん。愚の心やな、愚なり
ける頼みかな。

シテ「あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ふぞ。ツレ「あれは
里人の砧打つ音にて候。シテ「げにや我が身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ふぞや。唐土

(二) 参考
織錦機中
已辨相思
之字、擣衣
砧上俄添
怨別之聲
公乘億
(和漢朗
詠集、上、
秋、八月
十五夜)
夫を思ひ廻
文の詩を錦
に織り込み
しは、晉の
寶滔の妻蘇
氏。同姓な
るより、蘇
武の故事と
混じられる
か
宮瀨高低風
北送隣砧
織急月西傾
具平親王
秋、秋夜)

に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨ておかれしに、故郷にとどめ置きし妻や子、夜寒の寢覺
を思ひやり、高樓に登つて砧を擣つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の
砧聞えしとなり。妻も思ひや慰むと、とてもさびしきくれはどり、綾の衣を砧に打ちて、
心を慰まばやと思ひ候。ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ。さりながら御心慰めん
爲にて候はば、砧をこしらへて参らせ候ふべし。シテ「いざく砧打たんとて、馴れて臥猪の床
の上、ツレ「涙かたしくさ筵に、シテ「思ひをのぶる便りぞと、ツレ「夕霧立ちより諸共に、シテ「恨
みの砧、ツレ「打つとかや。
地「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。シテ「音づれの、稀な
る中の秋風に、地「憂きを知らする夕かな。シテ「遠里人もながむらん。地「誰が世と月はよも訪は
じ。シテ「面白の折からや。頃しも秋の夕つ方、地「牡鹿の聲も心凄く、見ぬ山風を送り來て、
梢は何れ一葉散る、空すさまじき月影の、軒の忍ぶにうつろひて、シテ「露の玉垂かゝる身の、
地「思をのぶる夜すがらかな。宮瀨高く立ちて風北に廻り、シテ「隣砧緩く急にして月西に流る。
地「蘇武が旅寢は北の國、是は東の空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣擣
たうよ。
地「故郷の、軒端の松も心せよ。己が枝々に、嵐の音を殘すなよ。今の砧の聲そへて、君がそな

誰家思婦秋
 掃帚月苦
 風淒砧杵
 悲、八月九
 月正長夜、
 千聲萬聲
 無了時、
 應到三天
 明、頭盡白
 一聲添得
 一、聲、白
 集一九、
 八月九月
 開夜砧、
 和漢朗
 詠集、上、
 秋、掃衣、
 三、
 悔の八千度
 悲しきは流
 る、水の歸
 り、のなり
 閑院、古
 今一六、
 哀傷、

たに吹けや風。餘りに吹きて松風よ。わが心、通ひて人に見ゆならば、其の夢を破るな。破れ
 て後は此の衣、誰かきても訪ふべき。来て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも更へなん。夏衣、
 薄き契は忌まはしや。君が命は長き夜の、月にはとても寝られぬに、いさく衣擽たうよ。彼
 の七夕の契には、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろ
 き露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うち寄せようたかた。シテ「文月七日の曉や、
 八月九月、實にまさに長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや。月の色風のけしき、
 影におく霜までも、心すこき折ふしに、砧の音夜嵐、悲しみの聲蟲の音、まじりて落つる露涙、
 ほろ／＼はら／＼と、いづれ砧の音やらん。
 ツレ／＼かに申し候。都より人の参りて候ふが、此の年の暮にも、御下りあるまじきにて候。
 シテ「恨めしやせめては年の暮をこそ、偽りながら待ちつるに、さては早誠に變り果て給ふぞや
 下歌地「思はじと思ふ心も弱るかな 上歌地「聲も枯野の蟲の音の、亂る、草の花心、風狂じたる心地
 して、病ふの床に伏し沈み、つひに空しくなりにけり。つひに空しくなりにけり。(中入)
 ヲキ「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み、引き別れにし妻琴の、つひの別れとなりけるぞや。
 上歌「さきだたぬ、悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、歸りくる道と聞く
 からに、梓の弓の裏弭に、言葉をかはすあはれさよ。言葉をかはすあはれさよ。

移ろはで暫
 し信太の森
 を見よかへ
 りもぞする
 葛の裏風
 赤染衛門
 秋風は淒く
 吹けども葛
 の葉の恨み
 顔にはみえ
 じとぞ思ふ
 和泉式部
 (新古今
 一八、雜
 下)
 君をおきて
 あだし心を
 我が持たば
 末の松山浪
 も越えなむ
 (古今二〇、
 東歌)

標シテ「三瀬川、沈み果てにしうたかたの、あはれはかなき身の行方かな。標梅花の光を竝べては
 娑婆の春をあらはし、跡のしるべの燈は、シテ「真如の秋の月を見する。さりながら我は邪姪
 の業深き、思ひの煙の立居だに、安からざりし報いの罪の、亂る、心のいと責めて、獄卒阿防羅
 利の、笞の數のひまもなく、打てや／＼と報いの砧、恨めしかりける因果の妄執、因果の妄
 執の思ひの涙、砧にかゝれば、涙はかへつて火焰となつて、胸の煙の焰にむせば、叫べど聲
 が出でばこそ。砧も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ恐ろしや。
 上歌地「羊のあゆみ隙の駒、羊のあゆみ隙の駒、うつりゆくなる六つの道、因果の小車の、火宅の
 門を出でざれば、めぐりめぐれども、生死の海は離るまじや、あぢきな浮世や。シテ「恨みは
 葛の葉の、恨みは葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、二世と契りても
 なほ、末の松山千代までと、かけし頼みはあだ浪の、あらよしなや、空言や。そもかゝる人の
 心か。シテ「鳥てふ、大をそ鳥も心して、うつし人とは誰かいふ。草木も時を知り、鳥獸も心
 あるや。げにまこと喩へつる、蘇武は旅雁に文を付け、萬里の南國に至りしも、契の深き志、
 淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつとも、夢ともせめてなど、思ひ知
 契りきなかつたみに袖を絞りつ
 つ末の松山浪越さじとは
 鳥とふ大をそ鳥のまさでにも
 來まさぬ君をこゝろくとぞ鳴く
 前田及び長門本平家物語四、
 蘇武事参照
 (萬葉一四、東歌)

らずや恨めしや、

キリ地「法華讀誦の力にて、法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道明らかになりけり。是も思へば假初に、擣ちし砧の聲の内、開くる法の花心。菩提の種となりけり。菩提の種となりけり。

三 安 宅 (謠曲)

シテ 辨慶 子方 義經 ツレ 同行山伏
狂言 強力 ワキ 富樫

鴻門の會、
美噲の故事
史記項羽
本紀に出

ワキ「かやうに候ふ者は、加賀の國富樫の何某にて候。扱も頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏と爲つて、奥へ御下向の山頼朝聞召し及ばれ、國々に新關を立てて、山伏を堅く擇び申せとの御事にて候。さる間此の所をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し付けばやと存じ候。如何に誰かある。狂言「御前に候。ワキ「今日も山伏の御通りあらば、こなたへ申し候へ。狂言「畏つて候。
シテ、ツレ次重「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしほるらん。サシ「鴻門楯破れ都の外

義盛
濟重
八郎弘常
十郎權頭兼房
海尊
これや此の
行くも歸る
も別れては
知るも知らぬも
逢坂の
關
蟬丸(後撰一五、雜一)
あづまの
方より京
へまうて來とて道にてよめ
山隠す春の霞ぞうらめしき
づれ都のさかひなるらむ
おと(古今九、露旅)
近江國高島郡

の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙なれ。シテ「さて御供の人々には、ツレ「伊勢の三郎・駿河の次郎、片岡・増尾、常陸坊、シテ「辨慶は先達の姿となりて、ツレ「主従以上十二人、いまだ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。シテ、ツレ上歌「時しも頃は二月の、時しも頃は二月の、十日の夜、月の都を立ち出でて、是やこの、行く歸るも別れては、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隠す、霞ぞ春は恨めしき。霞ぞ春は恨めしき。下歌「波路遙に行く舟の、波路遙に行く舟の、海津の浦に着きにけり。東雲はやく明け行けば、浅茅色づく有乳山、上歌「氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行くさきに見えたるは、柚山人の板取、河瀬の水の浅洲津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。花の安宅に着きにけり。
シテ「いかに申し上げ候。暫く此の所に御休みあらうするにて候。判官「如何に辨慶。シテ「御前に候。判官「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテ「いや何とも承らず候。判官「安宅の湊

(九) 近江と越前の國境
八田の野の浅茅色づく有乳
山峯の沫雪寒く降るらし
人麿(萬葉一〇)
(新古今六、冬)
(一〇) 教賀港の邊の海
(一一) 越前國教賀郡と南條郡との境
(一二) 越前國坂井郡
(一三) 加賀國江沼郡
(一四) 浅水、越前國足羽郡

に新關を立てて、山伏を堅く擇ぶところ申しつれ。シテ「言語道斷の御事にて候ふ物かな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。是はゆゑしき御大事にて候。まづ此の傍にて暫く御談合あらうするにて候。是は一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうするにて候。ッレ「我等が心中には、何程の事の候ふべき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。シテ「暫く候。仰せの如く此の關一所打ち破つて御通りあらうするは易き事にて候へども、御出で候はんする行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然るべからうすると存じ候。判官、ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ「畏つて候。某急度案じ出したる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候ふが、何と申しても御姿隠れ御座なく候間、此のまゝにては如何と存じ候。恐れ多き申事にて候へども、御篠懸をのけられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、如何にもくたびれたる御體にて、我等より跡に引きさがつて御通り候はば、中々人は思ひもより申すまじきと存じ候。判官、げに是は尤もにて候。さらば篠懸を取り候へ。シテ「承はり候。如何に強力。判官「御前に候。シテ「笈を持ちて來り候へ。判官「畏つて候。シテ「汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事にてはなきか。まづ汝は先へ行き關の様體を見て、まことに山伏を擇ぶか、又左様にもなきか、懇に見て來り候へ。判官「畏つて候。シカク。シテ「さらば御立ちあらうするにて候。

シテ「實にや紅は園生に植えても隠れなし。ッレ「強力にはよも目を懸けじと、御篠懸を脱ぎ替へて、麻の衣を御身にまとひ、シテ「あの強力が負ひたる笈を、判官「義經取つて肩に懸け、ッレ「笈の上には雨皮形箱取り付けて、判官「綾菅笠にて顔をかくし、ッレ「金剛杖にすがり、判官「足痛げなる強力にて、判官「よろ／＼として歩み給ふ御有様ぞ痛はしき。シテ「我等より跡に引き下つて御出であらうするにて候。さらば皆々御通り候へ。ッレ「承り候。

太刀持判官「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。ッキ「何と山伏の御通りあると申すか、心得てある。なう／＼客僧達、是は關にて候。シテ「承り候。是は南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此の客僧承つて罷り通り候。先づ勤めに御入り候へ。ッキ「近頃殊勝に候。勤めには參らうするにて候。さりながら、是は山伏達に限つて留め申す關にて候。シテ「さて其の謂れは候。ッキ「さん候。頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作り山伏となつて、御下向の由其の聞え候間、國々に新關を立てて、山伏を堅く擇び申せとの御事にて候。さる間、此の所をば某承つて山伏を留め申し候。殊に是は大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。シテ「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ出され候ひつらめ、よも誠の山伏を留めよとは仰せられ候ふまじ。太刀持判官「いや昨日も山伏を三人迄切つたる上は候。シテ「さて其の切つたる山伏は判官殿か。ッキ「あらむつかしや問答は無益、一人

(二) 治承四年十月平重衡に焚かれしを再建するなり
(三) 鎮守府將軍兼陸奥守藤原秀衡

役の行者、
名は小角
法界體性智
大圓鏡智
平等性智
妙觀察智
成所作智
無明・行・
識・名色・六
處・觸・受・
愛・取・有・
生・老死
印會・理趣
會・降三世
會・降三世
三昧會・成
身會・羯磨
會・微細會・
供養會・四
印會

も通し申すまじい上は候。シテさては我等をも是にて誅せられ候はんずるな。ワキ「中々の事。シテ」言語道斷、かゝる不祥なる所へ來かゝつて候ふものかな。此の上は力及ばぬ事、さらば最期の勤めを始めて、尋常に誅せられうするにて候。皆々近う渡り候へ。ツレ「承り候。

シテ「いで」最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつば、役の優婆塞の行儀を受け、ツレ「其の身は不動明王の尊容をかたどり、シテ」兜巾といつば五智の寶冠なり。ツレ「十二因縁のひだをすゑて戴き、シテ」九會曼荼羅の柿の篠懸、ツレ「胎藏黑色のはゞきをはき、シテ」さて又八目の草鞋はツレ「八葉の蓮華を踏まへたり。シテ」出で入る息にあうんの二字を稱へ、ツレ「即身即佛の山伏を、シテ」こゝにて討ちとめ給はん事、ツレ「明王の照覽はかりがたう、シテ」熊野權現の御罰を當らん事、ツレ「立ちどころにおいて、シテ」疑あるべからず。ツレ「唯阿吽羅吽欠と、數珠さら／＼と押しもめば、ワキ「近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候ふまじ。勸進帳を遊ばされ候へ。是にて聽聞申さうするにて候。シテ」何と勸進帳を讀めと候ふや。心得申して候。

シテ「もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の卷物一卷取り出し、勸進帳と名付けつゝ、高らかにこそ讀み上げけれ。夫れつら／＼惟ん見れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と

*重源上人、
法然の弟子

名付け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貰く思ひを善途に翻して、廬遮那佛を建立す。かほどの靈場の絶えなん事を悲しみて、俊乗坊澄源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、此の世にては、無比の樂に誇り、當來にては、數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首敬つて白すと、天も響けと讀み上げたり。ワキ「關の人々肝を消し、恐れをなして通しけり。恐れをなして通しけり。ワキ「急いで御通り候へ。シテ」承り候。

本方「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候。ワキ「如何に是なる強力とまれとこそ。ツレ」すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極まりぬと、皆一同に立ち歸る。シテ「あゝ暫く。あわてて事を仕損すな。やあ、何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ「あれは此方より留めて候。シテ」それは何とて御とめ候ふぞ。ワキ「あの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さて留めて候ふよ。シテ」何と人が人に似たるとは、珍らしからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ふぞ。ワキ「判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間留めて候。シテ」や、言語道斷、判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立ちや日高くは、能登の國まで差さうすると思ひつるに、わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむれ。總じて此の程、につくしくしと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて散々に打擲す。通れとこそ。や、笈に目を懸け給ふは、盗人さうな。ツレ「かた／＼は何故に、何故に、か程賤しき強力に、太刀刀を抜き給ふは、めだれ顔の

振舞は、臆病の至りかと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて、勇みかゝれる有様は、如何なる
天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ヰキ「近頃誤りて候。はや／＼御通り候へ。」

「先」の關をば早拔群に程隔たりて候間、此の所に暫く御休みあらうするにて候。皆々近う御
参り候へ。如何に申し上げ候。さても唯今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働きを仕り候
事、是と申すに君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよいよ
よあさましようこそ候へ。判官「さては悪しくも心得ぬと存ず。如何に辨慶、さても唯今の機轉更
に凡慮より爲すわざに非ず、唯天の御加護とこそ思へ。關の者ども我を怪しめ、生涯限りあ
りつる處に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、散々に打つて我を助くる。
これ辨慶が謀に非ず八幡の、御託宣かと思へば、忝くぞおぼゆる。クリ「夫れ世は末世に及
ぶといへども、日月はいまだ地に落ち給はず。たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打
つ杖の、天罰に當らぬことや有るべき。判官「實にや現在の果を見て、過去未來を知ると云ふ
事、今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十日の今日の難を、のがれつること不
思議なれ。判官「唯さながらに十餘人、夢の覺めたる心地して、互に面を合はせつゝ、泣くば
かりなる有様かな。クキ「然るに義経、弓馬の家に生れ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の波に
沈め、山野海岸に、起き臥し明かす武士の、鎧の袖枕かたしく隙も波の上、ある時は舟に浮び

彭祖の故事
即ち菊慈童
の傳説

礙石運來
心竊待、牽
流過過手
先遮

菅雅規
(朗詠集)

上、春、
三月三日
附桃、菜
流送二羽
鴈

叡山の東
塔・西塔・横
川をいふ

風波に身を任せ、ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の内に、海少しある夕波の、立ちくる音や
須磨明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡ぼし靡く世の、其の忠勤も徒らに、なりはつる此
の身の、そも何といへる因果ぞや。判官「實にや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれと、知れど
もさすがなほ、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣は彌増に世に在りて、遼遠東
南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、
神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂き世や、あら恨めしの憂き世や。

「如何に誰かある。判官」御前に候。ヰキ「さても山伏達に聊爾を申して、餘りに面目もなく候
程に、追つ付き申し、酒を一つ参らせうするにてあるぞ。汝は先へ行きて留め申し候へ。判官「畏
つて候。如何に申し候。先には聊爾を申して餘りに面目もなく候とて、關守の是まで酒を持た
せて参られて候。判官「言語道斷の事、やがて御目に懸らうするにて候。判官「シカ／＼。判官「げに
げに是も心得たり。人の情の盃に、浮けて心を取らんとや。是に付きてもなほ／＼人に、心
なくれそ吳織、怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、此の山陰の一宿りに、さらりと圓
居して、所も山路の、菊の酒を飲まうよ。判官「おもしろや山水に、おもしろや山水に、盃を
浮べては、流に引かるゝ曲水の、手まづさへぎる袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。本より辨慶
は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌、是なる山水の、落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水。

シテたべ酔ひて候程に、先達御酌に参らうするにて候。ヤキさらばたべ候ふべし。とてももの事に先達一さし御舞ひ候へ。シテ承り候。鳴るは瀧の水、(男舞)シテワカ鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり、とくく立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々、暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩に打ち懸け、虎の尾を履み、毒蛇の口を通れたる心地して、陸奥の國へと下りける。

(74)

一四 武 悪 (狂言)

▲大名「罷り出でたるは、隠れもない大名。さやうにござれば、某使ふ下人に、無奉公をし居る奴がござる。太郎冠者を喚び出し、搦め捕りに遣らうと存する。あるかやい。▲冠者はつ、御前に。▲大名「念なう早かつた。汝を喚び出す餘の儀でない。武悪めを、汝急いで搦め捕つて参れ。▲冠者「あゝ。さりながら、あれも御館では覚えの者でござれば、え搦め捕りますまい。▲大名「まつこと。え搦め捕らずば、首を打つて来い。▲冠者「畏つてござん。さりながら、身共がさしまへは覚えがござらぬ。御前の御太刀を貸さつしやれませう。▲大名「を。これや、身共急いで、討ち損なはぬやうに討つて参れ。▲冠者「畏つてござる。扱もく、迷惑な事を言ひ付

けられた事かな。まづ参らずばなるまいが。程なうこれぞござる。ものも。お案内。▲武悪「やら奇特や、聞いたやうな聲ぢやが、案内は誰を。いや、太郎冠者か。▲冠者「なか、内にござるか。▲武悪「やい、太郎冠者。殿の不興を蒙り、汝が来たとても心はゆるさぬ。▲冠者「はてさて、ひよんな事をおしやる。皆御朋輩衆寄らつしやれて、武悪といふ者は、家久しう覚えの者をば、斯様にして置かつしやるのは、殿の違ひぢやとあつて、皆おつしやるのには、お前を直さうと仰しやる程に、其方は急いで川狩に出やつて、雑魚を捕つて、御前へ持つて出やつたら好うおぢやる。又殿も、今日は川狩に出らるゝ。そこで、御朋輩衆が申し直さうと仰しやるほどに、急いで出やす。▲武悪「はれさて、嬉しや。その儀ならば行かうほどに、さあ、其方も来てくりやれ。▲冠者「心得ておぢやる。▲武悪「あゝ、好い洲を見付けておぢやる。いかいこの雑魚でおぢやる。なう、失念した事がおぢやる。餘り嬉しいまかせに、網をも持たずに、ひよいと出たわいの。▲冠者「なう、何としたものでおぢやる。▲武悪「あゝ、身が草寄せといふ事を知つておぢやるほどに、さあ、その方から逐うてくれさしめ。▲冠者「心得ておぢやる。▲武悪「身はこれからおして行くぞ。▲冠者「殿の仰ぢや。覺悟せい。▲武悪「やい、太郎冠者。汝が言ふ事まことと思つて、ひよつと出たれば、まことに鳥の目を縫うて放したやうな事をして、曲もないものぢや。宿でも、かうと言つてくれるならば、めこ子供に、言ひ置き度い

75)

事もあるのに、曲もないものぢや。是非に叶はぬ。急いで討たせませ。▲冠者「其方が歎きやるのをば思うては、今日は人の身の上、明日は我が身の上、世の中に、宮仕などをせうものではない。▲武悪「物を思はせずとも、早う討つてくれやい。▲冠者「いや、討たうとは思うたれども何として身が討たうぞ。(二人共に泣く)冠者「急いで落ちさせませ。▲武悪「いや、物思はせずとも、早う討つてくれさしめ。▲冠者「命が物種ぢや。急いで落ちさしませ。▲武悪「それは、して、まことでおぢやるか。▲冠者「なか。▲武悪「したら、後の儀を頼む。▲冠者「片時も急いで落ちさしませ。▲武悪「やれ扱、鰐の口を遁れた。最早今が都の名残でおぢやる程に、清水へ暇乞に参りませう。(中入)

▲冠者「まづ急いで殿の前へ参らうす。殿様ござりまするか。▲大名「やい、何とした。討つて来たか。▲冠者「なか、討ちましてござります。▲大名「して何として討つたぞ。▲冠者「その御事でござります。彼奴は手者と思はつしやれませい。又身どもは、何にも存ぜぬ者の事でござれば、騙さずばなるまいと存じ、朋輩衆の仰しやる、殿の御前へ言ひ直さう程に、殿も川狩に出さつしやるほどに、其方も急いでお出やつたら好からうと、申してござれば、それを序に言ひ直してくれうと仰しやる事かとて、嬉しがつて、何が川へ出まして、深い所で草寄せを致します處をば、身共がこのお太刀でもつて、何がござらうぞ、水もたまらずぶち放して

ござる。扱もく、よう切れるお太刀でござる。▲大名「よう切れたか。▲冠者「なか、よう切れましたござる。▲大名「でかいたく。やい。して、別に何も言ひはせなんだか。▲冠者「そこで申しますのには、やい太郎冠者、常に等閑なうして甲斐もない。めこ子供にも見せて、内では討つてくれいで、曲もないものぢやと申して、いかう恨みましてござる。扱もく、奉公と言ふものは、物愛いものでござります。少しの違ひがござると、あれでござる所で。▲大名「やい。まことに汝が言ひつる如く、思へば家久しい者をば、むざと討つて捨てた事ぢや。▲冠者「殿様も、さやうに思はつしやれまするか。▲大名「汝が泣くので、おれも討つまいものとは思へども、最早討つた者は戻るまいほどに、身も涙をとめるぞ。われも泣き止め。やい、かうして居たらば面白い事もないほどに、いさ來い、物忘れに清水へ参る。汝も供に來い。▲冠者「畏つてござる。▲大名「はて扱、思へば惜しいことをしたわいやい。▲冠者「御意の通りでござります。▲大名「やい太郎冠者、彼の向から來るは武悪ではないか。急いで見て参れ。▲冠者「あ、此所は六道でござりまする處で、迷うてがな居るものでござる。行つて見て参りませう。やい、今殿の見付けられたが、急いで落ちはせいで。▲武悪「已もさて、一期の名残ぢやと思つて、清水へ参つて見つけられた。天の網が來さつた。覺悟した。▲冠者「なう、急いで様を變へて出さしませ。幽霊のやうにして。▲武悪「なか、心得ておぢやる。(中入)

▲冠者「申し殿様、ござりまするか。今のは武悪がやうにござりましたが、追つ懸けて参ると見失ひましてござる。▲大名「やい／＼冠者、あれや／＼、又出居つたわ。▲冠者「扱は、も、幽霊に紛ひはござりませぬ。▲武悪(白小袖を着て、白小袖を打ちかけ、つぼなつて杖をつき、さばき髪、額に紙を當てて出る)「娑婆にも行かず、冥土にも、六道の衢に迷ふ。▲冠者「あ、申し／＼、武悪が亡霊には隠れもござりませぬ。▲武悪「申し／＼。▲冠者「あれ／＼、武悪が呼びまする。

▲大名「行て何といふぞ、聞いて来い。▲冠者「いや、行て殿様聞かつしやれませい。▲大名「われ行て聞いて来い。▲武悪「申し／＼、祖父御様からお使に参りましたのに、好い所で御目に懸りました。朝夕閻魔様へ出仕をなされますのに、御太刀が無うて迷惑なされます。身どもに参つて、取つて来いと仰しやれましたほどに、いくさつしやれませい。▲大名「やい／＼、館でならば、鬨斗つけを進ぜうすれども、道で逢うた儀でござるによつて、さし荒したれども、これを進ずると申してくれい。▲武悪「さやうには申しませう。素襖、袴、扇までをよこさつしやれませいと仰しやれました。▲大名「を、心得た心得た。やい太郎冠者、脱がしてくれい。緘がよりましたれども、召さつしやれて下されいと申して、これを持つて行け。冠者。▲冠者「これや武悪、取つて行け。▲武悪「なう／＼冠者殿。取るものは取りましたが、殿の直に御目に掛つて申せと、仰しやれた事がござる。▲冠者「申し／＼、殿様。武悪が直に申し度いと申します

おこさつし
やれの意

る。▲大名「やあ、何とした事ぢやな。▲武悪「申し殿様。▲大名「何でござるぞ。▲武悪「祖父御様の仰しやれまするのは、狭い娑婆にござりませうよりも、廣い所へお供して来いと仰しやれました程に、どうぞさると、いで、ござりませう。お供して参る。▲大名「やい／＼武悪、祖父御様に、狭うても此所が好うござる。つゝと今度参らうと申ししてくれい。▲武悪「どうぞさつても身共がかう申すからは、手を引いてなりとも連れまして参らねばなりませぬ。▲冠者「申し殿様、あの態ならば、武悪めが手を引いて参る程に、先づ、急いで逃げさつしやれませう。▲大名「やい、それよ／＼。冠者も逃げい。▲冠者「申し／＼、さればこそ殿は逃げられた。武悪、よいてうぎでなかつたか。▲武悪「されば／＼、其方の蔭で嬉しうおぢやる。思ひもよらぬ路路錢まで貰うた。▲冠者「急いで落ちさせませ。武悪「心得ておぢやる。後を頼む。さらば／＼。

— 狂言記 —

一五文 山賊 (狂言)

▲源太夫「やるまいぞ／＼。▲長兵衛「やれ／＼／＼。やい其處な者、何故にやらなんだ。▲源太夫「やれと言うたによつて、知音近づきにもある事かと思つて、助けてやつた。▲長兵衛「やい其處な

者、山賊の合言葉を知らぬか。あの者が財寶たからを、取つてやれと言ふ事ぢや。▲源太夫「さうならさうとは言はいで。あれ、とつとと行くわ。▲長兵衛「やい其處な者。往なした者が行かいで何とせう。われがやうな者と同心すれば、なんぼうの損をするぢや知れぬ事ぢや。今からしては参り合はぬぞ。▲源太夫「やい其處な者。参り合ふまいなら、参り合ふまいであらうす。なぜにあの鎧は捨てたぞ。▲長兵衛「いや、あれ心があつて捨てた。知らずば言うて聞かせう。汝をば、あれで打つと思つて捨てた。▲源太夫「よう捨てたな。▲長兵衛「やい、なぜに又われは弓矢を捨てたぞ。▲源太夫「汝をば、踏むと思つて捨てた。▲長兵衛「や、此處な者は。踏まれて何と男がならうか。来いおのれ。▲源太夫「何ぢや。▲長兵衛「やい、餘り押さないやい。後ろは笑むろぢやわい。▲源太夫「死ぬる者が笑むろがいろか、何のこゝな。▲長兵衛「やい、何とこゝな者は。▲長兵衛「やい。▲源太夫「なんと。▲長兵衛「お主と己と組合うた擬勢は、好い擬勢ではないか。▲源太夫「おう、まことに男とあらうする者には、煎しても吸はせたい勢でおぢやる。▲長兵衛「やい其處な者。かうして死ぬる手柄の様子をば、ちつと女子どもに見せたいものぢや。▲源太夫「や、まことにお主が妻子どもと言へば、思ひ出した事がある。▲長兵衛「何と。▲源太夫「かうして死ぬれば、往き來る者も、又は妻子どもも、踏み殺されて死んだと言へば、名

も惜しい事ぢや程に、いざ、書置をして死ぬまいか。▲長兵衛「いや、これは一段の事であらうが、最早この體になつてからは、どうも離されまいが。▲源太夫「いざ、三つ拍子で離さう。一、二、三。▲長兵衛「やあ、いざこの太刀の柄も、三つ拍子で離しやれ。▲源太夫「三つ拍子までもいらぬこと、某が方から離するさ。これへ寄せませ。▲長兵衛「なう、其方。して、硯は持たせましたか。▲源太夫「いや、某は持たぬ。▲長兵衛「たしなみのない事でおぢやる。某はこれに矢立を持つておぢやる。▲源太夫「したらば、それで書かせませ。▲長兵衛「心得ておぢやる。扱文章は何と書かうの。▲源太夫「されば、何と書いたものぢやあらうの。あゝ思ひ付けた。▲長兵衛「何と。▲源太夫「便宜ながらと書いては。▲長兵衛「はれ、ひよんな事をおしやる。書置に、便宜などと書く事はあるまい。某が心得て書かう。▲源太夫「一段でおぢやる。書かせませ。▲長兵衛「書いておぢやるわ。▲源太夫「したらば、それで讀ませませ。▲長兵衛「心得ておぢやる。今朝かりそめに家を出で、山賊し損するのみならず、結句傍輩と口論し、退くなよ、われも逃さじと、刀の柄に手を掛けいとはいはぬか。▲長兵衛「や、これは文章ぢやわいやい。▲源太夫「さうならさうとは言はいで。えい、肝を潰さした。▲長兵衛「いざ、これへ寄せませ。相讀みせう。いざ、これへ寄せませ。▲源太夫「心得ておぢやる。▲三人「この儘此處にて死するなら、上り下りの

旅人に、踏み殺されたと思ふべしとて、書留めし水莖の、あとに残れる女房や、娘子供のほえんこと、思ひ遣られて悲しやな。▲源太夫「いやはや、其方の歎きやるも尤でおちやる。某も名残惜しいことは山々でおちやる。いざ、ちつと死ぬることを延べまいか。▲長兵衛「これは一段でおちやる。▲源太夫「如何ほど延べうの。▲長兵衛「いや、年の三年も延べまいか。▲源太夫「三年過ぐれば、又この如くでおちやるの。▲長兵衛「これも餘り本意ない事でおちやるほどに、とかくだ生きられ次第生きよう。▲源太夫「いや、これがはや一段でおちやる。▲長兵衛「めでたく和歌をあげて歸らう。▲源太夫「心得ておちやる。▲二人「思へば無用の死になりと、二人の者は仲直り、手に手を取りて我が宿に、犬死せでぞ歸りける。五百八十年めでたうおちやる。おちやらせませ〜。

— 狂言記 —

一六 高 館 (舞の本)

義經記八、
衣川合戦の
事参照
*鈴木三郎重
家
龜井六郎重
清

コトバ ヲキ 武藏坊辨慶は櫓の上にてつくづく見て、あら面白と鈴木兄弟が合戦したるやうや。流石にあの方々は、天下の御用、幾所の軍を習うたる人々にて、敵の色を覺つて、駈け引いつる心根の面白さよ。暫く人々御待ちあれ。出立つて來んと云ふ儘に、御出居へつゝと入り、黒

糸織の鎧を着、先の梨子打烏帽子にて、今度は白柄の薙刀を打ちかたげ、大手の櫓に走り上つて、イロ サシ 東向にぞ立つたりける。同音抑比は何時ならん。文治五年、閏四月の、二十八日の未だ巳の刻許なるに、照りに照つたる朝日に、物具の金物は折柄色や勝るらん。開いた扇は紅にて、日に指し向つて立つたりける武藏坊が有様は、たうはつ毘沙門四天王の荒れたる氣色も斯くやらんと、コトバ 太夫大音上げて呼ばはる。如何に奥方の軍兵、鳴を靜めて事の心を確に聞け。イロ 太夫それ人間の命は電光朝露。打つも打たるも夢の戯。コトバ 太夫昨日迄は肩を並べ、膝を組みし面々が、今日敵となれるも、因果歴然の道理に因つて、世をも人をも怨むまじい。さりながら汝等が、遠國に住んで入り取り強盜し、境の勝示を論じ、二十騎三十騎、引き分け引き分け、此處彼處にて空印地し、飛礮打つたらんには似まじいぞ。今日武藏がする軍こそ手本よ見習へ。奥方の軍兵、今日武藏が長刀にて、斬り残したらん輩は、見しものと思ひ出ば、後世をば弔うて給へ。末代の物語に、辨慶舞を一番舞はうぞ。やう囃いて給へや人々。ッレ鈴木兄弟は、かねて用意やしたりけん。鼓を取り出し敲き上げて囃す。地體武藏はさん(一)にても亂舞延年の上手、舞をば一手習うたり。長刀の柄をとろ〜と打つて、調子をうかがうて立つたりしが、かすみにかすんで、大きな聲をばつたとあげ、一聲をぞとつたりける。サシ 太夫嬉しやとろ〜と、鳴るは、瀧の水日は照るとも、何時も絶えせじ面白や。ッレ花を流すは吉野の

(二) 三塔
叡山の東塔
西塔・横川

(三) 本書七三頁
参照

三戸立
川村にあり

川、太夫筏を下すは大井川、ツレ同音紅葉を流すは立田川。都あたりには、名川さまさま多けれど、遠國ながら名所かな。霧山高嶺の、残のこの雪消え、谷のつらゝも融けぬれば、衣川の水嵩勝つて奥方の軍兵を、辨慶が薙刀にて、湊をさいて、斬り流す斬り流すと、揉烏子といふ曲を、一拍子はらりと踏んで、開いた扇を櫓より、衣川へ颯と投げ入れ、扇の落つるより早く、あう櫓を飛んで下りたりけり。さんさんのへだちの白葦毛、七寸八分、あけ六歳に引き寄せゆらりと乗つたりけり。鷲尾・片岡。先驅せんと進んだり。辨慶がこれを見て、いでく武藏が荒切せん。跡をばこなせ若武者共とて、先驅してこそ渡しけれ。向ひは信夫・本吉・たけい・丸田を先として、奥には我と思しき者三百騎許で控へたる、陣の中へ武藏、駒を颯と駈け入れたり。奥方の軍兵は、陣を二つに分けたりけり。されども爰に、高田の太郎と名乗つて、武藏坊に渡り合ふ。辨慶これを見て、もつて開いて横手切にかんしと斬る。甲の弓手の吹返、面の頬先、妻手のかぶりの板を掛けて、づんと斬つてぞ落しける。はなさきこの由を見るよりも、あ切つたりや武藏殿。そこを引くなといふ儘に、透間もなく懸りけり。辨慶これを見て、もつて開いて、拜み打に丁と打つ。甲の眞甲切り割つて、後は鉦しん母衣附、前は半頭はんづつ湊金、四枚金胴ひつしき草摺二つに颯と打ち割られて、弓手妻手へ掛けたり。柴田の四郎がこれを見て、あ切つたりや武藏殿。そこを引くなといふ儘に、透間もなく懸りけり。辨慶これを見て、あう奥方の軍兵は、心は剛にあり

けるぞや。退く風情の見えざるは、手並の程を見せんとて、もつて開いて、丁と打つたりけり。柴田も聞うる兵にて、かぶりの板にて受け流し、さらぬ體にて駈け通す。二陣に續いたる、龜井の六郎が、武藏殿の切り残しを、受け取つたりやといふ儘に、青江作三尺八寸横手切にかんしと斬る。龜井が腕や強かりけん、太刀の金や良かりけん、四枚胴を押し掛け、二十五差いたる征矢を掛け、しや腰の番をば、車切といふものにふつと斬つてぞ落しける。上は抜けてどろと落つれば、下は鞍に乗つたりけり。これを始めて七騎の人、入り違へ揉み違へ散々に斬つてぞ廻りける。斯かりける所に土佐の八郎高直と、龜井の六郎重清、むづと組んで二人が、兩馬の間へどうと落つる。龜井は無雙の剛の者、仇と組むならば、下大勢定めて折り逢ふべしと、色豫て覺り、土佐を取つて押へて、首ふつと掻き落し、立ち上らんとする所に、土佐が乳母の十郎が、透をあらせず折り逢うて、龜井が弓手の腕をば、水も溜らず打ち落す。龜井無雙の剛の者、心は高砂や高砂や松の緑と榮ゆれども、痛手を負ひぬれば、太刀を杖に突き今を限りと見ゆる。舍兄鈴木、下大勢の中にて戦ひしが、弟龜井は痛手を負ひ、存命不定なるを聞き、敵を四方へ追つ散らし、我が身を屹と見たりければ、痛手薄手の嫌なく、十三處手を負うたり。今は斯うよと思ひて、龜井を肩に引つ懸けて、城の内へつと入り、高き所に置き、やあそこで腹切れ龜井。南無阿彌陀佛と諸共に、鈴木は生年三十三、龜井の六郎二十六、刺し違へて死

紀州熊野の
住人
奉納か

にけるを惜まぬ者はなかりけり。

コトバ ッレ 武藏坊辨慶君の御前に参り、はや鈴木兄弟こそ討死仕つて候へと申しければ、ワキ判官
聞召されて、龜井がことは豫てより思ひ設けたること、無惨や鈴木、紀伊國より遙々と下り、
世になき主の方人して、討たれぬこそ無惨なれ。今朝より誦む御經も、早やほうなうの時分
になるに、防いでたべや武藏。太夫辨慶承り、今度は某が死番に當つて候と申しもあへず、御出
居へつゝと入り、鐵を厚さ五分に鍛はせ、桶皮胴と名付けたるを、刀溜かたなだまりに着たりけり。黒糸
緘の鎧、糸緋緘の鎧三領を重ねざつくと着、まびら刀首搔刀三腰までこそ指いたりけれ。長刀
こぞりはを打ち遠へ、鞍の前輪に締め付け、弓手に熊手おつ取つて、妻手に長刀を打ちかたげ、
膝にて馬に乗つたりけり。辨慶が駆け出づれば唯小山の動く如くなり。大勢の中へ割つて入る。
膝口高股馬の腹はらりくと引き破れば、將基倒の如くなり。この勢に恐れ、捨鞭打つて逃ぐ
る所へ辨慶駒を駆け寄せ、熊手を指し渡し、甲の天邊に引つ懸け、えいというて引き寄せ、下げ斬
りにしてぞ捨てにける。況んやかんわ唐土迄、その名を得たる辨慶が、今を最後の合戦に、
面を合はする者はなし。怒れる眼は黒雲の所々の晴間より、朝日のうつろふ如くなり。敵を塵
けて喚く音、雷電・電光・霹靂神・獅子・象・虎の吼うる聲、斯くやと思ひ知られたり。辨慶が二
度の驅に、奥方の軍兵は百八十騎討たれたり。今は向ふ敵のあらざれば、物臭い軍かな、思う

漢和か

乾反る

鐵の一種

つる事よとて、小高き所に駒駆け上げ、暫らく陣をぞ取つたりける。ワキかかりける所に、信夫
の庄司が嫡子、小太郎といつしもの、辨慶が以前の驅足に父を討たせ、一矢射ばやと狙ひしが、
早爰にて見付け斜ならず悦び、弓と矢を打ち番つて、かいたくつてひようと射た。辨慶がの
どどと控へたる、胸板にはつしと中り、小兵の矢の悲しさは、矢立に矢をばためすして、ひ
ぞりけるその矢が、内胃へからりと入つて、笛の鎖にひつしと立つ。上太夫へもの／＼とい
ふ儘に、矢を搔いかなぐつて見たりければ、鳥の舌にてや射たりけん、矢がらは抜けて根は留
まる。さしにも剛なる辨慶も、馬より下にどうと落つる。クドキ 太夫あら無念や、西塔の武藏と
て鬼神の様にいはれしが、斯程の細矢に中つて果敢なくならんする口惜しさよ。コトバ 太夫最後
に彼奴を斬らずば黄泉の障なるべし。さりながら以前の如く、馬に乗つて追ふならば、怖ぢて
左右なく近付くまじい。所詮虚死を始め、近付かん所を、斬つて呉ればやと思ひ、側なる胃引
つ懸けて虚死してぞたるみける。ッレ信夫この由見るよりも、さこそ人々の、鬼神の様に宣ひ
し、武藏坊辨慶をこそ、某手に懸け、射落して候へ、首取つて見せ申さんといふ儘に、怒物作
三尺八寸、眞甲に指し騎し揉みに揉うでぞ走りける。太夫辨慶鍬の隙よりも、見上げて屹と見
て、ッメ天晴器量やよい器量かな。下あつたら若い者を、辨慶が手に懸け失はん事の無惨さよ。
下太刀の寸は延びたるや。彼奴に一太刀打たれては、悪しかりなんと思ひて、近々と詰め寄せ、

牛起なるべし

増尾十郎權頭

うしおきにかつばと起き、狼藉なる奴めには、手並の程を見せんとて、側なる長刀おつ取つて追ひ詰めさらりと薙いだりけり。高勝斬つて落され、のつけに反す所を細首宙に打ち落し、朱に染うだる薙刀、弓手の肩に投げ懸け駒引き寄せて打乗り、城の内へつゝと入り、駒を彼處に乗り放し大薙刀に縋り、いやたんちたんちと漂ひ、あら苦しや兼房よ君は何處に、お座します。コトバ ヲキ兼房武藏が手を引いて、御前さして参る。

羽前國最上郡 義經記七、龜割山にて御産の事參照
高山重忠
義明。頼朝の爲に衣笠城を孤守して戦死す

ッレ判官御覽あつて、あれは武藏か。ッキさん候。ッレ聲を聞けば古の武藏、姿はただ鬼神の如し。羨ましやな武藏は、生をも變へず忽に荒人神となつたるぞや。それへ〜と仰せければ、太夫承ると申して、落椽にづんと上がり、甲を脱いでとうと置き、甲の袖を片敷いて今を限と見ゆるが、兼房を近付け、最後に若君を一目拜み申さんと云ふ。ッキ兼房は若君を抱き申し武藏が手にぞ渡しける。コトバ 太夫辨慶若君を抱き申し後れの髪をかき撫で、龜割山の峠にて御産あらせ給ひし時に、辨慶が参り産湯を引かせ申し、男子は七歳迄物あやかりと承る。若君の御果報あやからせ給はば、伯父頼朝に御あやかり候へ。戒力は御親父判官、弓は爲朝の御弓勢、二相を悟つて悪魔の者の恐れんは、平の秩父にあやからせ給へ。打物召され物の骨切つて、人に怖ぢられたらんは、ものその數にて候はねども、斯う申す武藏めにあやからせ給へ。命の長くわたらせ給はんは三浦の大助が百六になりしに、あやからせ給へと申せし事の夢となり、未だ十

にも足らずして、衣川の水の泡と消え果て給はん痛はしやと、はら〜と歎きければ、あら痛はしや若君は何のよしみをも、知召されざりしが、辨慶があらけなき、扮装にも怖ぢ給はず、胸板を下りに流るゝ血を御覽じて、いたいけしたる、御手にて掻き撫でさせ給ひつゝ、薙々と抱き付きわつと叫ばせ給ふにぞ、御前の女房お末の人、兼房、武藏も、消え入る様に、泣きにけり。コトバ ヲレ判官御覽あつて、武藏が最期に酒を飲ませよ兼房。ッキ 中承ると申して、長柄の銚子、紅葉の杯を御前に上ぐる。ッレ判官取り上げさせ給ひて、上これは二世迄をさすぞ賜はれ。辨慶餘りの忝さに、三度戴きたう〜と受け。ゆう〜とはほしけれども、笛が切れたる事なれば、血に交りてこの酒が、フッ 胸板を下りにさらり〜と流れけり。コトバ ヲレ判官御覽あつて、武藏が最期は近づいたるぞ。念佛勧めよ。ッレ承ると申して、兼房念佛を勧めければ、ッキ寄手の兵これ聞き、城の内に念佛の聞うるは、如何様武藏が腹を切るか。大剛の者の自害の様、いざ見習つて手本にせん。ッレ尤も然るべしとて我れ先にと亂れ入る。太夫判官御覽あつて、あは敵の近付くは。辨慶腹を切れ。兼房は防矢射よ。御經せんする間とて御座を立たせ給へば、ッキ辨慶は敵の呼ばはる聲音を力にし、大庭に下り、長刀に縋り又たんち〜と漂ふ。太夫判官御覽あつて、また打つて出づるか武藏。さん候。イロ判官思ひ續けて斯く許、サシ後の世もまた後の世も、廻り合へそむ紫の下雲の上まで。イロ ヲキ辨慶承り返歌と思しくて斯く許、六

道の巷の末に待てよ君、後れ先立つ習ありとも。ツメ 同音と斯様に申して堀の舟橋をかぶくと渡りけり。

奥の軍兵この由を見るよりも、あら恐ろしや又辨慶が懸かるは。爰を引けやと云ふ儘に、我れ先にとぞ逃げにける。衣川颯と追つ越し向のはばたにて漂蕩する兵を十七八騎斬り伏せ、此方の端へ歸らんとしたりしが次第に性根亂るれば、西向につゝ立つて薙刀眼に揺り立てて、光明眞言稱へつゝ生年三十八にして衣川の、立往生を惜しまぬものはなかりけり。

ヨトバ ッレ奥方の軍兵この由を見るよりも。あら恐ろしや又辨慶が人をたばかつて打たんとする計か。近う寄つて叶ふまじいぞ。遠矢を射よといふ儘に、指し取り引き詰め散々に射たりけり。武藏に中るその矢は、葦を束ねて横の板戸を突く風情。固より死したる辨慶にて、その身をちつとも痛まず。太夫かかりける所にぬまたての庄司が申しけるは、如何に方々。到つて心の剛なるものは、立ちながら死する習のあると申すに、誰かある弓の弭にてちつと突いて見よ。ッレ實にこれもいはれたりとて、二十騎三十騎、駈け寄せく立ちけれども怖ぢて左右なく近付かず。太夫ぬまたての庄司がこれを見て、臆病なる人々かな。其處退けぬまたて突かんとて、駒の手綱搔い繰つて、かつしくと歩ませ寄つて、弓の弭をおつ取り伸べ、怖づく、ツメかつばと突いた。固より死したる辨慶で枯木を倒す如くに、たんぶとまるびけり。まるびけるその前に、持

つたる長刀ひらりとするを見るよりも、ぬまたての庄司は、死したる者と知らずして、又切つて懸かると心得、氣も魂も身に添はず駒より下に轉び落ち浮きぬ沈みぬ流れて、衣川の堰にせかれて死んだりしを、貴賤上下押し並べて、悪まぬものはなかりけり。

一七 しぐれ

さて今一人の僧の發心の由來承り候はんと申せば、是も老僧なり。衣の破れたるに、七條を掛けて看經ありしが、だうぎやうに瘦せて色黒み、其のさま衰へてあれども、流石よき人にてぞあるらん。誠に道者と見えて、居眠りてまししくしを、はやく語り候へと責められて申すやう、面々の御發心のやうを承り候に、言語道斷に覺えて候。前世の宿執と存じ候。それがしが通世はさほどの事までは候はず。語り申しても中々無益にて候へども、御兩人御語り候に、語り申さねば、同心申し候はぬに似たり。工夫の暇惜しく候へども、聞召し候へ。

我が身は、河内の國楠木には一族にて候篠崎の掃部助と申す者の子に、六郎左衛門と申す者にて候が、親にて候者は、楠木の正成が爲には、隨分の者にて候間、一大事をも内談し、何事をも相計らひ候ひし程に、一門・他門、楠木にさる者ありと、人に知られたる者にて候なり。

遺跡*

正成討死の時も、一所にて腹を切りぬ。正行もゆゑのせきにて、我等が事をば、疎略なく候ひし間、我等も是が事をば、一大事に存じ候ひしなり。其の後正行討死し候ひし時は、一所にて身も討たれ候ひしかども、敵に首を取られずして、少し息の通ひけるを、知れる僧見あひて或所にかきて行き、看病せられて、不思議に命生き候うて、歸りて候へば、今の楠木正儀悦喜をなし、親にて候者を、正成が存じ候如く、互に思ひ合ひ候ひし處に、人づてに承り候へば、足利殿へ降参申すべき由を承り候程に、所存の外に存じ候間、楠木に逢ひ候うて申せし事は、「まことしからず候へども、足利殿へ御降参あるべき由承り候。まことさやうに思召し候や。」と申し候へば、「餘りに君の御恨めしき事ども御座候程に、さやうに思ひ立ち候。」と申せし程に、身が申すやうは、「君を御恨み候はば、我が身を捨てて、遁世し給ひてこそ、眞の御恨にては候へ。足利殿へ出でさせ給ひ候うては、君に弓を引き給はん事、御恨にては候はず。君の御運盡きさせ給ひ候を、見限り申し候うて、我が身を立てんが爲に、足利殿へ降参と人申すべし。降参の事はゆめく有るまじく候。などや是程の大事を思召し立ち候はば、先づ我が身甲斐々々しく候はずとも、承り候はず。」と申せしなり。楠木が申すやう、「御分定めて此の事をわろがらせ給はん」と存じ候うて、申さず候。」と申す程に、「我が身わろがり申し候はん事を思召して候御心を以て、諸人の嘲を思ひやらせ給へ。一代ならず官方にて討死仕り、名を後代に揚げ給ふ

(92)

*君雖不君
臣不可以
不臣、
父雖不父
子不可以
不子
(古文孝
經序)

が、御分の代として、未練の振舞口惜しき事にて候なり。何の御恨か御入り候べき。今の拜領も師の御恩にてこそ御わたり候へ。君君たらずと雖も、臣以て臣たりと言ふ古人の詞あり。只思召し止まり給へ。」と申して候へば、上洛して東寺にて管領に對面しけると承り候ひし程に、君の御運命も盡きさせ給ひぬ。身一人楠木を離れて、功をなす事有り難し。又、連れて降参は、本意を背き候間、是こそ善知識よと存じ候うて、遁世仕り候ぞや。

さる程に、河内の國篠崎を罷出で候ひし時、三つになり候女子一人、男子一人、二人の幼き者、妻にて候者共を打捨て出でし時は、流石に多年の夫妻のよしみと申し、名残惜しき事千萬に候ひしかども、是ぞ十分の遁世と思ひ切り、やがて關東へ修行に出で、松島の會下に三年候うて、其の後北國修行の志候ひし間、とてもかやうなる半出家の者は、諸國を廻り、如何なる知識にも結縁をも歎き、名所舊跡をも見て心をも慰め、又とても在り果つべき浮世の中ならねば、歩き倒れてと存じ候うて、日本國を廻り、西國をさして上り候程に、不思議に河内の國を通り候間、故郷篠崎の有様をも見ばやと思ひ候うて、身が蘆のほとりへ立寄りて見候へば、築地はあれども覆ひも無し。門はあれども扉もなし。庭には草深く生ひ茂り、家どもは皆こぼれ失せて、僅にあやしの賤が蘆三つ三つ残りたり。夫さへ雨風たまるべくもなし。見るに目も當てられず、涙を流し罷り通り候ひしが、其の近き道の邊に、淺ましき尉が一人田を打ちて見え

93)

たり。此の尉は如何にも古への事をば知りたるらんと存じ候うて、立寄りて問はばやと思ひ、「やあ尉殿よ、此所をば何と申す所ぞ。」と問ひて候へば、尉が著たりし日笠を脱ぎ候うて、「篠崎と申す所にて候。」と答へ申すなり。さて「如何なる人の御領ぞ。」と尋ね候へば、「篠崎殿の御領にて候。」と申す程に、さては我等が事をば知れるかと存じ候うて、それがし田の畔はらに腰を休め、此の尉も鍬を杖につき候うて、心靜かに事の仔細を語りけり。「是は篠崎の掃部助殿と申し、何事も人に勝れておはせし程に、楠木殿も一大事の御事に思召して、深く御頼み候うて、同じ御一族ながらも、賞翫御申し候ひしが、其の御子息に六郎左衛門殿とて、楠木殿京方へ御降参候を御恨み候うて、御遁世にて御座候が、御行方ゆきかたも知らず、當時は北國方に御座候とも聞え候。又御他界とも承り候。誠に御左右の有る事は候はず。」と申し候うて、涙を流し候間、それがしも涙を抑へて申すやう、「さて御身は御内うちの人か、又は御領の人か。」と申せば、「此の尉は御領の年頃の御百姓にて候。六郎左衛門殿御遁世の後は、當所荒れて、宮仕ひ申す者一人もなく候程に、我等は人数ならぬ身に候へども、御臺・御公達の御有様を見参らせ候うて、餘りに御いたはしく存じ候うて、私を打棄てて、此の五六年が間宮仕ひ申し候。六郎左衛門殿御遁世の時、三歳になり給ひし姫君、いとけなき若君を振棄てて、御遁世候ひし程に、母御のとかく御方便候うて、御はこくみ候ひしが、此の上藤様も飽かぬ別れの思にや、病者とならせ給ひ候

うて、去年の春の頃よりいたはらせ給ひ候ひしが、此の程は食事を絶やし給ひ候うて、早、御他界候うて、今日三日になり給ひ候が、此の公達の御歎を見申し候に、中々に目もくれ心も消ゆるばかりに覺え候なり。あれに見えて候松の下もとに、茶毘し申して候。此の幼き人は二人ながら、毎日泣く／＼茶毘所へ御参り候。今日も御供申すべき由申して候へども、よし、今日は供をせずとも、と仰せ候程に、人なみ／＼に此の田を打ち候なり。是も尉が爲にはあらず。公達の行末を思ひやり候うて、御いたはしく候程に、此の田を打ち候。此の尉をばおうちと申し、おうちならでは御頼み有り難く候程に、今日も公達の遅く御歸り候程に、あなたのみまぼり申し候へば、田を打つも身にそます候。」と申し候うて、さめ／＼と泣きにけり。

其の時餘りに不便に覺え、かゝる賤しき者だにも、かやうの情は知りたりけるに、我が身は餘りに邪見にて棄てける事よと存じ候うて、是こそ其の六郎左衛門入道よと、言はばやと思ひしかども、いや／＼、さては此の間の修行徒事なりと存じ候うて申すやう、「誠に有難くこそ候へ。如何なる人か、尉殿のやうなる志の人か候べき。あらいたはしや、世の中にかゝるあはれる事も候ひけるよと、其の幼き人の御歎思ひやるも、ともかくも申し難く存じ候。此の僧もさほどの事までは候はねども、さやうの思をして候なり。何よりも幼き者の父母におくれたるほどの、世に悲しきものはなかりけり。」と申して、衣の袖を顔に當てて泣き候へば、「さては御

僧も古へさやうの思をして御座候や。」と申し候うて、聲も惜しまず泣き居たり。やゝ久しくありて、それがし申すやう、「尉殿よ、これより後も見放し給ふなよ。如何に／＼父母の草の陰にて嬉しく思ひ給ふらん。又尉殿の子孫に報い候うて、末もめでたくあるべし。返す／＼も其の幼き人達いとほしみ給はば、佛神三寶も尉殿を守り給ふべし。暇申して尉殿、日も暮れ候へば。」とて立ち行きけるに、はる／＼と送り、懇に物語り申し、何につけても此の尉は、泣くよりの外の事はなし。我等も涙を抑へて、「尉殿は早とまり給へ。」と申せば、とまりぬ。

少し行きて見れば、げに或木の下に、人を茶毘して見え候程に、中々と存じ候うて行き過ぎ候ひしが、又心を返して思ふやう、發心して家を出で候時、初めは妻子を振捨てて出で行きしに、今は死して已に三日に當り候。茶毘所を見ながら通らん事、無道心なり。知らずば力なし、たま／＼法師の身とはなりて、立寄り陀羅尼の一遍も満てずして通らん事は邪見なり。かつうは利益もかけ、かつうは、亡者の草の陰にて怨みもあらん。返りて見ばやと存じ候うて、立寄り見るに、木陰にいとけなき二人の者つくばひゐたり。あれそれよと思ひて申すやう、「上藤達は如何なる御事なれば、かやうの所に御渡り候ぞ。」と問ひ候へば、其の返事をば言はで、「あら嬉しや、是は我等が母の御他界にて、今日三日になり候程に、骨を拾ひ候處に、今日しも御僧の御通り候事の嬉しさよ。恐れながら御經遊ばして給はり候はば、御利益にて候らめ。」と、か

き口説き申す間、其の時目もくれ心も消えて、さらに夢うつゝとも思はず候ひしなり。暫く心を取直し、此の幼き者をつく／＼と見候へば、姉は九つ、弟は六つなり。流石に下藤の子供にも似ず、かたちいたいけに見えたり。親子恩愛の道なれば、抱きつき、父よと名乗らばやと思ふ心は、千度百度候ひしかども、いや／＼、心弱く候うては、此の程の辛勞無になり、佛道に入り難しと存じ候うて、こらへて候ひし事、思召しやらせ給ひ候へ。

さて、これらが玉の手箱の蓋をば姉が持ち、懸子をば弟が持ちて、誰か教へけん、竹と木の端を持ちて、骨を拾ひけるが、尙言ふ言の葉もなく、袖を顔に押當てて泣き候ひし時、はるばるありて、それがし申すやう、「上藤達はいとけなく渡り候が、何とておとなしき者は候はぬか。みづから骨を取り給ふ。」と申せば、「我等が父にて候人は遁世し、未だ行くへも知らず候。其の後は唯、下のおうちと申す者一人候ひしも、今日は供をもせず。」とて、詞すくなになりて、涙に咽び、物をも言はざりし時、愚僧陀羅尼を読み候はんも聲も出でず、故郷へ二度來りけんことの悔やしさと、我が身を恨めしく思ひしなり。いや／＼、かくては叶ふまじ、陀羅尼を満てんと思ひて、満て候ひし折ふし、時雨さつとして、木の葉の露も涙の如く見え候ひしを、姉が見て申すやうは、「母にて候ひし人は、京の人にて渡り候ひしが、わらはに教へさせ給ひしは、歌の道には如何なる怖ろしき鬼神も、又疎き人も、聞きては心もやはらぎ、佛も納受し給

*力をいれずして天地を動かし、鬼神をもあはれと思はせ。男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

(古今集序)

ふなり。女の身として歌の道に心をつけずば、あさましき事と仰せ候うて、わらは七歳の年より、かたの如く文字をつらね候。只今思ひ出されて候。」とて、一首かくなん

草木までわれをあはれと思ひてや涙に似たる露を見すらん

此の歌を聞きて、強き心も失せ果てて、せん方なくして、露霜ならば既に消えぬべき心地して、いや／＼、今はつゝむとも叶ふまじ。我こそ汝が父の六郎左衛門入道よと、言はばやと思ひしかども、心弱くて叶ふまじ。年來思ひ立ちて遁世したる身の、今日、子といふ首枷を擔ふべきか。かく思ふ事は甲斐なき心かなと、我と心を恥ぢしめて後に、それがし申すやう、「此の歌こそ言語道断に遊ばして候へ。誠に神も佛も、いかではれと思召し給はざるべき。父母も草の陰にて、如何に嬉しく思ひ給はん。我等は物のあはれも、情の道も知らず、かゝる賤しき身にて候へども、今の御歌を聞きては、涙もせきあへず。いかで心あらん人聞き給ひて、御心の内を憐み給はで候べき。只今是を罷り通り、かゝる御いたはしき事を見参らせ候も、思へば前世の宿執にてこそ候らん。見放し難く思ひ参らせ候へども、中々暇申す。」とて、立出で候へば、姉が申すやう、「仰せの如く一樹の陰に宿り、一河の流れを汲むも、皆他生の縁とこそ承り候へ。又いつの世にか廻り合ひ参らせ候べき。返す／＼も御名残惜しくこそ候へ。殊更御經遊ばして給はり候事、申し盡くし難く候。」と言ひしも果てず、袂を顔に押當てて、聲も惜しませ

宿二樹下、
汲一河流、
一夜同宿、
一日夫妻、
（中略）皆是先世宿縁也
（説法妙
眼論應身
品）

*法恩寺
（異本）

泣きゐたり。弟は未だ聞分けたる事もなく、姉に取りつき、悶えこがれて泣くばかりなり。其の時更に心も消え、目も當てられず、何に譬へん方も無くて、唯腹を切るもかくぞと思ひ切り、立出で候程に、彼等も見送り候。それがしも見かへり見かへり行き候へば、これら母の骨をば此の蓋に入れ持ちて、我が宿の方へは行かずして、よそへ罷り候程に、又立返りて、「そなたへはいづくへ渡り給ふぞ。」と申せば、「是はほうにん寺と申す御寺に、都より尊き上人御下り候うて、七日の御説法にて候が、今日早五日になり候。人々参り候程に、我等も参り御聽聞申し、此の御骨をも納めばやと思ひ候うて、さて御寺へ参り候。」と申し候ひし程に、それがし申すやう、「あらいたはしや、いとけなき心にも、かやうに思ひ寄せ給へば、如何に母御の草の陰にて嬉しく思はせ給ふらん。さてもほうにん寺と申すは、是より如何程候らん。」と尋ねて候へば、「未だ知らず候へども、人の行くにまかせて罷り候。」と申す。「などや人を召具し給はで御渡り候ぞ。あまりに御いたはしく候ものかな。明日おうちとやらんをも召連れて、御参り候へかし。」と申せば、姉申すやう、「此の程参るべき由、おうちに申し候へば、いとけなき人の有るまじき事と叱り候程に、思ひながら参らす候。」と申す。「さらば御供申し候うて、上人をも拜み申し、結縁をも申し候はん。」とて、附きて行き候へば、なか／＼物も申されず。道すがら此の姉申し候は、「我等が父未だ生きてましまさば、御僧の年頃にこそ渡らせ給ふべきに、あさまし

や、如何なる罪の報にや、父には生きて離れ、母には死して別れをなす事の悲しさよ。成長者せいちょうしゃの事ならば、父御の面影は身に添ひて、憂き心の友ともなるべきに、情なの父御や。」と申し、聲も惜しまず泣きし時、弟が申すやう、「父御は佛になりてましますと、朝夕母御の仰せ候ひつるものを、さのみ泣き給ひそ。」と、こざかしげに申せし程に、それがし前後を失ひて、行く道も見えず候ひしなり。

さて此の御寺と申すは、聖徳太子の御建立也。元弘・建武の動亂に所領悉く滅亡して、拜殿立たずありたりしを、楠木が代になりて、所領をもとの如く返しつけ、修理をなし、京都より妙法上人を請じ下し申して、供養をのぶる由申す間、見ばやと思ひて行く程に、ほうにん寺も近くなりければ、げに貴賤・上下袖を列ね、道俗・男女市をなす。興・塵取・鞍置馬、幾千萬とも數知らず。既に三箇國の人々群集す。木の下、萱のもとまでも、皆人ならずといふ事なし。さる程に此の幼き者共、たうばの内へ入るべきやうもなし。何とあるらんと見候へば、「案内申し候はん。是は上人に近づき、申すべき事候。」とて、押分け押分け入る程に、誠に諸神諸佛も憐み給ふと覺えて、人毎に道をあけてぞ通しける。法會の座に到り、上人の御前に二人の者共跪き居たりけり。さて如何やうにあるらんと見れば、二三人ばかり隔てて、姉が手箱の蓋を上人の御前にさし置きて、三度禮して手を合はせ、跪き居たり。上人是をつくづくと御覽じて、

*たふば（塔婆）か

「をさなき人は如何なる人ぞ。」と御尋ねあれば、「是は楠木が一門に、篠崎六郎左衛門が子供にて候が、わらは三歳の時、父にて候者は楠木と中を違ひ、遁世して今に行き方も知らず候。此の程は母一人に添ひ奉り、浮世を明し暮して候が、有爲無常の習の悲しさは、母にて候者にさへ別れて、今日早三日になり候。御骨をだにも取るべき者なく候うて、兄弟おとといの者共取りて、箱に入れては候へども、置くべき所を知らず候うて、上人を頼み参らせんが爲に、是迄持ちて参り候。願はくは如何なる所にも納め、母を早く淨土へ入らせ給へと、回向して給はり候はば、偏に御利益にて有るべし。」と申せば、上人誠にあはれに思召し、とかくの御言葉もなく御涙に咽び給ひ、暫く物をも仰せられず。上人御落涙は限りなし。聴衆の人々も、遠きも近きも袖を濡らさぬ人ぞなき。

さて姉が袂より、一つの巻物を取り出し、上人に奉る。上人是を取りあげさせ給ひて、高々と遊ばし候ひしを承り候へば、

夫れ人間の界を聞けば、閻浮の衆生は命不定なりと申せども、其の中にも成人する迄、親に添ふ人の子多く候へども、如何なる宿執の報によつて、我等三歳の時父には生きての別れ、母には死しての別れとなりぬらん。今は早、頼む方なくなり果てて、迷の心は遣る方もなし。思のけふりは胸を焦し、悲しびの涙乾くまもなし。我が身のやうなる人しあらば、

愁への道を語り慰む方も有るべきに、まどろむ事もなき程に、夢にだにも見奉らず。たゞ身に添ふものは、有るか無きかの陽炎ばかりなり。三日を過しけん思は、たゞ千年萬年を暮すもかくやと思ひ知られたり。ましてや行末の悲しき事は遣る方ぞなき。露の命幾秋をか保つべきとも覺えず。かやうにみなし子となり果てて、誰かあはれとも問ふべき。唯願はくは我等二人を憐み給ひ、母諸共に一つ蓮の臺に迎へ給へ。

と、こざかしく年號日付まで書いて、奥に一首の歌を書きたり。

見る度に涙ぞまさる玉手箱ふたおやともに無しと思へば

玉手箱ふたとかけこの黒髪をいふかたもなき身をいかがせん

是を上人遊ばしも果てず、御衣の袖を顔に當てさせ給ひて泣き給ふ。道場の内の聽衆、貴賤・上下・道俗・男女、袖を絞らぬ人はなし。是を聞き見る人、或は元結を切り、刀に添へて上人の御方へ参らせ、御弟子になるもあり、或は女性は笠の下より髪を切りて上人に参らせ、發心する人もあり。其の外遁世する人數を知らず。其の時の愚僧が心の内思ひやらせ給へ。暫く御説法をも聽聞申したく候ひしかども、あはや棄てし絆きづなに繋がれん事ぞと驚き、目を塞ぎ思ひ切り、唯、合戦場あはせにて千騎萬騎が中へ斬入り候うて、一命を捨つるもかくやと思ひ、篠崎を出でしよりも、猶大事に候ひしなり。

さて、はるく罷り出で候うて、或木のもとに休み、思案仕る事は、座禪工夫も道なるべからず。所詮、高野山は弘法大師の入定の所、諸佛群集しよぶつぐんじふの靈地也。如何なる所と申すとも、此の御山にまさるべからずと存じ候うて、奥の院の傍らに柴の庵を結びて、一大事を修行せばやと思ひし心をさきとして、此の山に上りてよりこのかた、更に他念なし。我をも人も知らず、まして故郷の事をも知らず。只寝ても覺めても、念佛三昧にて月日を送り候。面々に交はり申す事も、今日初めに候へ。過ぎにし春の頃、河内より此の山へ参りて候人の、或人に會ひて物語りし候ひつるは、彼等が事を楠木が聞きて不便がり、其の時六つになり候ひし男子を取立てて、篠崎を取らせらるゝなり。又姉は比丘尼になりて候由、物ごしに承り候へば、心安くこそ候へと語りければ、二人の僧、有難き御發心にて候。殊更殊勝に覺え候とて、各、袖を絞りけり。

— 三人法師 —

後
篇

一星月夜

岩瀬與一太郎

治承四年十(一)月大(二)日(三) 武衛、常陸の國府に著き給ふ。佐竹は權威境外に及び、郎從國中に滿つ。然れば忽(四)の儀(五)なうして、情計策あつて誅罰を加へらるべきの山、常胤(六)・廣常(七)・義澄(八)・實平(九)已下の宿老の類、軍議を擬し、先づ彼輩の存案を度らんが爲めに、縁者たるを以て、上總の權介廣常を遣し、案内せらるゝの所、太郎義政は、即ち參すべき由を申し、冠者秀義は、其從兵、義政に超え、亦父四郎隆義平家方にあり、旁思慮あつて、左右なく參上すべからずと稱して、當國(十)金砂の城に引籠る。

源義光の玄孫、隆義の長子
常陸(七)

吾妻綱原文

四日。壬子。武衛著常陸國府給。佐竹者。權威及境外。郎從滿國中。然者莫楚忽之儀。熱有計策。可被加誅罰之由。常胤。廣常。義澄。實平。已下宿老之類。擬群儀。先爲度彼輩之存案。以縁者。遣上總權介廣常。被案内之處。太郎義政者。申即可參之由。冠者秀義者。其從兵軼於義政。亦父四郎隆義。在平家方。傍在思慮。無左右。稱不可參上。引込于當國金砂城。

而して義政は、廣常が誘引に依つて、大矢橋の邊に參するの間、武衛、件の家人等を外に退け、其圭一人を橋の中央に招き、廣常之を誅せしむる事大だ速なり。從軍或は頭を傾け歸伏し、或は是に戦ひ爰に逃る。其後秀義を攻め撃たんが爲に、軍兵を遣はさる。所謂、下河邊庄司行平・同四郎政義・土肥次郎實平・和田太郎義盛・土屋三郎宗遠・佐々木太郎定綱・同三郎盛綱・熊谷次郎直實・平山武者所季重以下の輩なり。數千の強兵を相率して競ひ望む。佐竹冠者、金砂に於て城壁を築きて、要害を堅めて、兼ねて以て防戦の儀を備へ、敢へて心を動かさず。干戈を動かし、矢石を放つ。かの城廓は、高山の頂に構ふるなり。味方の軍兵は、麓の谿谷に進めり。故に兩方の在所、既に天地の如し。然る間、城より飛び來る矢、多く以て味方の壯士に中る。味方より射る所の矢は、甚だ山岳の上に及び難し。又、巖石道を塞ぎ、人馬共に行歩を失ふ。是に依つて軍士徒に心府を費し、兵法に惑ふ。然りと雖も退去する事能はず。悉に箭を挿み相親ふの間、日既に西に入り、月又東に出づと云々。

五日(十一) 寅の刻に、實平・宗遠等使者を武衛に進じて申して曰く、佐竹が構ふる所の塞は、人力の破らんにあらず。其内に籠る所の兵は、又一を以て千に當らずといふ事なし。能く賢慮を廻らさるべき者と。是に依つて老軍等の意見を召さるゝに及ぶ。廣常申して曰く、秀義が叔父に佐竹の藏人といふ者あり。藏人は智謀人に勝れ、欲心世に越えたるなり。忠賞を行はるべきの

*名は義弘

*藏人の唐名

旨、恩約せられれば、定めて秀義滅亡の謀を加へんものかと。其議を許容せしめ給ふに依つて、即ち廣常を侍中が許に遣はさる。侍中廣常が來臨を悦んで、衣を倒にし是に相逢ふ。廣常が曰く、近日東國の親疎、武衛に歸往し奉らずといふ事なし。然るに秀義主、獨り仇敵となつて、太だ據なき事なり。骨肉なりと雖も、客なんぞ彼不義に與せしめんや。早く武衛に参り、秀義を討取り、件の遺跡を領掌せしむべきものと。侍中忽ち和順す。もとから案内者たるの間、廣常を相具して、金砂の城の後に廻つて、関の聲を作る。其聲殆ど城廓に響く。是れ計らざる所なり。秀義及び郎從等、防禦の術を忘れ、あわてて横行す。廣常彌々力を得て、攻め戦ふの間、逃亡すと云々。秀義は跡を晦すと云々。

六日・七日
の記事省略

八日丙辰 秀義が領所常陸の國奥七郡、并に太田・糟田・酒出等の所々を收公せられ、軍士の勳功の賞に宛て行はると云々。又逃亡する所の佐竹の家人十許輩出來するの由、風聞するの間、廣常・義盛をして生捕らしめ、皆庭中に召出され、若し害心を挾むべきの族、其中にあるや否や、其顔色を見計らしめ給ふの所に、紺の直垂の袴を著するの男、頻りに面を垂れ落涙するの間、由緒を問はしめ給ふ。故佐竹が事を思ふに依つて、首を繼ぐに據る所なきの由之を申す。仰に曰く、存する所あらば、彼誅伏の刻、何ぞ命を捨てざる者か。答へ申して曰く、彼時は、家人等は、其橋の上に参加せず、唯主人一身召出され、梟首せらるゝの間、後日の事を存じ逐電

す。然るに今参上する事、精兵の本意にあらずと雖も、相構へて拜調の次を伺ひ、申すべき事有る故なりと云々。重ねて其旨を尋ね給ふ。申して曰く、平家追討の計を差置かれ、御一族を亡さるゝの條、太だ不可なり。國敵に於ては、天下の勇士一揆の力を合せ奉るべし。然るに誤なき一門を誅せられれば、御身の上の驛敵は、誰人に仰せ退治せらるべきや。將又御子孫の守護は、何れの人たるべきや。此事能く御案を廻らさるべし。當時の如きは、諸人唯怖畏をなして、眞實歸往の志あるべからず。定めて又、譏を後代に残さるべき者かと云々。仰せらるゝの旨なく、入らしめ給ふ。廣常申して曰く。件の男、謀叛を存するの條、其疑ひなし。早く誅せらるべきの由と云々。然るべからざるの旨を仰せらる。之を宥められ、剩へ御家人に列し、岩瀬與一太郎と號す、是なりと云々。今日武衛、鎌倉に赴き給ふ。便路なるを以て、小栗十郎重成が小栗の御厨八田の館に入御し給ふと云々。(卷一)

白旗赤旗

平家物語
九、一二
頁) 參照
* 壽永三年甲辰、二月大

七日丙辰 雪降る。寅の刻、源九郎又殊なる勇士七十餘騎を引分けて、一谷の後の山に著く。越前こゝに武藏國の住人、熊谷次郎直實・平山武者所季重等、卯の刻に、窃に一谷の前路に廻り、海道より館の際を競ひ襲つて、源氏の先陣たるの由、高聲に名乗るの間、飛驒三郎左衛門

(一) 梶原平三
(二) 源平盛衰記
三七には庄
の三郎家長
とし、平家
物語九には
庄の四郎高
家・梶原源
太景季とす
(三) 教盛の子、
教經・業盛
の兄
(四) 盛衰記三七
には木村源
三成綱とす
(五) 經盛の子、
教盛の兄
(六) 知盛の子
(七) 經盛の嫡子
經俊の兄
(八) 元暦二年乙
巳、四月小

尉景綱・越中次郎兵衛尉盛次・上總五郎兵衛尉忠光・悪七兵衛尉景清等、二十三騎を引き、木戸口を開き之に相戦ふ。熊谷小次郎直家疵を蒙る。季重郎從天亡す。其後蒲冠者並に足利。秩父・三浦、鎌倉の輩等競ひ來る。源平の軍士互に混亂し、白旗赤旗色を交へ攻め戦ふ爲體、山を響かし地を動かす。凡そ彼の樊噲・張良と雖も、容易く敗績し難き勢なり。加之城廓石巖高く聳えて、駒の蹄通ひ難く、潤谷深幽にして人跡既に絶えたり。九郎主、三浦十郎義連已下の勇士を相具して、鴨越此山は猪鹿鬼風の外は通はざる險なりより攻め戦はるゝ間、謀を失ひ敗走し、或は馬に鞭つて一谷の館を出で、或は船に掉して、四國の地に赴く。本三位中將衛は、明石の浦に於て、景時・家國等が爲に生捕らる。越前三位源は、湊河の邊に到つて、源三俊綱が爲に誅戮せらる。其外薩摩守忠度朝臣・若狭守經俊・武藏守知章・大夫教盛・業盛・越中前司盛俊・以上七人は、範頼・義經等の軍中に討取る所なり。但馬前司經正・能登守教經・備中守師盛は、遠江守護定之を獲たり。(卷三)

顔はふはくとして

(八) 十五日辰 關東の御家人、内擧を蒙らず、功なうして、多く以て、衛府所司等の官を拜任す。各、殊に奇怪の由、御下文を彼輩の中に遣はさる。件の名字、一紙に載せ、面々に其不可を注

し加へらると云々。

下、東國侍の内任官の輩の中、

本國に下向する事を停止し、各、在京して、陣直公役を勤仕せしむべき事

副下す 交名の注文一通

右、任官の習、或は、上日の勞を以て、御給おんたまものを給はり、或は私の物を以て、朝家の御大事に償ひ、各、朝恩に浴する事なり。然るに東國の輩、徒に庄園の年貢を抑留し、國衛の進官を掠め取り、成功を募らず。自由の拜任、官途の陵遲、已にこれにあり。偏に任官を停止せしめば、成功の便りなきものか。先官當職をいはず、任官の輩に於ては、永く城外の思ひを停め、在京して陣役を勤仕せしむべし。已に朝列に廁まじはる。何ぞ籠居せしめんや。若し違つて、墨俣(二)すのまより東に下向せしめば、且は各、本領を召し改め、且は又斬罪に申し行はしむべきの狀件の如し。

元暦二年四月十五日

東國の住人任官の輩の事

兵衛尉義廉 鎌倉殿は悪しき主なり。木曾はよき主なりと申して、父を始め親昵等を相具し、木曾殿に參ぜしめんと申して、鎌倉殿に伺候せば、終には落人と處せられなんと候ひしは、何に

忘却せしむるか。希有の悪兵衛尉哉。

桐壺卷

楊貴妃

女郎花の風

に靡きたる

よりもなよ

び、撫子の

露に濡れた

るよりもら

うたく懐か

しかりしか

たち、けは

ひを思し出

づるに、花

鳥の……

(源氏物語

河内本桐

壺卷)

二物語と人々の上

源氏のめでたきふし

又例の人、「人々の有様はおろく聞きて侍りぬ。哀れにもめでたくも、心に沁みて覚えさせ給ふらむふし」仰せられよ。」と言へば、「いとうるさき慾深さかな。」などと笑ふく、

哀れなることは桐壺の更衣の失せの程、帝の歎かせ給ふ程のこと、長恨歌の女も思ひし限りあれば、筆及ばざりけむ。尾花の風に靡きたるよりもなよびかに、撫子の露に濡れたるよりもらうたく懐かしかりし御様は、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。

尋ね行く幻もがな傳にても魂の在所を其處と知るべく

とて燈火をかゝげつくして、眠る事なく眺めおはしますなどあるに、何事も残りの六十巻はみな推量られ侍りぬ。

また夕顔の失せの程のことも、空に打ち曇りて風冷やかなるに、いたく眺めて、

見し人の煙を雲と眺むれば夕の空もむつまじきかな

と詠みて、「まさに長き夜」など打誦し給ふところ、葵の上の失せの程の事も哀れなり。御わざ

葵卷

本書六四頁

参照

八月九月正

長夜、千聲

萬聲無了時

(白氏文集

一九)

夕顔卷

河内本桐

壺卷)

葵上の父左大臣

劉禹錫が女を哭する詩に

相逢相失

兩如夢、

爲雨爲

雲今不

知

葵上の同胞源氏の親友ころ(葵卷)名はあてき

須磨卷

も(須磨卷)

の夜、父大臣の間に迷ひ給へるなど、ことわりに哀れなり。にばめる御衣を奉り換ふとて、「我先立たましかば、深くそめ給はまし。」など思して、

限りあればうす墨衣淺けれど涙ぞ袖を潤となしける

とよみ給ふ所、又風荒らかに吹き、時雨うちしける程に、涙も争ふ心地して「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず。」とひとりこち給ふに、頭の中將参りて、

見し人の雨となりにし雲をさへいと時雨にかきくらすかな

とあるところ、又らうたくし給ふ童の、かざみの装束なべてよりも濃くて、いみじくくんじ漏りて候を、いと哀れに思して、「とりわきらうたくし給ひしかば、われを然なむ思ふべき。」と

慰め給へば、いみじく泣きて御前に候ふ所など、いと哀れなり。又御忌果てて君も出で給ひ、日頃さぶらひつる女房ども、おのく「あからさまに」などとて、おのがじし別れ惜しむところ、いたく哀れなり。又書き給へる御手習ども、大臣見て泣き給ひなどするも、すべて哀れなるなり。

須磨の別れの程の事も、葵の上の古里に、まかり申しにおはして、

鳥部山燃えし煙にまがふやと蜚の鹽やく浦見にぞゆく

とある所、又鏡臺に御髪搔き給ふとて見給へば、いと面瘦せたる影の、我ながら清らなるも哀

別れても…

慰めてまし

(須磨卷)

いとどしく

過ぎ行く方

の戀しきに

羨しくもか

へる浪かな

(伊勢物語

七段)

ふる里を峯

の霞は隔つ

れど眺むる

空は同じ雲

あか

(須磨卷)

旅人は袂涼

しくなり

けり關吹き

越ゆる須磨

の浦風

在原行平

(續古今

一〇、

旅)

れに覺えて、「此の影のやうに痩せ侍る。」とて、

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡の影ははなれじ

と聞え給へば、紫の上涙をひとめうけて見おこせて、

別るとも影だに留まるものならば鏡を見ても慰みなまし

とある所、又賀茂の下の御社の程にて、神にまかり申し給ふとて、

うき世をば今ぞ別るゝとどむらむ名をばたゞすの神に任せて

とある所、又出で給ふ曉、紫の上、

惜しからぬ命にかへて目のまへの別れをしはしとどめてしがな

と宣へるこそいと人わろけれ。なにの人数なるまじき花散里だに、

月かけの宿れる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを

とこそ聞え給ふめれ。又浦におはしつきて、渚に寄る浪のかへるを見給ひて、「うらやまし」と

うち誦じて、「眺むる空は同じ雲に」などある所、又、心づくしの秋風に海は少し遠けれど、

行平のそちの關越ゆると、浦浪いと近く聞えて、

戀ひわびてなくねにまがふ浦浪は思ふかたより風や吹くらむ

とよみ給ふ。八月十五夜の殿上の遊び戀しくて、ところく眺め給ひし昔を思ひやり給ふに

三五夜中新

里外古人心

(白氏文

集一四・

和漢朗詠

集上)

花宴巻に見

桐壺帝

朱雀院

(須磨卷)

もとの頭の

中將今は幸

相

明石巻

源氏の留守

宅、紫の上

なす

(明石巻)

の(明石巻)

君をわきて

あだし心を

我が持たば

末の松山浪

も越えなむ

(古今一〇、

東歌)

清少納言

すべて餘りになりぬる人の、そのまゝにて侍るためし、有り難きわざにこそあめれ。檜垣の

御。清少納言は、一條院の位の御時、宇治の關白世をしらせ給ひける初め、皇太后宮のときめか

紫式部日記、清少納言評の

大和物語上・檜垣集參照

中關白藤原道隆の誤か

皇后宮定子(道隆の女)なる

べし

(二) 清原氏。梨
臺五人の一

せ給ふ盛りに候ひ給ひて、人より優なるものとは思し召されたりける程の事どもは、枕草紙といふものにみづから書きあらはして侍れば、細かに申すに及ばず。歌詠みの方こそ元輔が女にて、さばかりなりける程よりはすぐれざりけるとかや覺ゆる。後拾遺などにもむげに少く入りに侍るめり。みづから思ひ知りて、申しこひて、さやうの事にはまじり侍らざりけるにや、さらではいといみじかりけるものにこそあめれ。

その枕草紙こそ心のほど見えていとをかしう侍れ。さばかりをかしようも哀れにもいみじくもめでたくもある事ども、残らず書きしるしたる中に、宮のめでたくさかりにときめかせ給ひし事ばかりを、身のけも立つばかり書き出でて、關白殿うせ給ひ、内(四)の大臣流され給ひなどせし程の衰へをば、かけてもいひ出でぬ程のいみじき心ばせなりけむ人の、はかばかしきよすがなども無かりけるにや、乳母の子なりけるものに具して、遙(五)なる田舎に罷りて住みけるに、青菜と言ふもの乾しに、とに出づとて、「昔の直衣姿こそ忘れぬ」と、獨りこちけるを見侍りければ、あやしの衣著て、つゞりといふもの帽子にして侍りけるこそいと哀れなれ。まことに、如何に戀しかりけむ。

(三) 定子
(三) 道隆
(四) 伊周
(五) 古事談第二
臣節(清少
納言零落之
後云々の
條) 参照

紫 式 部

(二) 村上天皇第十皇女、選子内親王、五代の間賀茂齋院たり
(三) 彰子、一條天皇中宮、藤原道長の女
(四) 紫式部日記 参照
(五) 一といふ文字をだに書き渡し侍らず、いとてづつにあさましく侍り
(六) 一條天皇
(七) 上東門院

男も女も、管絃の方などはその折にとりて勝れたるためし多かれど、いづらは末の世にその音の残りてやは侍る。歌をも詠み詩をも作りて、名をも書きおきたるこそ、百年千とせを経て見れども、たゞ今その主にさし向ひたる心地して、いみじく哀れなるものはあれ。さればたゞ一ことばにても、末の世にとゞまるばかりのふしを書きとゞむべきとは覺ゆる。繰言のやうには侍れど、盡きもせず羨しくめでたく侍るは、大齋院より、上東門院へ「つれづれ慰みぬべき物語やさふらふ」と、尋ね参らせ参へりけるに、紫式部を召して、「何をか参らすべき」と仰せられれば、「珍しき物は何か侍るべき、新しく作りて参らせ給へかし」と申しければ、作れと仰せられけるを、承りて、源氏を作りたりけるをこそ、いみじくめでたく侍れといふ人侍れば、又、いまだ宮仕へもせで里に侍りける折、かゝる物作りいでたりけるによりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたりとも申すは、何れかまことにて侍らむ。其の人の日記といふもの侍りしにも、参りける初めばかり、恥かしうも心憎くも、又添ひ苦しうもあらむすらむとおのおの思へりける程に、いと思はずにほげづき、かたほにて、一文字をだにひかぬ様なりければ、かく思はずと友達とも思はるなどこそ見えて侍れ。君の御有様などをば、いみじくめでたく思ひ聞えながら、露ばかりもかけくしく馴らし顔に聞え出でぬ程もいみじく、また皇太后宮の御事を限りなくめでたく聞ゆるにつけても、愛敬つき懐かしく候ひける程の事も、君の御

きの眼か
有様も懐かしくいみじく坐ししなど、聞えあらはしたるも、心にくぬ體にてあめる。かつはまた御心柄なるべし。

(12)

大 齋 院

また、昔のやうの宮腹の御有様、あまた承る中に、大齋院こそめでたくおはしましけむと覚えさせ給へ。たゞ今の時后にて坐さむ御方々は、華やかに今めかしくも、また心にくくもおはしまさむことわりなり。これはいつも珍しからぬ常磐のかけにて、有栖川の音より外は、人目稀なる御住ひにて、いつもたゆみなくおはしましけむ程こそ、限りなくめでたく覚えさせ給へ。さりながら御年なども若くはおはしまさむ程は、ことわりなりや。むげに老い衰へ、御世も末になりて、そのかみ参り馴れて侍りけむ人もをさく無く、今の世の人もはかくしく参る事もなき末になりてしも、九月十日よひの月あかりけるに、雲林院の不断の念佛の果てに参りたりける殿上人四五人ばかり、歸さに本院の御門の細目にあきたるよりやをら入りて、昔より心憎くいはれさせ給ふ院の内、忍びて見むと思ひけるに、人の音もせずしめくとありけるに、御前の前裁心に任せて高く生ひ茂るを、露は月の光に照らされてきらめきわたり、蟲の聲々かしがましきまで聞え、遣水の音のどやかにて、舟岡の風、風ひやかに吹き渡りけるに、御前の

少しはたらきて、薫物の香いと芳ばしく匂ひ出でたりけるだに、今まで御格子も参らで、月など御覽じけるにやと、あさましくめでたく覚えけるに、奥深く箏の琴を平調に調べられたる聲、ほのかに聞えたりける、さは斯かることごと、珍らかに覚えける、ことわりなり。さてかかる御有様を見けると、知らせ奉らざらむ口惜しさとて、人などの参る方へ立ち廻り給へりける、そこにも女房二三人ばかり物がたりして、もとより侍りけるに、いとをかしくて、琴などひき遊びて、明方になりてこそ内に歸り参りて、めでたかりつる事ども語り給ひけれ。

—無名草子—

三 墨 染

みどり子

近比、志賀の中將頼實と言ふ人いまそかりけり。飜おろし給ひて後は、今橋の僧正良縁となん聞え給へりしは、富家^{*}の大殿の、法性寺に住ませ給ひける年の長月ばかりに、彼の御所の前に、珍らかなるみどり子を、紅梅の衣に押し包みて、衣に斯く、

身にまさる物なかりけりみどり子はやらん方なくかなしけれども

^{*}攝政關白太
政大臣藤原
忠實、法名
圓理。悪左
府頼長の父

と書きて、捨てたる事侍りけるを、殿聞しめして、哀れとおぼしけるにや、「父母といはん者は、必ず尋ね來ん。ひらへ、憐むべし。」とて、御所にてなん育てさせ給ひて、中將まで成し給へるなるべし。

かくて、志賀と言ふ山里になん住み給ひける比、夕暮方に、あさましくやつれたる僧の、近く家を出でにけると見えて、月しろなど鮮かに見えたるが、出で來れり。中將折ふし、佛の御前にいまそかりけるが、見給ひて、「何處の者にか」と尋ね給ふに、「聊か申し入るべき事の侍るなり。委しく此の文に書きて侍れ」とて、投げ置きて去りぬ。

中將、何ならん、思ひ懸けぬわさかなと、不思議に覺えて、急ぎ文を見給ふに、「我は辱くも、殿の父にて侍るなり。平らかに身二つとならせ給ひしかば、如何にも身に添へ奉らばやと思ひ侍りしかども、すべき方なく貧しく侍りしかば、哀れとおのづからみそなはず人もやと思ひ給へて、捨て奉りしに侍る。今又、かく成り出でいまそかれれば、かしこくと、返すく嬉しく侍る。悲しき中にもと思ひて、身に添へ奉りたらましかば、めでたく果報の程は、あらはれざらましと覺え侍る。さても夫妻ともに、形の如くうき世の中を過ぎ侍りぬるに、此の廿日餘のさきに、彼に後れ侍れば、後世をとぶらはんとて、かくまかり成りて、所も更に定めず、母の後世をも、とひいませかしと思ひてなん、申すに侍る。」と書きたり。見るに心も身に添は

* 都いでて今日みかの原泉がは河風寒し衣かせ山
(古今九、羈旅)

す。されば、おはしつるは父にていまそかりけるにこそ。母堂の失せ給ふになん、家を出でて流浪の行者と成り給ふにこそ。悲しく覺え侍りければ、妻子に暇乞ひ給ふにも及ばずして、いづちともなく、足に任せておはしける程に、大和・山城の境の、河風寒み衣かせ山と詠みける泉河の北のはたに、夜のほのくとするになん、著き給ひにける。

さて、川の端にて、手づから髻切りて水に流しつゝ、興福寺の千覺律師の、東北院へ立ち入り給ひて、頭おろして、法名授かり給ひて、弘く國々修行して、父母の後世をとぶらひて、法のしるしども數多施して、めでたく智者にてなんいまそかりければ、僧正まで成り給ひけるなるべし。

此の事、愚なる心にも、哀れさ身に沁みて、やる方なく侍る。人の習、我が身世にありて、父母の後世をとぶらひ、功德をも造らんなどこそ思ふめるに、更に行末いと榮ゆべき榮花の藤の花を思ひ捨て、やすくもやつれ給へる墨染の袂に、道しばの露拂ひつゝ、辿り歩き給ひけん、心の中の貴さをば、争で三世の佛達の、見過させ給ふべきと覺え侍る。睦じく覺え給ひし妻子にも、又、かくともいふ事なく、夕されの空に走り出で給ひて、夜もすがら、いづちともなくおはしけん。げにく、とかく言ふべきにあらず侍る。

又、父母の心優にして情の深さ、昔より今まであるべしとも覺えず。身に優る物なしと書き

金葉集(卷一〇、雜下、
讀人不知)
の誤

詞書は

大路に子

なすてて

侍りける

おしくく

みに書き

つけ侍り

ける歌

とあり

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

の白浪

沙彌滿誓

(拾遺二)

〇(哀傷)

原歌

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

の白浪

沙彌滿誓

(拾遺二)

〇(哀傷)

原歌

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

の白浪

沙彌滿誓

(拾遺二)

〇(哀傷)

原歌

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

の白浪

沙彌滿誓

(拾遺二)

〇(哀傷)

原歌

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

の白浪

沙彌滿誓

(拾遺二)

〇(哀傷)

原歌

世の中を何

に管へむ朝

ぼらけ漕ぎ

行く舟の跡

て捨てぬる子の、かく榮えんには、「我こそ父母なれ」と言ひて來尋ぬる人も有るべし。又、

言の葉につけて、ほのかにそれよと知らずる族も侍るべきに、露知らずして過しけん、有難く

ぞ覺え侍る。母のみまかりて、父は流浪の桑門（まてびと）と成りて後、母の後世とひ給へとて、文を投げ

置き去りけん心の中、返すくもゆかしく哀れに侍り。いたく、よも、くだれる品の人には侍

らじ。歌は詠人知らずとて、詞花歌集に載れり。彼の集を披く度に、此の歌の處に至りて、す

ずろに涙のしどろなるに侍り。げに、哀れなるわざかな。何(三)にたとへん世の中を、漕ぎ行く舟

の跡の白浪。秋の田を、ほのかに照す宵の稻妻に事よせし天の下に、はかなくあだなる物、身

につまる物なしとて、腹かき分けて生めるみどり子を、空を仰ぎて捨てけんは、愚なるこゝち

し覺え侍れども、靜かに思へば後に問はざりけんに、心もいとど澄みて覺え侍り。(第三)

明雲大僧正

以往淡路國に、しばらく徘徊し侍りし事有りしかば、其の國見歩き侍りしに、藤野の浦と
言ふ所侍り。前は南向き、海漫々としてきはもなし。後は北山險阻にして、今にさかしき所侍
り。渚に添ひて、干潟をまもりて、彼の所には到り侍り。

おぼるげにも、人の通ふ浦にも侍らず。然あれども、藤野と言ふ名の、何となく睦じく覺え

て侍りしかば、たどるく罷りて侍りしに、怪しく、あさましき庵の破れ残る侍り。珍らかに

おぼえて見侍りしかば、庵の主は見え給はで、墨染の袈裟と、硯とばかり見え侍り。傍なる板

に、「北嶺禪閣大僧正明雲室也。」と書かれ侍り。さては、此所に住み給ふ世のおはしけるよと、

哀れにかしこくおぼえて、すゞろに涙の落ち侍りき。いまだ此所を出で給はざりければこそ、

硯・袈裟をば残して置きていまそかるらめと、思ひ侍りしかば、其の日の傾くまで侍りしに、

夕になりて、僧正山の上よりいまそかり、山櫻の花をなん手折り給ひて、下り給へり。「こは如

何にとよ。何とて尋ねいたりたるぞや。都の方に何わざの言の葉か侍るらん。今は天台を離れ

て、かくて侍らんとこそ思ひとりたれ。」と宣ひ侍りしに、御返事申すまでも及ばず、隨喜の

涙をせきかねて侍り

其の夜は御庵の傍に侍りて、何となく速懷ども申し出でて、互に袖を絞りて、さて有るべき

にも侍らざりしかば、泣くく別れ奉りき。公家にも用ゐられ、寺にも重んじ奉りて、萬づ執

務していまそかりしかば、さきにはいまそかりとも、大方にてこそいまそかるらめ、わきて身

に沁むまでは、後の世の事思し入り給はじと、此の日は思ひけがし奉りけん事、あさましき

とも、恐ろしきわざなるべし。

げに何と有るやらん。高位に昇り給ふ人は、いかにも情のわりなく、道心などもいまずるぞ

*慈雲房、
源顯通の二
男、天台座
主、大僧正
となる。壽
永二年源義
仲法住寺殿
を攻めし時
流矢に中り
て寂す。
平家物語二
(座主流)。
三(城南離
宮)八(法
住寺合戦)
等参照

とよ。ゆたかなるべき人すら、かやうにこそ後世を恐れて、人もなごさの邊に行きて、立つ浪吹く風につけて、無常をも觀ぜさせ給へるに、何をするともしなき拙き人の、いたづらと有るまに、其の事となき偽を構へ、あるまじき事のみを思ひて、ますく流轉の絆を多く我が身に付けて、此の身を引損するわざ、心憂しと言ひても、猶、餘りは多かるべし。

^{*}世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは淵になる
(古今一八、雜下)

されば閑かに思ひめぐらし給へ。昔盛り有りし人も、今は衰へ、昨日めでたかりし姿も、今日は衰れ、あすか河の淵は淵になり、淵は又淵になり、木草も同じく、枯野の原となり、山も枯れ海もあせぬる世の中にきはまりて危き身を持ち、何のいさみがあればか、爰住みよしと思はん。いとほしく愛しき妻子も、添ひ果つべきにあらず、遙に別れの期あるべし。たとひ萬年が間、命を保ちて侍るとも、別れの悲しく、命の惜しからん、おしなべて、何れも等しかるべし。さて、心とかゝるうき世にとどまりて、悲しみうつる事を、など憂しと思ふ事の無くて、昨日も過ぎ、今日も暮れて侍らん。朝にも消えずして、夕に及ぶまで命の長らへ侍るをば、げに不思議と思ふべきに、何時迄もあらんするやうにのみ思ひて、後世のわざをば露ばかりも思はで如何して、夕の煙を立て朝を迎ふるたよりのあらん。東西に走り廻る姿、げに、思ひ入れて見侍れば、哀れにも侍るかな。(第四)

— 櫻集抄 —

四 志深きは

鴨 長 明

^(一)安徳天皇の朝
治承五年養和と改元、養和二年壽永と改元

又、養和の頃かとよ。久しくなりて、確にも覺えず。二年が間、世の中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春夏日でり、或は秋冬大風大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實のらず、むなしく春耕し、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、或は地を捨てて堺を出で、或は家を忘れて山に住む。さまざまの御祈始まりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、みなもとは、田舎をこそ頼めるに、絶えて上る物無ければ、さのみやは操もつくりあへん。念じ佗びつゝ、寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまたま換ふるものは、金を軽くし、粟を重くす。乞食道の邊に多く、愁ひ悲しぶ聲、耳に充てり。

^(二)是日已過、命則衰滅、如小水魚、斯有何樂、(出曜經)

先の年、斯くの如く、辛くして暮れぬ。あくる年は、立ち直るべきかと思ふに、あまさへ、疫癘うち添ひて、勝るやうに跡かたなし。世の人、皆飢死にければ、日を経つゝきはまり行くさま、小水の魚の譬にかなへり。果てには、笠うち著、足ひき包み、宜しき姿したる者、ひた

(一)山城國葛野郡
(二)勝寶院第三世住職、彌勒寺法印と號す。源俊隆の男

すら家毎に乞ひ歩りく。かくわびしれたる者共、歩りくかと思れば、即ち倒れ死ぬ。築土のつら、路のほとりに、飢ゑ死ぬる類は數知らず。取り捨つるわざも無ければ、臭き香世界に満ち満ちて、變り行く貌有様、目も當てられぬ事多かり。況んや、河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。賤山がつも力盡きて薪にさへともしくなり行けば、頼む方なき人は、自ら家を毀ちて、市に出でて之を賣るに、一人が持ち出でたる價、猶、一日が命を支ふるに及ばずとぞ。怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白銀黄金の箔など所々に著きて見ゆる木の割れ相混れり。是を尋ねれば、すべ無き者の、古寺に至りて佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割り碎けるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心憂きわざをなみ見侍りし。

又、哀れなる事侍りき。さり難き女男など持ちたる者は、その思ひ勝りて志深きは、必ず先だちて死にぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま／＼乞ひ得たる物を、先づ護るによりてなり。されば、父子ある者は、定まれる事にて、親ぞ先だちて死にける。又母が命盡きて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ臥せるなども有りけり。

(一)山城國愛宕郡東河原
(二)山城國愛宕郡
(三)右京
(四)東海、東山、北陸、山陰、山陽、西海、南海
(五)長承三年

人數を知らむとて、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東の道のほとりに有る頭、總べて四萬二千三百餘なむありける。況んや、其の前後に死ぬる者多く、河原、白河、西の京、もろ／＼の邊地などを加へて言はば、際限もあるべからず。如何に、況んや諸國七道をや。近くは、崇徳院の御位の時、長承の比かとよ、かゝるためしはありけると聞けど、其の世の有様は知らず、まのあたり、いと珍らかに、悲しかりし事なり。

——方丈記——

五 鶯

(六)伊勢大輔の父

七條の南、室町の東一町は、祭主三位輔親が家なり。丹後の天の橋立をまねびて、池の中島を遙にさし出して、小松を長く植ゑなどしたり。寢殿の南の庇をば、月の光入れんとて、さざりけり。

春のはじめ、軒近き梅が枝に、鶯の定まりて巳の時ばかり來りて鳴きけるを、有難く思ひて、それを愛する外の事なかりけり。時の歌詠みどもに、かゝる事こそ侍れと告げめぐらして、「明日の辰の時ばかりに渡りて、聞かせ給へ。」と觸れまはして、伊勢武者の宿直してありける

に、「かゝる事あるぞ。人々わたりて聞かんずるに、あなかしこ、鶯うちなんどしてやるな。」と言ひければ、この男、「なじかは遣り候はん。」といふ。輔親、疾く夜の明けよかしと待ち明して、いつしか起きて、寢殿の南面を取りしつらひて營み居たり。

辰の刻ばかりに、時の歌詠みども集まり來りて、今や鶯鳴くと、うめきすめきしあひたるに、先々は巳の時ばかり必ず鳴くが、午の時のさがりまで見えねば、いかならんと思ひて、この男を呼びて、「如何に、鶯のまだ見えぬは。今朝はまだ來さりつるか。」と問ひ給へば、「鶯の奴は、先々よりも疾く參りて侍りつるを、歸りげに候ひつる間、召し留めて候。」といふ。「召し留むとは如何に。」と問へば、「取りて參らん。」とて立ちぬ。心も得ぬ事かと思ふ程に、木の枝に鶯をゆひつけて、持て來れり。大方あさましとも、いふばかりなし。

(二) 神頭、矢頭、
簇の一種
(三) 袖を腋の下
にまくりこ
む

「こは如何にかくはしたるぞ。」と問へば、「昨日の仰に、鶯やるなと候ひしかば、言ふかひなく逃がし候はば、弓箭とる身に心憂くて、じんどうをはげて射落して侍る。」と申しければ、輔親も、居集まれる人々も、あさましと思ひて、この男の顔を見れば、脇(二)かいとりて、いきまへ跪きたり。祭主、「とく立ちね。」と言ひけり。人々をかしかりけれども、この男の氣色に恐れて、え笑はず、一人立ち、二人立ちて、皆歸りにけり。興さむるなどは、こともおろかなり。(巻中、第七、可事=思慮=事)

— 十訓抄 —

増鏡第三ふ
ぢ衣巻参照

六 遠島御歌合 嘉祿二年七月

題

朝霞 山樓 郭公 萩露 夜鹿
時雨 忍戀 久戀 尋旅 山家

作者

左方

右方

女房 <small>後鳥羽院</small>	從二位家隆
前内大臣 <small>家良公</small>	小宰相
權大納言基家	正三位信成
沙彌道珍 <small>入道大納言忠信卿</small>	* 如願法師
侍從隆祐	下野
少輔 <small>家隆卿女</small>	散位長綱
散位親成 <small>信成卿息</small>	散位家清 <small>家長朝臣息</small>
藤原友茂 <small>入道左衛門督能茂子</small>	善眞法師

* 藤原秀能

女房

判

一番 朝霞

左持

女房

しほがまの浦の干潟のあけぼのに霞に残る浮島の松

右

從二位家隆

春の夜の朧月夜のなごりとや出づる朝日も猶霞むらむ

上輩・中輩。下輩。無量壽經に見ゆ大和國にあり。流を汲みて源を尋ねる故に、富の緒川の絶えせぬ道を興しつれば(新古今集序) 隱岐遷幸の承久三年以降 嘉祿二年家隆七十九歳の病を獲て蓬髪を名を佛性と改む。卒年不明

凡、歌を判する事は、道に執してゆるされたる者を選びて、難波のよしあしを分ち、わたつ海の深き浅きを定めしむ。然るを、花の都の昔、わづかに三十一字の詞をつらぬといへども、桑の門の今、三輩九品の勤めひまなければ、富の緒川の流を汲む事なく、わかぬ浦波岸を隔てて、十年餘り六年の春を送れり。今更にこの道を翫ぶにはあらねども、從二位家隆は、和歌所の舊き衆、新古今の撰者なり。八十餘りの命の露、未だあだし野の風に消え果てぬ程に、彼を召具して、今一度思ひくゝの詞を争ひ、しなくゝの姿をたくらべむと思ふ。これによりて、鴈の玉章の便につけて、うとからぬ輩に、十題の歌を召集めて、

書き番へり。人の數廣きに及ばざれば、昨日今日はじめて六義の趣を學ぶ輩も入りて、忍ぶの森の言の葉は風に散らむこと、旁憚り多けれども、且は執心の障を除かむが爲、人のそしりをかへりみず。此の歌、愚詠をもて家隆に合へる事、道にそむければ、然るべきにもあらねども、いそのかみ舊りにし年を伴ひて、殊更に是を番へり。抑八代集の歌は、昔時々見侍りしかば、佛もありながら、なほ明らかならず。況んや近き世の人々の歌の中にも、十餘年の間のは、一首も聞え及ばざれば、たとひ同歌をよめらむをも、見咎めがたく侍る。しかのみならず、六十のよはひ、老耄もことわり過ぎにたれば、只うはべに見ゆる姿ばかりを、おろく注し侍るべし。一番の左は、多くは勝つ事にて侍れども、これはいと目驚くものにはあらず。右歌、おぼろ月夜の後朝、まことに朝霞にたより有りて、言葉つゞき姿殊にをかしく侍る。しかれども、一番の左にことを寄せて、殊更勝劣を決せざるなり。

*嘉祿二年は御年五十七延應元年二月二十二日聖壽六十にて崩御

五番

左勝

侍從隆祐

朝日影まだ出でやらぬ足引の山は霞の色ぞうつろふ

右

山ひめの霞の袖もくれなゐに光添へたる朝日影かな

左歌、させる難なし。右歌、かすみの袖も紅に光そへたる朝日影、あまりはなやかに聞ゆるにや。左、うるはしく見ゆれば勝とすべし。

下野

九番 山櫻

左持

人ごころ移り果てぬる花の色に昔ながらの山の名もうし

女房

右

なぞもかく思ひそめけむ櫻花山とし高くなり果つるまで

家隆

*なげきこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞ先づつかれける

右歌、なげきこる山とし高くといへる歌の詞、をかしく見え侍る。左歌、人心といへることを詠むべからずと、定めらるゝよし聞き侍れども、世にまじらふべき歌にてもなければ、暫らく持と申すべし。

大輔(古今一九、誹諧歌)

左持

前内大臣

數ならぬみ山がくれを尋ねてぞ心の末の花も見るべき

右

小宰相

まがひこし雲をばよそに吹きなして峯の櫻に匂ふ春風

左右ともに優に聞え侍れども、こゝろの末の花、猶いろ深く見ゆ。以て左爲勝。

十七番 郭公

左持

女房

さのみやはつれなかるべき子規ねさめの空に一聲もがな

右

家隆

八幡山向ひの里のほととぎす忍びし方の聲も變らず

左、ほととぎすの題に未だ聞かざる心は、ほいなくや侍らむ。このうへ、歌がらも無下に見ゆる也。右歌、これもいたくすぐれたるものにあらず。持と申すべし。

廿番

左持

道珍

*橋の香をな
つかしみほ
とぎす花
散る里を尋
ねてぞとふ
光源氏
(源氏物
語、花散
里卷)

あけぼのは涙やもろき子規なくねに落つる森の下露

右

如願法師

今も猶むかしや戀ふる橋の花散る里になくほととぎす

左右ともに同じほどなれども、右歌の末の句、いかにぞや聞ゆ。仍以左爲勝。

廿五番 萩露

左

女房

した葉には色なる玉や碎くらむ風の吹きしく萩の上の露

右勝

家隆

又や見むまたや見ざらむ白露の玉置きしける秋萩の花

左歌、殊なるやうにも見えす。右歌、またや見む又や見ざらむしら露のといへる、殊にを

かしくもあはれにも侍り。尤も勝とすべし。

廿七番

左持

權大納言

高圓の末野のま萩露深し峰の秋風吹かずもあらなむ

右

信成

久方の天飛ぶ雁の涙さへ落ちて亂るゝ萩の上の露

左右ともに、殊によろしく見ゆ。仍爲持。

卅三番 夜鹿

左

女房

久方の桂の影になく鹿の光をかけて聲もさやけき

右勝

家隆

天の川秋の一夜の契だに片野に鹿の音をや鳴くらむ

右歌、秋のひとよの契だにといひて、かた野に鹿のと續きたる、殊にやさしく聞ゆ。惟喬

のみこ片野に狩して、棚機つ女に宿借りし昔までおもひよそへられて、をかしく侍り。左

の歌、すべてはいたくあしくもなきを、あらはに夜といふ事見えすなどいふ難や侍らんず

らむ。何様にも、右歌は秀逸と見ゆれば、尋常の歌ならぶべきにあらず。尤も勝とすべし。

*みこの宜ひ
ける、交野
を狩りて天
の川のほと
りに至るを
題にて、歌
よみて益さ
せと宜ひけ
れば、かの
馬頭よみて
奉りける
狩りくら
し棚機津
女に宿か
らむあま
の川原に
我は來に
けり
(伊勢物語
八二段)
上世文學選
三四頁参照

わくらばに
問ふ人あら
ば須磨の浦
に藻壁垂れ
つゝ佗ぶと
答へよ

在原行平
(古今一
八、難下)

隠岐國に
流されけ
る時に船
に乗りて
出で立つ
とて、京
なる人の
許に遣は
しける八
十島かけて
浦ぎ出でぬ
と人には告
げよ蟹の釣
舟

小野篁
(古今九、
露旅)

六十五番 露旅

左

數ならぬみ島がくれに年を経て、^(三)垂れ佗ぶと問はば答へよ

右勝

折しかむひまこそなけれ沖つ風夕立つ浪の荒き濱荻

左歌、聞きなれたるやうに侍れども、さしたる難はなきにやと見ゆるを、右歌、をりしかむひまこそなけれ沖つ風といひて、夕立つなみのあらし濱荻とつゞけたる、殊に珍しくをかしき様、尤も右爲勝。

女

房

家

隆

六十八番

左持

しるべせよ旅ねの夢のさめやすくつらき枕に残る月影

右

和^(三)田の原八十島かけてしるべせよ遙に通ふ沖の釣舟

左右ともに、しるべの心、同じ様よろしくは見ゆ。左、つらき枕に残る月影と云ひ、右、

道

珍

如願法師

やそしまかけてしるべせよといへる、いづれも分きがたければ、持とすべし。

七十番

左勝

かへり見し故郷遠く隔つなり過ぎにし方にかゝる白雲

右

かへりみる我が故郷は霧こめていや遠さかる大淀の浦

左歌、過ぎにし方にかゝるしら雲、よろしく見ゆ。右歌、前に殊なる事なし。左猶爲勝。

少

輔

長

綱

七十三番 山家

左勝

軒はあれて誰れか水無瀬の宿の月過ぎにしまゝの色や淋しき

右

淋しさはまだ見ぬ島の山里を思ひやるにも住むこゝちして

左右ともに、思ひやりたる山の家に侍るを、いまだ見ぬを思ひやらむよりは、年久しく見

家

隆

女

房

攝津國三島
郡、後鳥羽
院の離宮
増鏡第一、
おどろのし
たの巻参照
すみこしま
まの(増鏡、
ふぢ衣巻)

て思ひ出でむは、今少し志も深かるべければ、相構へて、一番は、左の勝と申すべし。

八十番

左

足引の山の庵に住む人もなほ高ねにや月を待つらむ

右勝

善眞法師

雲かゝる峯の松垣荒れにけり世を遁れにし年や経ぬらむ
左右ともに、させる難はなけれども、右、聊かやさしきやうなれば、可_レ爲_レ勝。

女房	勝一 負三 持六	家 隆
前内大臣	勝三 負三 持四	小宰相
基家	勝四 負一 持五	信成
沙彌道珍	勝二 負七 持一	如願法師
隆祐	勝五 負一 持四	下野
少輔	勝五 負二 持三	長綱

雲山
釋尊入滅の
所

親成	勝三 負二 持五	家清
友茂	勝二 負三 持五	善眞法師

七 第十八の願

法然

教法流布の世

涅槃經
卷二、純陀品第三
なほ盲龜の譬喩は雜阿含經一六に詳しく載す又、法華經には佛難_レ得_レ値_レ如_レ曇曇波羅華、又如_レ一眼之龜

値_レ浮木孔_レ
(卷八、妙莊嚴王本事品第二七)

夫れ流浪三界の中、何れの界に趣きてか釋尊の出世に遇はざりし。輪廻四生の間、何れの生を受けてか如來の説法を聞かざりし。華嚴開講の筈にも交はらず、般若演説の座にも列らず、鷲峰説法の場にも臨まず、鶴林涅槃の砌にも到らず。我れ舍衛の三億の家にや宿りけん。知らず地獄八熱の底にや住みけん。愧づべし、愧づべし。悲しむべし、悲しむべし。

當に今多生曠劫を経て、生れ難き人界に生れて、無量劫を送りて遇ひ難き佛教に遇へり。釋尊の在世に遇はざる事は悲しみなりと雖も、教法流布の世に遇ふ事を得たるは、是れ喜びなり。譬へば、目盲ひたる龜の浮木の孔に遇へるが如し。

火途・血途・
刀途
地獄・餓鬼・
畜生・餓鬼・
越・長壽天・
瞽盲瘖啞・
世智辨聰・
佛前佛後
人生・世間・
凡經二日
一夜有八
億四千萬
念・一念起
惡受・一惡
身・十念起
惡得・十生
惡身・
淨度苦
薩經)

我が朝に佛法の流布せし事も、欽明天皇天の下を知ろし召して、十三年壬申の年、冬十月一日初めて佛法渡り給ひし。それより前には如來の教法も流布せざりしかば、菩提の覺路未だ聞かず。こゝに我等如何なる宿縁に應へ、如何なる善業に由りてか、佛法流布の時に生れて、生死解脱の道を開く事を得たる。然るを今、遇ひ難くして遇ふ事を得たり。徒らに明し暮して已みなんこそ悲しけれ。

或は金谷の花を翫びて、遅々たる春の日を空しく暮し、或は南樓に月を嘲りて、漫々たる秋の夜を徒らに明す。或は千里の雲に馳せて、山の鹿を取りて年を送り、或は萬里の浪に浮びて、海の魚介を取りて日を重ね、或は嚴寒に氷を凌ぎて世路を渡り、或は炎天に汗を拭ひて利養を求め、或は妻子眷屬に纏はれて恩愛の羈斷り難し。或は讐敵怨類に遇ひて瞋恚の焰止む事無し。總じて此くの如くして、晝夜朝暮、行住坐臥、時として止む事無し。唯欲しきまゝに、飽くまで三途八難の業を重ね。然れば或文には、「一人一日中、八億四千念、念々中所作、皆是三途業。」と言へり。

此くの如くして、昨日も徒らに暮れぬ。今日も亦空しく明けぬ。今幾度か暮し、幾度か明さんとす。夫れ朝に開くる榮花は、夕の風に散り易く、夕に結ぶ命露は、朝の日に消え易し。是れを知らずして常に榮えん事を思ひ、是れを覺らずして常に在らん事を思ふ。然る間、無常

の風一たび吹きて、有爲の露長く消えぬれば、之を曠野に捨て、之を遠き山に送る。屍は終に苔の下に埋もれ、魂は獨り旅の空に迷ふ。妻子眷屬は家に在れども伴はず、七珍萬寶は藏に滿つれども益もなし。唯身に從ふものは、後悔の涙なり。

如意寶珠

阿彌陀如來
法藏比丘た
りし時建て
し誓願。無
量壽經に説
く
三惡道、即
ち地獄道・畜
生道
第一法忍。
第二法忍。
第三法忍、
其の名に關
しては諸説
あり

陀彌の四十八願と云ふは、無三惡趣、不更惡趣、乃至念佛往生等の願是れなり。總べて四十八願の中に、何れの願か一つとして成就し給はぬ願あるべき。願毎に不取正覺と誓ひて、今既に正覺を成り給へる故なり。然るを無三惡趣の願を信ぜずして、彼國に三惡道ありと言ふ者は無し。不更惡趣の願を信ぜずして、彼國の衆生、命終りて後、また惡道に返ると言ふ者は無し。悉皆金色の願を信ぜずして、彼國の衆生は金色なるも有り、白色なるも有りと言ふ者は無し。無有好醜の願を信ぜずして、彼國の衆生は、形好きも有り、惡ろきもありと言ふ者は無し。及至、天眼・天耳・光明・壽命、及び得三法忍の願に至るまで、之に於て疑ひを爲す者は未だ侍らず。唯第十八の念佛往生の願一つをのみ信ぜざるなり。

若し此の願を疑はば、餘の願をも信すべからず。餘の願を信せば、此の一願を疑ふべけんや。

唐の光明寺の和尚。道綽の淨土門に歸依し、専ら念佛を勤む。
大智度論一・二・同三五、佛說大意經等に見ゆる釋尊の本生譚
寶物集第一・三國傳記九・諸曲太世太子等にも見ゆ
中印度恒河流域の國名鹿野苑の在る國
須彌山の南部に當れる大洲の名

法藏比丘未だ佛に成り給はずと言はば、是れ謗法に成りなんかし。若しまた成り給へりと言はば、如何が、此の願を疑ふべきや。四十八願の彌陀善逝は、正覺を十劫に唱へ給へり。六方恒沙の諸佛如來は、舌相を三千世界に舒べ給へり。誰か是れを信ぜざるべきや。善導此の信を釋してのたまはく、「化佛、報佛、若しくは一、若しくは多、乃至十萬に遍して光を輝かし、舌を吐きて、遍く十方に覆ひて、此の事虚妄なりとのたまはんにも、畢竟して一念疑退の心を發さじ。」と宣へり。然るを今の行者達は、異學異見の爲に、容易く之を破らる。如何に、況んや報佛化佛の宣はんをや。

抑此行を捨てば、何れの行にか趣き給ふべき。智慧無ければ聖教を聞くに眼暗し。財寶無ければ布施を行するに力無し。昔、波羅奈國に太子ありき。大施太子と申しき。貧人を憐みて、藏を開きて、諸の寶を出して與へ給ふに、寶は盡くれども、貧しき者は盡くべからず。こゝに太子、海の中に如意寶珠ありと聞き、海に行きて求めて、貧しき民に寶を與へんと誓ひて、龍宮に行き給ふに、龍王驚き怪しみて、臚げの人には非ずと言ひて、自ら迎へて寶の床に据ゑ奉り、「遙に來り給へる志、何事を求め給ふぞ。」と問へば、太子のたまはく、「閻浮提の人貧しくて苦しむ事多し。王の髻の中の寶珠を乞はんが爲めに來たるなり。」と宣へば、王の言はく、「然らば七日此處に留まりて我が供養を受け給へ。其の後寶を奉らん。」と言ふ。太子七日を經

て珠を得給ひぬ。龍神其處より送り奉る。即ち本國の岸に到りぬ。

茲に諸の龍神歎きて曰く、「此の珠は海中の寶なり。猶取り返してぞよかるべき。」と定む。海神人に成りて、太子の御前に來りて曰く、「君、世に稀なる珠を得給へりと聞く。疾く我れに見せ給へ。」と言ふ。太子是れを見せ給ふに、奪ひ取りて海へ入りぬ。太子歎きて誓ひて曰く、「汝若し玉を返さずんば海を汲み干さん。」と言ふ。海神出でて笑ひて曰く、「汝は最も愚かなる人かな。空の日をば落しもしてん、早き瀬をば止めもしてん。海の水をば盡すべからず。」と言ふ。太子宣はく、「恩愛の堪へ難きをも、猶止めんと思ふ。生死の盡し難きをも猶盡さんと思ふ。況んや海の水多しと言ふとも限り有り、若し此の世に汲み盡さずば、世々を経ても必ず汲み盡さん。」と誓ひて、貝の殻を取りて海の水を汲む。誓の心真なるが故に、諸の天人悉く來りて、天の羽衣の袖に包みて、鐵圍山の外に汲み置く。太子一度二度貝の殻をもて汲み給ふに、海水十分が八分は失せぬ。龍王騒ぎ慌てて、我が住處空しく成りなんとすと佗びて、珠を返し奉る。太子是れを取りて都に還りて、諸の寶を降らして閻浮提の中に寶を降らさざる所無し。苦しきを凌ぎて退せざりしかば、之を精進波羅蜜と言ふ。

昔の太子は萬里の浪を凌ぎて、龍王の如意寶珠を得給へり。今の我等は二河の水火を分け、彌陀本願の寶珠を得たり。彼れは龍神の悔いしが爲に奪はれ、是れは異學異見の爲に奪は

*界名。鹹海を圍繞して一小世界を區別する鐵山なり

*上輩・中輩・
下輩、彌陀
の淨土に往
生する人の
三類

る。彼れは貝の殻をもて大海を汲みしかば、六欲四禪の諸天來りて同じく汲みき。是れは信心の手をもて疑謗の難を汲まば、六方恒沙の諸佛來りて與し給ふべし。彼れは大海の水漸く盡きしかば、龍宮の寶珠を返し取りき。是れは疑難の浪悉く盡きなば、謗家の寶珠を返し取りて、本願の寶珠を返し取るべし。彼れは返し取りて閻浮提にして貧窮の民を憐みき。是れは返し取りて極樂に生れて、博地の輩を導くべし。願はくば諸の行者、彌陀本願の寶珠を未だ奪ひ取られざらん者は、深く信心の底に納めよ。若し既に取られたらん者は、速かに深信の手をもて疑謗の浪を汲め。寶を捨てて手を空しくして歸る事勿れ。如何なる彌陀か十念の悲願を發して十方の衆生を攝取し給ふ。如何なる我等か六字の名號を稱へて三輩の往生を遂げざらん。永劫の修行は是れ誰が爲ぞ。功を未來の衆生に譲り給ふ。超世の悲願は、又何の料ぞ。志を末法の我等に送り給ふ。我等若し往生を遂ぐべからずと言はば、佛豈正覺を成り給ふべしや。我等また往生を遂げましや。我等が往生は佛の正覺に由り、佛の正覺は我等が往生に由る。若し生者の誓ひ之をもて知るべし。不取正覺の言限り有るをや云々。

— 元久法語 —

八 往 生

惡 人

親

覺

善人なほもて往生を遂ぐ、況んや惡人をや。然るを、世の人常に曰く、惡人なほ往生す、如何に、況んや善人をや。この條、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。その故は、自力作善の人は、偏へに他力を憑む心缺けたる間、彌陀の本願にあらず。然れど、自力の心を翻して、他力を憑み奉れば、眞實報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足の吾等は、何れの行にても、生死を離るゝ事あるべからざるを憐み給ひて、願をおこし給ふ本意、惡人成佛の爲なれば、他力を憑み奉る惡人、もとも往生の正因なり。よつて、善人だにこそ往生すれ、まして惡人はと、仰せ候ひき。

親鸞は、父母の孝養の爲とて、念佛一返にても申したる事、未だ候はず。その故は、一切の有情は、皆もて世々生々の父母兄弟なり。いづれもくこの順次生に佛になりて、救け候ふべ

(二) 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上
(三) 胎生・卵生・濕生・化生

きなり。我が力にて、勵む善にても候はばこそ、念佛を廻向して、父母をも救け候はめ。たゞ自力を捨て、いそぎ淨土の悟を開きなば、六道四生(二)の間、何れの業苦に沈めりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云々。

專修念佛の輩の、我が弟子、ひとの弟子といふ相論の候らんこと、もてのほかの仔細なり。親鸞は弟子一人もたず候。その故は、我がはからひにて、ひとに念佛を申させ候はばこそ、弟子にても候はめ。偏へに彌陀の御催しにあづかりて、念佛申し候人を、我が弟子と申す事、極めたる荒涼の事なり。つくべき縁あれば伴ひ、離るべき縁あれば、離るゝ事のあるをも、師を背きて、人につれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなど言ふこと、不可説なり。如來より賜はりたる信心を、我がもの顔に、とりかへさんと申すにや。かへすゝも、あるべからざる事なり。自然の理(三)に相協はば、佛恩をも知り、また、師の恩をも、知るべきなりと云々。

(三) 親鸞の弟子

念佛申し候へども、踊躍歡喜の心疎かに候こと、また、急ぎ淨土へ参りたき心の候はぬは、如何にと候ふべき事にて候やらんと、申し入れて候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯(三)

圓坊同じ心にてありけり。よく／＼案じみれば、天に踊り、地に踊るほどに歡ぶべき事を、歡ばぬにて、いよく／＼往生は一定と思ひ給ふべきなり。歡ぶべき心を抑へて歡ばせざるは、煩惱の所爲なり。然るに、佛かねて知ろし召して、煩惱具足の凡夫と、仰せられたる事なれば、他力の悲願は、斯の如きの吾等が爲なりけりと知られて、いよく／＼頼もしく覺ゆるなり。また、淨土へ急ぎ参り度き心の無くて、いさゝか所勞の事もあれば、死なんするやらんと、心細く覺ゆる事も、煩惱の所爲なり。久遠劫より今迄、流轉する苦惱の舊里は捨て難く、未だ生れざる安養の淨土は、戀しからず候ふ事、まことによく／＼煩惱の興盛に候にこそ。名残り惜しく思へども、娑婆の縁盡きて、力なくして終る時に、彼の土へは参るべきなり。急ぎ参り度き心無きものを、殊に憐み給ふなり。これにつけてこそ、いよく／＼大悲大願は頼もしく、往生は決定と存知候へ。踊躍歡喜の心もあり、急ぎ淨土へ参り度く候はんには、煩惱の無きやらんと、あやしう候ひなましと云々。

— 歎異鈔 —

愚 者

何よりも、こそ今年、老少男女多くの人々、死にあひて候らんこそ、哀れに候へ。たゞし、

親覺法名は
じめ範實、
神空、善信
等と號し、
更に愚禿親
覺と稱す
三定聚(邪
定・不定・正
定)の一、行
道退轉する
ことなく、
涅槃に至る
べき位

生死無常の理、精しく如來の説き置かせおはしまして候へば、驚き思し召すべからず候なり。
まづ善信が身には、臨終の善惡をば申さず、信心決定の人は、疑無ければ、正定聚に住する事
にて候なり。さればこそ、愚癡無智の人も、終もめでたく候へ。如來の御はからひにて、往生
するよし、人々申され候ひける、少しも違はず候なり。年頃各々に申し候ひし事、違はずこそ候
へ。かまへて、學匠沙汰せさせ給ひ候はで、往生を遂げさせ給ひ候べし。故法然聖人は、淨土宗
の人は、愚者になりて往生すと、候ひしことを、確に承り候ひし上に、物も覺えぬあさましき
人々の参りたるを御覽じては、往生必定すべしとて、笑ませ給ひしを、見參らせ候ひき。文沙
汰して、さかくしき人の参りたるをば、往生いかんがあらんずらんと、確に承りき。今に至
る迄、思ひあはせられ候なり。人々にすかさされさせ給はで、御信心たぢろかせ給はずして、
各々御往生候べきなり。但、人にすかさされさせ給ひ候はずとも、信心の定まらぬ人は、正定聚
に住し給はずして、浮かれ給ひたる人なり。乗信房に、かやうに申し候やうを、人々にも申さ
れ候べし。あなかしこく。

文應元年十一月十三日

乗信御房

善信

八十八歳

—末燈鈔—

文永八年
有三人惡口
罵加刀杖
瓦石念佛
故應忍

(法華經
卷四法師
品第二〇)

諸有無智
人惡口罵詈
等及加刀
杖者我等
皆當忍

(同卷五、
勸持品第
一三)
以杖木瓦
石而打擲
之

(同卷七、
常不輕菩薩品第二〇)
數々見擯出
(同卷五、勸持品第一三)
西天二十三祖。闍賓國の惡王
の爲に劍を以て首を斬らる

九 法華經の御故に

佐渡御勘氣鈔

日蓮

(二) 九月十二日に御勘氣を蒙つて、今年十月十日佐渡の國へ罷り候也。もとより學文し候ひし事
は、佛敎を究めて佛になり、恩ある人をも助けんと思ふ。佛になる道は必ず身命を捨つるほど
の事ありてこそ、佛にはなり候らめと推しはからる。既に經文の如く、「惡口罵詈、刀杖瓦礫、
數々見擯出」と説かれて、かゝるめに値ひ候こそ法華經をよむにて候らめと、いよ／＼信心
もおこり、後生も頼もしく候。死して候はば、必ず各々をも助け奉るべし。天竺に師子尊者と
申せし人は、檀彌羅王に頸を刎ねられ、提婆菩薩は外道に突き殺さる。漢土に竺の道生と申せ
し人は、蘇山と申す所へ流さる。法道三藏は面に火印をやかかれて、江南と申す所へ流されき。
(三) 南天竺の人、龍樹の弟子、一晉の人、本姓は魏、竺法汰の
目を神に施したるにより迦那 弟子となり姓を改む。後、羅 徽宗皇帝に火印せられて流さ
提婆の名あり。迦那は片目の 什の門に入りて上首となる。 舊學の徒に忌まれ、宋主之を
義。外道と法論を闘して勝ち 流す。後赦されて都に迎へら
たれども殺さる

*日蓮の師、
安房國長狭
郡清澄寺主

是皆、法華經の徳、佛法の故なり。日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の旂陀羅が子也。いたづらに朽ちん身を、法華經の御故に捨て參らせん事、豈石に金をかふるにあらずや。各々歎かせ給ふべからず。道善の御房にも斯う申し聞かせ參らせ給ふべし。領家の尼御前へも御ふみと存じ候へども、先づかゝる身のふみなれば、なつかしやと思さざるらんと申しぬると、便宜あらば各々御物語り申させ給ひ候へ。

十月 日

日 蓮 花 押

新尼御前御返事

甘海苔一ふくろ送り給ひ畢んぬ。又大尼御前より甘海苔畏り入つて候。此所をば身延の嶽と申す。駿河の國は南にあたりたり。彼の國の浮島が原の海きはより、此の甲斐の國波木井の郷、身延の嶽へは百餘里に及ぶ。餘の道千里よりも煩はし。富士河と申す日本第一のはやき河北より南へ流れたり。此の河は東西は高山なり。谷深く左右は大石にして、高き屏風を立て竝べたるが如くなり。河の水は筒の中に強兵が矢を射出したるが如し。此の河の左右の岸を傳ひ、或は河を渡り、或時は河はやく石多ければ舟破れて微塵となる。かゝる所を過ぎ行きて、身延

(一) 漢高祖の時、
の隠士、東
關公、嵇里
季、夏黃公、
角里先生
(二) 晉代の隱士
稽康、阮籍、
山濤、向秀、
劉伶、阮咸、
王戎
(三) 買名重忠、
法名妙日、
妻梅菊、法
名妙蓮
(四) 大唐西域記
又西域傳、唐
十二卷、唐
の總持寺の撰
沙門辯機撰
(五) 大慈恩寺三
藏法師傳、唐
十卷、唐の
慧立本、唐の
慧立本、唐の
撰
(六) 三十卷、宋
の眞宗景德
元年、吳景
沙門道彦撰

の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屏風を四つ衝立てたるが如し。峰に上つてみれば草木森々たり。谷に下つて尋ねれば大石連々たり。大狼の音山に充滿し、猿猴の鳴き谷に響き、鹿の妻を戀ふる音あはれしく、蟬のひびきかまびすし。春の花は夏に咲き、秋の葉は冬になる。たま／＼見るものは山樵が薪を拾ふ姿、時々訪らふ人は昔馴れし同法也。彼の商山の四皓が世を脱れし心地、竹林の七賢が跡を隠せし山も斯くやありけむ。峯に上つてわかめや生ひたと見候へば、さにてはなくして、蕨のみ竝び立ちたり。谷に下つて甘海苔や生ひたと尋ねれば、あやまりてや見るらん、芹のみ茂り伏したり。古郷の事、遙に思ひ忘れて候ひつるに、今此の甘海苔を見候うて、よしなき心思ひ出でて憂くつらし。片海・市河・小湊の磯のほとりにて昔見し甘海苔なり。色形味はひも變らず。など我が父母變らせ給ひけん、方違へなる恨めしさ、涙抑へ難し。此はさてとどめ候ひぬ。但し、大尼御前の御本尊の御事仰せ遣はされて、思ひ煩らひて候。其の故は、此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候ひし數多の三藏、漢土より月氏へ入り候ひし人の中にも、しるし置かせ給はず。西域・慈恩傳・傳燈錄等の書どもを開き見候へば、五天竺の諸國の寺々の本尊皆しるし盡して渡す。又、漢土より日本に渡る聖人、日域より漢土へ入る賢者等のしるされて候寺々の御本尊皆考へ盡し、日本國最初の寺元興寺・四天王寺等の無量の寺

*名は頼基、
北條の一門、
江馬光時の
臣

寺の日記、日本記と申すふみより始めて、多くの日記に残りなく註して候へば、其の寺々の御本尊又隠れなし。其の中に、此の本尊はあへてまします。人疑つて云はく、經論になきか。なければこそ、そこばくの賢者等は畫像にかき奉り、木像にも作り奉らざるらめと云々。しかれども經文は眼前なり。御不審の人々は經文の有無をこそ尋ねべけれ。前代に作りかかぬを難ぜんと思ふは僻案なり。例せば、釋迦佛は悲母孝養のために、切利天に隠れさせ給ひたりしをば、一閻浮提の一切の諸人知る事なし。但目連尊者一人此を知れり。これ又佛の御力也と云々。佛法は眼前なれども機なければ顯れず、時知らざれば弘まらざる事、法爾のつけさせ給ひて、影の身に隨ふが如く須臾も離れず。大罪小罪、大功德小功德、少しもおとさず、かはるく天に上つて申し候と佛説き給ふ。此の事は、はや天もしろしめしぬらん。たのもしし、たのもしし。

四月 日

*四條金吾殿女房 御返事

日 蓮花押

— 類聚高祖遺文錄 —

一〇 神皇正統の理

北畠親房

(一) 延元元年
(二) (建武三年)
(三) 延元三年
親房の嫡男
義良親王、
初名憲良、
後醍醐天皇
第八(七)皇
子、後村上
天皇

(三) 同十二月に、忍びて都を出でましゝて、河内の國に正成と言ひしが一族等を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りてわたらせ給ふ。もとの如く、在位の儀にてぞましゝける。内侍所も移らせ給ひぬ。神璽も御身に隨へ給ひけり。まことに奇特の事にこそ侍りしか。吉野の御幸に先だちて、義兵を興す輩も侍りき。臨幸の後には、國々にも御志ある類、數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。

(三) 又の年戊寅の春二月、鎮守府の大將軍顯家卿、また親王を先立て申し、重ねてうち上る。海道國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を経て、大和に入り、奈良の京になむ著きにける。それより所々の合戦數多度、互に勝負侍りしに、同五月、和泉の國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝに極まり侍りにき。苔の下にも埋もれぬものとは、たゞ徒らに名をのみぞ留めし。心憂き世にも侍るかな。

和泉式部
(家集三)
(金葉一)
○、(難下)

官軍、猶、心を勵まして、男山に陣を取りて暫らく合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退く。北國にありし義貞も、度々召されしかど、上りあへず。させ

同年閏七月、藤島に戦死。
義良親王、顯家の弟、春日少將。
新待賢門院藤原(阿野)廉子。
後醍醐天皇、建武元年正月、立太子、正延元二年七月、足利直義の爲に毒害せられ給ふ。御年十五、世に八歳宮と申す。
後醍醐天皇、第七皇子、春光院の春殿せられ給ふ。恒親王とて、同時毒害せられ給ふ。

る事なくて、空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。
さてしも止むべきならずとて、陸奥の御子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に叙し、陸奥の介、鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍、悉く、彼の節度に従ふべき由を仰せらる。親王は、儲の君に立たせ給ふべき旨、申し聞かせ給ふ。道の程も忝かるべし。國にてはあらはさせ給へとなん申されし。異母の御兄も數多ましき。同母の御兄も、前東宮恒良親王・成良親王ましきに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば忝し。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれしに、十日餘の事にや、上總の地近くより、空の景色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に、漂はれ侍りしに、いと波風夥しくなりて、數多の船、行方知らず侍りけるに、御子の御船は障なく、伊勢の海に著かせ給ふ。顯信朝臣は、もとより御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東國を指して、常陸の國なる内の海に著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて、東西に吹き分けらる。末の世には珍らかなるためしにぞ侍るべき。儲の君に定ませ給ひて、ためしなき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神の、とどめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせましき、御目の前

延元四年、ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむばかなき世も現とは見ず。壬生忠岑(古今一六、哀傷)孔子が哀公十四年春、西狩獲麟といふ句にて、春秋の筆を止めし故事。藤原經忠(元)應神天皇

にて、天位を繼がせ給ひしかば、いとと思ひ合せられて、尊くも侍るかな。また、常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州・野州の守も、次の年の春、重ねて下向して、各々國につき侍りにき。
さても舊都には、戊寅の年の冬、改元して、曆應とぞ言ひける。吉野の宮には、もとの延元の號なれば、國々も思ひくの號なり。もろこしには、かゝるためし多けれど、この國には無し。されど、四年にもなりぬるにや。大日本島根は、もとよりの皇都也。内侍所・神璽も、吉野におはしませば、何處か都にあらざるべき。
さても八月の十日あまり六日にや、秋霧に冑されさせ給ひて、かくれましきぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世は、今に始めぬ習ひとは知りながら、かすく目の前なる心ちして、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。昔仲尼は、獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申し述べて、素意の末をあらはさまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大臣の第へ遷し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば、仰せの儘にて、後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふ事二十一年、五十二歳おましき。
昔、仲哀天皇、熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神さりましき。されど、程なく胎中

暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門たゞき走りありきて、何事にかあらむ、こ
とごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年のなごり
も心細けれ。なき人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、な
ほする事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見
えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこ
そ、またあはれなれ。

(二) 兼好と同時
代の僧、兼
好・淨辨・慶
運と共に、
和歌の四天
王と稱せら
る。歌集を
草庵集とい
ふ。
(三) 兼好と同時
代の僧、伊
賀國佛性寺
遍照庵に住
す

「うすものの表紙は、とく損するがわびしき。」と、人のいひしに、頓阿が、「うすものは上下
はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ。」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一
部とある草紙などの、同じやうにあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、「ものを必ず一
具に整へむとするは、拙き者のすることなり。不具なるこそよけれ。」といひしも、いみじく覺
えしなり。すべて何もみな、事のとのほりたるは、あしきことなり。し残したるを、さてう
ち置きたるは面白く、生きのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を残すこと
なりと、或人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の缺けたることのみぞ侍る。

* 京都一條に
あり

「奥山に猫またといふものありて、人を食ふなる。」と、人のいひけるに、「山ならねども、
これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人とする事はあなるものを。」といふものありける
を、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありか
む身は、心すべきことにこそと、思ひける頃しも、ある所にて、夜更くるまで連歌して、唯一
人歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたす足のもとへ、ふと寄り來て、
やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はむとす。肝心も失せて、防がむとするに力もなく、足
も立たず、小川へころび入りて、「助けよや、猫また、よやく。」と叫べば、家々より松ども
ともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より
抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇・小箱など、懐に持ちたるも水に入りぬ。希有にして
助かりたるさまにて、はふく家に入りけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつ
きたりけるとぞ。

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。

世の人あひ逢ふ時、しばらくも黙止することなし。必ず言葉あり。そのことを聞くに、多く

は無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失多く、得少し。これを語る時、互の心に、無益の事なりといふ事を知らず。

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざること
は、たゆみなくつゝしみて、軽々しくせぬと、ひとへに自由なるとの、ひとしからぬなり。藝能
所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、愚にしてつゝしめるは得のものと成り。巧に
してほしきまゝなるは失のものと成り。

——徒然草——

三 吉野の奥

雲居の櫻

松

翁

後醍醐天皇

先帝の御時、世の中移り變りもてきて、吉野の假宮に渡らせ給ひ、憂かりし年も事の騒の内
に暮れ果てて、春立つと云ふばかりなる御節會の様も、いと悲し。

二月の半過ぎ行く程に、御庭の櫻の、やう／＼咲き出でたるを御覽せさせ給ひて、勾當の内

侍に仰せられける御歌、

新葉集二卷
下

こゝにても雲居の櫻咲きにけりたゞ假初の宿と思へど(上巻)

今いくかありて

同じ帝、吉野へ移らせ給ひける又の年の春、正月の末つ方、吉水の法印に賜はせける御歌、

み吉野の山の山守言問はむ今いくかありて花は咲きなむ

吉野執行、
法名宗信
太平記二一
先帝崩御事
参照

御返し

花咲かむ頃はいつともしら雲のゐるをしるべにみよしの山(同)

木曾の麻ぎぬ

後村上天皇
御治世の初
後宇多法皇
正中元年六
月崩御

同じ頃、兼好法師が玉津島に詣で給へるとて、尋ねおはせしに、いにしへ深く契りし事なり
ければ、いと嬉しくて、昔今の物語しけるに、「故法皇の和歌の道に深く思し入らせ、御なさ
けの浅からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし悲しさのまゝに、世にながらふべき心地も
あらざりけらし。せめてのやる方なさに、御後の世をもと思ひ給ふるまゝに、かゝる姿となり
侍れど、露の命の消え難くて、かゝらん世を目のあたりに見侍る事よ」と、袖を絞られける

に「われも先帝の御情の忘れ難くて、御跡をも慕はまほしく思ひ侍れども、さすがに思ひ返
し侍りて、柴の戸ぼそには侍れども、心は浮雲の風に漂ふらんさまして、はかなき夢路には故
郷の空にも通ひ、思ひとちむれば、西の御空にもあこがれ、春の朝には、吉野の花の梢にやど
り、秋の夕べの哀れを思ひつゞけては、さやけき月の影をも曇らせ、もろくも落つる木の葉を
見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて、染めにし墨の衣も空しく、旅行く人を
思ひ送りては、まだ見ぬ峰をも越ゆるにこそ。いかなる縁にふれ侍りて、人目絶えなん山深き
いはほの洞にもをさまらでとこそ、敷きて過し侍りぬれ。」といへば、「誠にさには候へども、
われ一とせ木曾の御阪のあたりにさすらひ侍りし時、山のたゝすまひ、川の清き流に心とまり
侍りしかば、こゝにぞ思ひとゞまりぬべき所にこそ侍れとて、

思ひたつ木曾の麻ぎぬ淺くのみ染めてやむべき袖の色かは

と詠じて、庵を引結びて暫し候ひしに、國のかみの鷹狩に人数多具し給うて、山深き庵のほと
りまでいまして、獵し給ふさまの、淺ましく、堪へがたかりければ、

こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

と眺め捨てて侍りき。それよりいづ方へ心をとむべくもあらずと思ひとりて、故郷に立ち歸り
て侍れば、世の中の亂れける程に、和歌をともしひととして心をすまし侍らんより外はあらじと
思ひ侍るにこそ。」と宣はせしにこそ、誠に世をそむく心はひとしかりけれど、そぞろに袖を絞
り侍りき。(下巻)

山 伏

寛成の皇子の、未だをさなうおはしましける時に、若き殿上人數多伴はせ給ひて、夏見の河
の河淀のほとりにて、鷹つかはせて御覽ありけるに、傍にいと大きな巖の、えもいはす面白
きに、小松の生ひいでたるありけり。みこ御覽せさせて、「この岩を歸りなむ時、皇居の御庭に
もて参れ。上に奉らむ。」と、實爲中將に宣はせければ、幼き御心をおしはかりて、みことうけ
せさせ給ふ。鳥など數多取らせ給うて歸らせ給へる時に、忠行侍従に、「岩を忘れ給うし。」と
宣はせければ、「民部大輔が力も強く侍れば、御跡より持て参り候ふなり。」と申して、皇居に
入らせ給ふ。

御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に、「ありつる岩を。」と召させ給ひけるに、「忠行の侍
従の仰言を承はりぬ。」と申し給へば、侍従を召して、「いかに」と尋ねさせけるに、「民部大輔
の御跡よりも参らんといひ侍りつる。民部を召させ給ひなむ。」と宣へば、むつがらせ給うて、
「中將にこそよく言ひつれ。などさはいふにか。」としをらせ給ひければ、中將の、ありつること

*長慶天皇、
後村上天皇、
第一皇子

を奏し給へば、をかしがらせ給うて、「誠に面白からむ岩こそ見まくほしけれ。民部が力こそゆゑしければ、もてきなんに、召させ給へ。」と宣はするに、中將立ち給うて、民部の大輔に、「かゝる事なんある、いかがしてむ。」と宣へば、すべき事こそあなれとて、御庭にありける小さき岩に松の枝を取り付けて、中將いと重げに持ちて、宮の御前にする奉れば、「これはいと小さくこそあれ。それにはあらじ。」となほむつがらせ給ひければ、民部大輔、「さればこそ。その岩を持ちて上の山を通り候ひしに、右左より山のさし出でて、道のいと狭き所にて、叶ひ難く、いかにせましとたゞよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來りけるが「岩にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ」とのゝしりける程に、「われもせんかたなさに斯くて侍る。いかにせまし。」と乞ひあへるに、「さらばすべき事こそあれ。」とて、數珠おしもみ、何やらんつぶやきて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすく通りて候ひし程に、山伏も行き過ぎしを呼び返して、「もとの如く祈り直してむ。」と云ひければ、「又行く先に細き道のいまさば、いかゞし給はむ。」といひし程に、げにもと思ひ侍りて、その儘もて参りぬ。」と言ひ給へば、上より始めてありつる人々、をかしがらせ給ふに、宮の御けしきもいとよくならせ給ひて、「げにさもあらむ事なり。その山伏を召し返せかし。」と宣はするに、「はや遙に行き過ぎて、いづち行くらむもしられず。」と申し給へば、「ほいなき事にこそあれ。とゞめて、民部大輔の大きなるそら言を、

すこしきやうに祈らせむものを。」と宣はせける。まことに行く末頼もしき御事にこそと、いとせめて覺え侍りき。(同)

—吉野拾遺—

三 幽 玄

世 阿 彌

目きかずの眼にも

ことごとく物敷を究めずとも、假令、十分に七八分究めたらん上手のその中に、殊に得たる風體を、我が門體の形木にし究めたらむが、しかも工夫あらば、これ又、天下の名望を得つべし。さりながら、げには十分に足らぬ所あらば、都鄙上下に於て、見所の褒貶の沙汰あるべし。凡そ能の名望を得る事、品々多し。上手は目利かずの心にあひ叶ふ事難し。下手は目利きの眼に合ふ事なし。下手にて目利きの眼に叶はぬは、不審あるべからず。上手の目利かずの心に合はぬ事、是は目利かずの眼の及ばぬ所なれども、得たる上手にて、工夫あらん爲手ならば、又目利かずの眼にも、面白しと見るやうに能をすべし。此の工夫と、達者とを、究めたらん爲

手をば、花を究めたとや申すべき。されば、此の位に到りたらん爲手は、如何に年よりたるとも、若き花に劣る事あるべからず。されば、この位を得たらん上手こそ、天下にも許され、又遠國田舎の人までも、遍く面白しとは見るべけれ。(花傳書、風姿花傳第五、奥義)

柔かなる心を

一、能に萬づ用心を持つべき事。假令、怒れる風體にせん時は、柔かなる心を忘るべからず。これ、如何に怒るとも、荒かるまじき手だてなり。怒れるに、柔かなる心を持つこと、珍しきことわりなり。又、幽玄の物真似に、強きことわりを忘るべからず。是れ一切舞・働・物真似、あらゆる事に住せぬことわりなり。又、身を使ふうちにも心根あるべし。身を強く動かす時は、足踏を盗むべし。足を強く踏む時は、身をば靜に持つべし。これは筆に見え難し。相對しての口傳なり。(花傳書、風姿花傳第七、別紙口傳)

原題

淺深之事

氣のんき、平

能に心に懸けて思ふべき事あり。細かになければ、面白からず。さて細かなる心を心がくれば、能委小さく見ゆる相あり。又、大やうにせん^(一)と心がくれれば、見所少くて、のさになる相あ

舞と歌

り。この分目すべて、大事也。先づ細かなるべき所をば、いかにも細やけて、大やうなるべき所をば、大やうにすべきかなり。この分目、殊に、能を知らでは叶ふべからず。よく、師に問ひて、之を明らむべし。然れども、大方心得べきやうあり、二曲、振、風情、萬づにつけて、心を細かにして、身を大やうにすべし。能く、心に掛けて、定心に持つべし。總じて能は、大なる形木より入りたる能は、細かなる方へも行くべし。小さき形木より育ちたる能は、大なる方へは左右なく行くまじきなり。大の中には小あり、小の中には大なし。よく、工夫すべし。大小にわたるは廣き能なるべし。大寒氷解、小寒云々。(覺習條々)

原題

幽玄之入塚事

幽玄の風體の事、諸道諸事に於て幽玄なるを以て上果とせり。殊更當藝に於て、幽玄の風體第一とせり。先づ大方は、幽玄の風體目前に現れて、之のみ見所の人も賞翫すれども、幽玄なる爲手さうなく無し。是れまことに幽玄の味はひを知らざる故なり。さるほどに、その境へ入る爲手無し。抑、幽玄の境とは、まことには、如何なる所にてあるべきやらん。先づ世上の有様を以て、人の品々を見るに、公家の御た、すまひの、位高く、人望世に變れる御有様、是れ幽玄なる位と申すべきやらん。然らば、唯美しく柔和なる體、幽玄の本體也。人體のどかな

(二) 人體に同じ

(三) 老體・女體・軍體

(三) 身強動、足弱、身弱動、足弱、身弱動 (花鏡)

(四) 原本のまゝ

る粧よそぎ、人ないの幽玄なり。又、言葉優しくして、貴人、上人の御ならはしの言葉遣をよくよく習ひ窺ひて、假初なりとも、口より出さんする言葉の優しからん、是れ言葉の幽玄なるべし。又、音曲に於て、節懸り美しくくたりて、なびくくと聞えたらんには、是れ音曲の幽玄なるべし。舞は、よくく習ひて、人ないの懸り美しくて、靜なる粧にて、見所面白くば、是れ舞の幽玄にてあるべし。又、物真似には、三體の姿、懸り美しくば、是れ幽玄にてあるべし。又、怒れる粧、鬼神などになりて、身なりをば、少し力動に持つとも、又美しき懸りを忘れずして、動十分心、又、強身動、有足陷あしおちを心にかけて、人ない美しくば、是れ鬼の幽玄にてあるべし。この色々を心中に覚えすまして、それに身をよくなして、何の物真似に品を替へてなりとも、幽玄をば離るべからず、例へば、上藤・下郎・男女・僧侶・田夫・野人・乞食・非人に至るまで、花の枝一房づつかさしたらんを、押並めて見る如し。その人の品々は變るとも、美しの花やと見ん事は、皆同じ花なるべし。この花は人ないなり。姿をよく見するは心なり。心といふは、このことわりをよくく分けて、言葉の幽玄ならん爲には、歌道を習ひ、姿の幽玄ゆげん爲には、尋常なる仕立ての風體を習ひ、一切悉く物真似は變るとも、美しく見ゆる一懸りを持つ事、幽玄の種と知るべし。唯動もすれば、其の物々の真似ばかりをし分けたるを至極と心得て、姿を忘るゝ故に、左右無く幽玄の境に入らず。幽玄の境に入らざれば、上果に到らず。上果に

* 原題

* 妙所之事

到らざれば、名を得る上手とはならぬなり。さるほどに名人は左右無く無きなり。唯此の幽玄の風の大切なる所を肝要にして、積古すべし。此の上果と申すは、姿懸りの美しきなり。唯返す返す、身なりを心得て嗜むべし。然れば、究めくは、二曲を始めて、品々の物真似に至るまで、姿美しくば、孰れも上果なるべし。姿悪くば、孰れも俗しやくなるべし。見る姿の數々、聞く姿の數々、皆押し並めて、美しからんを以て、幽玄と知るべし。此のことわりを我と工夫して、其の主しゆになり入るを、幽玄の境に入る者とは申すなり。此の品々を工夫もせず、ましてそれにも成らで、唯幽玄ならんとはかり思はば、生涯幽玄はあるまじきなり。(同)

妙とはたへなりとなり。たへなると云ふは、形なき姿なり。形なき所妙體也。抑、能藝に於て、妙所と申さん事、二曲を始めて、立ちふるまひ、あらゆる所に、此の妙所はあるべし。さて云はんとすれば無し。若し此の妙所のあらん爲手は、無上の其の物なるべし。然れども、又、生得、初心よりも此の妙體の面影のある事もあり。その爲手は知らぬとも、目きゝの見出す見所にあるべし。唯大方の見物業の見所には、何とやら面白きと見る見風あるべし。是れは究めたる爲手も、我が風體にありと知るまでなり。「すは其處をする」とは知るまじきなり。知らぬを

は申しにきき也。了俊申されしは、歌詠みども集めて、歌をば詠ますして、歌を沙汰ある事、第一稽古なり。又衆議判の歌合に、一度もあひぬれば、千度二千度の稽古にもます也。互に是非を沙汰しあらはす故に、人はさ心得たれども、我はさは心得ずなど言ふ事有る也。

一、上手達者の位になりて、自在の時は、題とてたてて置くべからず。一首が、さながら題の心になりかへりぬれば、必ず題の字を詠まねども、相違なき也。

一、得たる者の歌は、何ごとを言ひ出したるも、ひとふし興ありて面白き也。初心の者は羨しく思ひて似せんとすれば、無心所著の何ともなき、ほれたることを詠み出づる也。是は何をあそばし候ぞと人の問へば、我もえ知らずと言ひて、たは言を詠む也。よく／＼慎むべし。初心の時は、たゞうちむきて、一首さは／＼と理のきこゆるやうに詠むべし。その位に至らずして達者のまねをすれば、をかしきかど出来る也。

昔、貫之、
歌、心たく
みに、たけ
及び難く、
言葉強く、
姿面白きま
まを好みて
餘情妖艶の
體をよます
(近代秀歌)

一、幽玄體は、まさしくその位にのり居て、納得すべき事にや。人の多くは、幽玄なる事よと言ふを聞けば、たゞ餘情の體にて、さらに幽玄にはあらず。或は物哀體などを心得て、貫之も

*亡父卿は、
寒夜の冴え
果てたるに
燈火幽かに
そむけて、
白の淨衣の
すけたり
しを上げか
り打かけて
紐結びて、
その上にふ
すまをひき
張りつゝ、
そのふすま
の下に桐火
桶を抱きて
膝をかの桶
にかけて、
唯獨り閑疎
として、床
の上にうそ
ぶきて詠み
給ひける也
(桐火桶)

物つよきをば詠み侍りしが、幽玄被群の體をば詠ますと、定家書き給へり。物哀體をば、歌人のたしなみ詠むなり。

一、歌詠まぬ時、抄物を見渡して、晴の歌を詠まんとては、抄物をば、さは／＼と取置きて、何も無くして案じたるがよきなり。古抄物を見て、ちとづつ書付け置きて詠みたる歌は、何としても、同類もあり、よき歌無き也。さやうに詠みつくれば、辭になりて、晴の歌詠まれず。昔、女などは、或は臥し、或は燈火を幽かに挑げて、心細くして案じたる人もあり。西行が、一期行脚に出でて歌を詠みし故、行道して案じ、或は、北面の戸を細めに開けて月のかげを見、定家は、南面を取拂ひて真中に居て、南を遙に見晴して、衣紋正しく著て案じ給ひき。これは、内裏仙洞等の、晴の御會にて詠むやうに、遠はずしてよき也。俊成は、いつも煤けたる淨衣の上ばかりうちかけて、桐火桶にうちかゝりて、案じ給ひしなり。かりそめにも、自由に臥したりなど、案じたりし事はなし。われ／＼も、自然寢覺めなどに詠みたるを、起きて見れば、必ずよくもなかりしなり。

一、先達も後生も、古今をば、片手に放たず持つべきなり。歌をもそらに覺ゆべき事也。

— 徵書記物語 —

中世文學選終

昭和三年十月二十八日印刷
昭和三年十月三十日發行

定價金六十錢

編者 島津久基

發行者 矢島一三
東京市神田區表神保町二番地

印刷者 上條勇
東京市牛込區早稻田橋卷町一〇七番地

印刷所 康文社印刷所



著作權所有

中世文學選

發行所

中興

東京市神田區表神保町二番地

〔電話〕
神田區 東京四一三三



■ 高等學校國文科新教科書 ■

文學士 島津久基先生編

上世文學選

洋裝美本全一册
定價 金五拾錢

中世文學選

洋裝美本全壹册
定價 金六十錢

近世文學選

洋裝美本全壹册
定價 金六十錢

何れも同じ體裁で各冊の中を前篇・後篇に分け、前篇には主として創作を收め、後篇には鑑賞・批評等論文に近いものを收めました。

排列の順序は力めて文學史的にし、頭註を附し、教授に便にし、教授者の任意に授け得られるやうに留意し、編纂されて居ります。

發行所

東京市神田區表神保町
東京市神田區三番

中興館

317
1385

